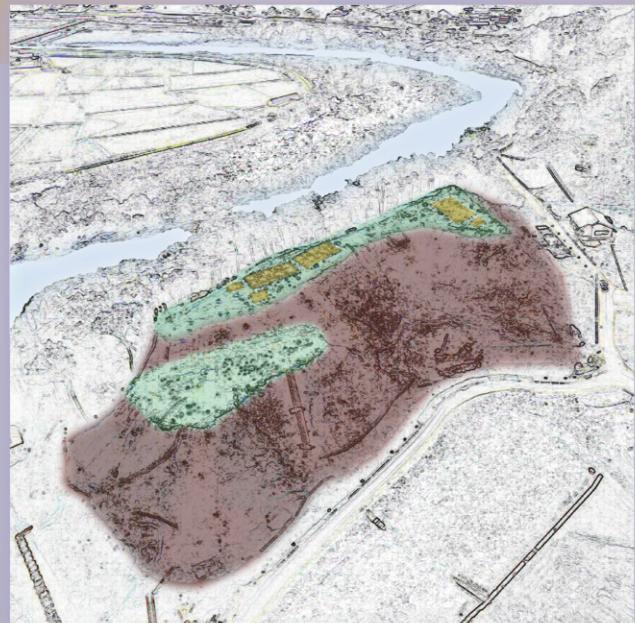


鶴岡城跡

一般国道9号(大田鶴岡道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書1



2018年6月

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会

静間城跡

一般国道9号（大田静間道路）改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 1

2018年6月

国土交通省松江国道事務所
島根県教育委員会



静間城跡全景

序

国土交通省では、平成 24 年度より、一般国道 9 号（大田・静間道路）の改築事業に着手しています。この事業は、一般国道 9 号の隘路区間の解消、緊急時の代替路線の確保、医療・観光・物流活動を支援することを目的として実施するものです。

道路整備にあたり、埋蔵文化財の保護に十分留意しつつ関係機関と協議を行っていますが、回避することのできない埋蔵文化財については、文化財保護法に基づいて必要な調査を実施し、記録保存を行っています。本事業においても、大田・静間道路建設地内にある遺跡について島根県教育委員会の協力のもとに発掘調査を実施しました。

この報告書は平成 28 年度に実施した、大田市静間町地内に所在する静間城跡の発掘調査結果をとりまとめたものです。今回の調査では、大規模な建物跡や貿易陶磁を含む多くの遺物も見つかっており、丘陵上に築かれた居館的な機能を兼ね備えた山城であることがわかりました。本報告書がふるさと島根県の歴史を伝える貴重な資料として、学術並びに歴史教育のために広く活用されることを期待します。

最後に、当所の道路整備事業にご理解、ご支援をいただき、本埋蔵文化財発掘調査および調査報告書の編纂にご協力いただきました地元の方々や関係諸機関の皆様に対し、深く感謝いたします。

平成 30 年 6 月

国土交通省中国地方整備局

松江国道事務所長 鈴木 祥弘

序

島根県教育委員会では、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、平成 28 年度から一般国道 9 号（大田静間道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施しています。本書は、平成 28 年度に実施した静間城跡の発掘調査成果をとりまとめたものです。

今回の調査では、山城である静間城跡のほぼ全域を発掘調査いたしました。山城全域を発掘した事例としては県内初であり、これまで城の斜面を含めた調査事例も少なかったため、山城の全体構造を解明する上で大変有益な調査となりました。

また、山城の残りも非常に良く、大規模な建物跡や貿易陶磁を含む多くの遺物も見つかっており、丘陵上に築かれた居館的な機能を兼ね備えた山城であることが判明しました。

これらの調査成果は島根県の歴史を明らかにする上で欠くことのできない貴重な成果であり、本書が地域の歴史や埋蔵文化財に対する理解と関心を深める一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたりご協力いただきました国土交通省中国地方整備局松江国道事務所をはじめ、大田市教育委員会、静間まちづくりセンター、地元住民の皆様並びに関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成 30 年 6 月

島根県教育委員会

教育長 鴨木 朗

例言

1. 本書は、国土交通省中国地方整備局松江国道事務所から委託を受けて、島根県教育委員会が平成28年度に実施した一般国道9号(大田静間道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、大田市静間町地内に所在する静間城跡の成果をとりまとめたものである。
2. 調査組織は次のとおりである。

調査主体 島根県教育委員会
平成28年度 現地調査
【事務局】 萩 雅人(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長)、渡部宏之(総務課長)、池淵俊一(管理課長)
【調査担当者】 今岡一三(調査第一課長)、阿部賢治(調査第一課嘱託職員)、坂根健悦(調査第一課臨時職員)、佐野木信義(同臨時職員)
成29年度 報告書作成
【事務局】 萩 雅人(島根県教育庁埋蔵文化財調査センター所長)、石橋 聰(総務課長)、池淵俊一(管理課長)
【調査担当者】 今岡一三(企画幹)、阿部賢治(調査第二課嘱託職員)、角森玲子(同臨時職員)
3. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々、関係機関から御指導、御協力をいただいた。(五十音順、所属・役職は当時)

【指導者】
井上寛司(島根県文化財保護審議会委員)、中井 均(滋賀県立大学文学部教授)、山根正明(元松江市史料編纂室専門調査員)
【協力者】
岩名健太郎(静岡県教育委員会文化財保護課主査)、金澤雄記(島根県文化財保護審議会委員)、重根弘和(岡山県立博物館学芸員)、静間まちづくりセンター、田中克子(NPO法人アジア水中考古学研究所理事)、西田宏子(公益財団法人根津美術館顧問)
4. 発掘調査作業(安全管理、発掘作業員の雇用、機械による掘削、測量等)については、島根県教育委員会が株式会社堀工務店へ委託した。
5. 掃図中の北は、測量法による第Ⅲ平面直角座標系X軸方向を指し、座標系のXY座標は世界測地系による。また、レベル高は海拔高を示す。
6. 本書で使用した第2図は国土地理院発行の1/25,000地図を使用して作成したものである。
7. 本書に掲載した写真は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て今岡が撮影した。
8. 本書に掲載した遺構・遺物実測図の作成は、調査担当者がを行い、遺物・遺構の浄書は整理作業員が行った。
9. 本書の執筆は、第3章の遺物概要及び第4章第2節を阿部賢治が行い、その他の執筆、編集は今岡が行った。
10. 本書に掲載した遺物及び実測図・写真などの資料は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センター(松江市打出町33番地にて保管している)。

凡　例

1. 本文、図版中の表に用いた遺構略号は次のとおりである。
SB：堀立柱建物、SD：溝、SX：墓その他の遺構、SK：土坑、SE：井戸
2. 本文、挿図、写真図版中の遺物番号は一致する。
3. 遺物実測図の▲印は釉際を示す。
4. 本書で用いた遺物の分類及び編年観は基本的に下記の各論文、報告書を参考にした。
 - 備前市教育委員会『備前窯詳細分布調査報告書』備前市埋蔵文化財調査報告 11 2013 年
 - 愛知県史編纂委員会編『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 濑戸系』2006 年
 - 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995 年
 - 太宰府市教育委員会『太宰府条坊跡 XV－陶磁器分類編－』太宰府市の文化財第 49 集 2000 年
 - 森田 勉 「14～16 世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究』2 1982 年
 - 上田秀夫 「14～16 世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究』2 1982 年
 - 小野正敏 「15、16 世紀の染付椀、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 1982 年
 - 瀬戸哲也「14・15 世紀の沖繩出土の中国産青磁について」『貿易陶磁研究』35 貿易陶磁研究会 2015 年
 - 片山まさみ「高麗・朝鮮陶磁の概要」『山陰における高麗・朝鮮陶磁』山陰中世土器検討会 2017 年
5. 表紙の題字は飯塚敏員氏による。

本文目次

第1章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査の経緯	
第2節 調査の経過	
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	4
第3章 静間城跡	7
第1節 調査の概要	
第2節 中世遺構の調査	
第3節 古墳時代遺構の調査	
第4章 総括	74
第1節 静間城跡の特徴と性格	
第2節 出土遺物の様相	
第3節 まとめ	

挿図目次

第1図	静間城跡の位置	1
第2図	静間城跡の位置と周辺の遺跡	5
第3図	静間城跡縄張図	8
第4図	静間城跡中世遺構面全体図	10
第5図	主郭第1ベルトセクション図①	11
第6図	主郭第1ベルトセクション図②	12
第7図	主郭第2ベルトセクション図	13
第8図	主郭第3ベルトセクション図	14
第9図	主郭第4ベルトセクション図	15
第10図	主郭東端セクション図	16
第11図	主郭遺構配置図	18
第12図	SB01実測図	19
第13図	SB02実測図	20
第14図	SB02出土遺物実測図	21
第15図	SB03実測図	22
第16図	SB03出土遺物実測図	23
第17図	SB04実測図	24
第18図	礎石建物1実測図	25
第19図	礎石建物2実測図	25
第20図	SX02実測図	26
第21図	SX02・05実測図	27
第22図	SX03実測図	28
第23図	SX04実測図	28
第24図	土里1調査前実測図	29
第25図	土里1完掘状況図	30
第26図	土里1・飛碟石出土状況図	30
第27図	土里2セクション図	31
第28図	主郭1遺物出土状況図	32
第29図	主郭1出土遺物実測図	33
第30図	主郭2遺物出土状況図	34
第31図	主郭2出土遺物実測図(1)	35
第32図	主郭2出土遺物実測図(2)	36
第33図	主郭2出土遺物実測図(3)	37
第34図	主郭2出土遺物実測図(4)	38
第35図	主郭2出土遺物実測図(5)	39
第36図	主郭2出土遺物実測図(6)	40

第37図	主郭2出土遺物実測図(7)	41
第38図	主郭2出土遺物実測図(8)	45
第39図	主郭2出土遺物実測図(9)	46
第40図	主郭2出土遺物実測図(10)	47
第41図	主郭1・2出土遺物実測図	48
第42図	北郭中世遺構配置図	49
第43図	SB05実測図	50
第44図	礎石建物3実測図	50
第45図	鍛冶炉及び焼土検出状況図	51
第46図	1号炉実測図	51
第47図	1号炉出土遺物実測図	52
第48図	2号炉実測図	52
第49図	北郭遺物出土状況図	53
第50図	北郭包含層1出土遺物実測図(1)	54
第51図	北郭包含層1出土遺物実測図(2)	55
第52図	北郭包含層1出土遺物実測図(3)	56
第53図	SE01実測図	57
第54図	SE01出土遺物実測図	58
第55図	静間城跡古墳時代遺構面位置図	59
第56図	北郭古墳時代遺構配置図	60
第57図	S101実測図	61
第58図	S101出土遺物実測図	62
第59図	S102実測図	62
第60図	加工段1～3実測図	63
第61図	北郭包含層2出土遺物実測図(1)	64
第62図	北郭包含層2出土遺物実測図(2)	65
第63図	静間城跡エレベーション図	75
第64図	静間城跡出土陶磁器一覧	83

表目次

第1表	出土土器観察表	67
第2表	出土錢貨計測表	70
第3表	出土石製品観察表	70
第4表	出土金属製品観察表	71
第5表	出土鍛冶滓観察表	73
第6表	静間城跡出土陶磁器集計表(個)	79
第7表	静間城跡出土陶磁器組成円グラフ(%)	79
第8表	中国磁器の組成(%)	81

写真図版目次

- | | | | |
|-------|---|-------|--|
| 図版 1 | 1. 調査前風景
2. 主郭 2 調査前風景 | 図版 18 | 1. SE01 断ち割り状況
2. SI01 遺物出土状況 |
| 図版 2 | 1. SB01 完掘状況
2. SB02 完掘状況 | 図版 19 | 1. SI01 床面検出状況
2. SI01 完掘状況 |
| 図版 3 | 1. SB03 完掘状況
2. SB04 完掘状況 | 図版 20 | 1. 加工段 1 ~ 3 完掘状況
2. 北郭古墳時代遺構完掘状況 |
| 図版 4 | 1. SB04・土壙 1 検出状況
2. 磐石建物 1 完掘状況 | 図版 21 | 1. SB02・03・主郭 1 出土遺物
2. SB03・主郭 1・主郭 2 出土遺物 |
| 図版 5 | 1. 磐石建物 2 完掘状況
2. SX01 完掘状況 | 図版 22 | 1. 主郭 1 出土遺物 外
2. 主郭 1 出土遺物 内 |
| 図版 6 | 1. SX02・05 完掘状況
2. 土壙 1 調査状況 | 図版 23 | 1. 主郭 2 出土遺物 (1)
2. 主郭 2 出土遺物 (2) |
| 図版 7 | 1. 土壙 1 土層堆積状況
2. 飛礫石調査前状況 | 図版 24 | 1. 主郭 2 出土遺物 外 (3)
2. 主郭 2 出土遺物 内 (3) |
| 図版 8 | 1. 飛礫石完掘状況
2. 主郭 2 燃土範囲検出状況 | 図版 25 | 1. 主郭 2 出土遺物 外 (4)
2. 主郭 2 出土遺物 内 (4) |
| 図版 9 | 1. 遺物出土状況 (1)
2. 遺物出土状況 (2) | 図版 26 | 1. 主郭 2 出土遺物 (5)
2. 主郭 2 出土遺物 (6) |
| 図版 10 | 1. 遺物出土状況 (3)
2. 鐸状鉄製品出土状況 | 図版 27 | 1. 主郭 2 出土遺物 (7)
2. 主郭 2 出土遺物 (8) |
| 図版 11 | 1. 主郭 2 調査風景
2. 主郭 1 完掘状況 | 図版 28 | 1. 主郭 2 出土遺物 (9)
2. 主郭 1・主郭 2 (10)・1号炉出土遺物 |
| 図版 12 | 1. 主郭 2 完掘状況
2. 旧表土検出状況 | 図版 29 | 1. 主郭 2 出土遺物 (11)
2. 主郭 2 出土遺物 (12) |
| 図版 13 | 1. 主郭 2 東側整地層及び SI01 検出
状況
2. 磐石建物 3 完掘状況 | 図版 30 | 1. 主郭 2 出土遺物 (13) |
| 図版 14 | 1. 1 号炉検出状況
2. 1 号炉完掘状況 | 図版 31 | 1. 北郭包含層 1 出土遺物 外 (1)
2. 北郭包含層 1 出土遺物 内 (1) |
| 図版 15 | 1. 2 号炉検出状況
2. 2 号炉完掘状況 | 図版 32 | 1. 北郭包含層 1 出土遺物 外 (2)
2. 北郭包含層 1 出土遺物 内 (2) |
| 図版 16 | 1. 北郭鍛冶炉及び焼土検出状況
2. 北郭調査風景 | 図版 33 | 1. 北郭包含層 1 出土遺物 (3)
2. 北郭包含層 1 出土遺物 (4) |
| 図版 17 | 1. 北郭中世完掘状況
2. 主郭 2 切岸全景 | 図版 34 | 1. SE01・SI01 出土遺物
2. SI01・北郭包含層 2 出土遺物 (1) |
| | | 図版 35 | 1. 北郭包含層 2 出土遺物 (2)
2. 北郭包含層 2 出土遺物 (3) |

図版 36 1. 北郭包含層 2 出土遺物 (4)

2. 北郭包含層 2 出土遺物 (5)

卷頭図版 1 静間城跡全景

本文写真 作業風景

第1章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査の経緯

一般国道9号は京都府京都市から山口県下関市に至る総延長約750kmで、山陰地方の諸都市を結ぶ主要幹線道路である。このうち、島根県大田市周辺では急カーブや急勾配が連続する区間が多く、重大事故が多発しやすい状況にある。通行止め時には大幅な迂回が必要となるなど、日常生活及び経済活動に必要な交通機能が損なわれ、主要幹線道路としての機能に支障をきたしているところであった。こうした状況のもと、交通混雑の緩和及び災害時の緊急連絡道路を確保するために、大田市久手町から大田市静間町に至る延長5.0kmを結ぶ自動車専用道路が計画され、平成24年度から「大田・静間道路」として事業着手されている。

この計画・事業化にあたり、平成25年2月8日付け国中整松調設第106号及び平成26年2月19日付け国中整松調設第94号で国土交通省から島根県教育委員会に対して事業地内の埋蔵文化財の有無について照会があった。これを受けて島根県教育委員会は大田市教育委員会の協力の下、2度の分布調査を実施した結果、6箇所の遺跡と39箇所の要注意箇所を確認し、平成26年5月13日付け鳥教文財第159号で国土交通省に回答した。

これらの結果を受けて、国土交通省と島根県教育委員会の間で適宜協議が行われ、事業予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて具体的な検討を行ってきた。事業の早期推進と調査体制を強化するため、島根県教育委員会は大田市教育委員会と協議を行い、大田市が国道9号の交通状況改善のため早期の開通を働きかけてきた地元自治体として調査に協力することとなった。それを受け、大田市教育委員会は平成26年度に4箇所の試掘確認調査を実施した。その結果について平成27年4月に文化財保護法第94条第1項に基づく発掘調査実施の勧告が行われた。大田市教育委員会は栗林B遺跡及び鯛渕遺跡の発掘調査を実施して、すでに報告書が刊行されている。

平成27年度から調査は本格化し、島根県教育委員会は22箇所の試掘確認調査を行って、7箇所の遺跡を確認した。この試掘確認調査の結果に基づき、平成28年3月10日付け国中整松一官第277号で文化財保護法第94条第1項の規定による通知が国土交通省から文化庁長官あてに提出された。それに対して平成28年3月10日付け鳥教文財第120号の111で島根県教育委員会



第1図 静間城跡の位置

教育長から記録保存のための発掘調査の実施が勧告された。

上記の法的手続きを基づいて、島根県教育委員会では平成 28 年度から事業予定地内の発掘調査を開始することとなり、本書掲載遺跡である静間城跡と平ノ前遺跡の 2箇所の発掘調査と 3箇所の試掘確認調査を実施した。

第2節 調査の経過

静間城跡は平成 27 年度に国庫補助事業による試掘確認調査を実施した。調査の結果、礎石建物等の遺構や多量の遺物を確認したため、多数の建物跡等が存在しているものと想定された。発掘調査は南側斜面以外ほぼ全域が対象となり、その調査面積は約 4,800m²である。

発掘調査直前の平成 28 年 5 月 10 日に元松江市史料編纂室専門調査員の山根正明氏の指導の下、静間城跡の縄張り図の作成に取りかかった。その結果、主郭、北郭、帯郭の 3つの郭で構成されているものと考えられた。主郭は「L」字状の細長い平坦面であったことから、調査にあたっては西側を主郭 1、東側を主郭 2 として実施することとした。

調査に際しては、排土置き場が主郭 1・2 の境にあたる北側斜面麓の 1箇所のみであること、郭以外は急斜面（切岸）のためベルトコンベアも使用不可という問題があった。そのため仮設シャーターを 2 基設置して対応することにし、シャーターの移動等も鑑みて、主郭 1、主郭 2、北郭の順で調査を進める方針となった。

発掘調査は平成 28 年 5 月 20 日から平成 28 年 12 月 12 日まで実施した。主郭 1 では建物跡 2 棟と土坑及び柱穴、主郭 2 では建物跡 4 棟と多数の柱穴を検出したが、夏季の調査であったことから、遺構検出作業が困難を極めた。連日、丘陵麓の水路から水をポンプアップして水をまきながら精査を続けた結果、上記の遺構を確認することができた。北郭においては建物跡 2 棟と鍛冶炉 2 基の他、柱穴多数を確認した。また、調査開始時に設定したサブトレレンチにより、中世遺構面の下層に古墳時代の遺構が存在していることが判明していたため、古墳時代遺構面の調査前、10 月 27 日にラジコンヘリによる中世遺構面の空中写真撮影及び測量を実施した。その後、掘削を開始して、堅穴建物跡 2 棟及び加工段 3 棟を検出することができた。それと併行して帶郭の調査も行ったが、後世の掘削によって造り出された平坦面であることが判明した。その結果、静間城跡は 2 箇所の郭で構成されていた可能性が高くなった。

郭及び切岸の調査がほぼ終了した 12 月 8 日から主郭 1、2 の境の小平坦面に存在していた井戸跡（S E 0 1）の断ち割りをバックホーで行った。岩盤が堅く深さ約 10 m までしか掘削できなかったが、内部からは須恵器攤片と青磁片が出土し、山城に伴う井戸跡であることが確認された。その間、9 月 27 日には島根県文化財保護審議会委員の井上寛司氏、11 月 14 日には滋賀県立大学教授の中井均氏の調査指導を受けた。7 月 20 日には静間まちづくりセンター 40 名による遺跡見学会を実施、10 月 15 日には現地説明会を開催し、約 100 名の参加があった。

これらの調査はほぼ人力によりスコップ、鍬等を用いて掘り進め、切岸の調査には安全帯を装備して転落防止に気をつけながら慎重に掘削を進めた。また、排土置き場に溜まった掘削土と斜面に残った排土を搬出するためにバケットに平爪を装着したバックホーを使用した。

遺構図の図化にあたっては、主に遺跡調査システム「サイト」を用いて測量し、出力後補正を行った。また、出土遺物についても遺跡調査システムで出土位置を記録した上で取り上げた。遺構の

写真は、原則として 35mm 一眼レフデジタルカメラで撮影し、必要に応じて記録保存のため 6 × 7 判フィルムカメラによる撮影も行っている。

遺物整理作業は現地調査と併行して行い、平成 29 年度から本格的な報告書作成作業を開始した。遺物・遺構図面のトレース、写真加工、原稿執筆・編集作業等については Adobe 社製の Creative Cloud を用いて DTP 方式で行った。



作業風景

第2章 遺跡の位置と歴史的環境

島根県大田市は、東西に長い県のほぼ中央に位置し、南には国立公園三瓶山や大江高山の火山群があり、北は日本海に面している。三瓶山と大江高山火山群の間を流れて日本海に注ぐ三瓶川や静間川の河口に沖積平野が認められ、海岸部には砂丘が発達している。

静間城跡は、大田市静間町の静間川左岸に位置する標高約 27 m の低丘陵に所在しており、北側に日本海が眺望できる立地にある。

旧石器・縄文時代

大田市域では旧石器時代の遺跡は今のところ確認されていないが、平成 26 年度に発掘調査が行われた中尾日遺跡（4 区）では、縄文時代早期から草創期に遡る可能性のある尖頭器が出土している。今まで大田市域は三瓶山の厚い火山灰層に覆われているため旧石器時代の遺跡を検出することは困難だと考えられてきた中で、今後、資料の増加が期待される事例といえる。

縄文時代の遺跡もまだ少ないものの、近年の調査量増加に伴い遺跡の発見も急増している。中尾日遺跡では上記の尖頭器の他に多量の縄文土器も確認されており、後期が中心を占めるが、前期・中期に遡る土器も含まれていた。この他に線刻によって絵を描いたとみられる石器や、大型石棒なども認められ、当時の精神世界を垣間見ることができる資料として注目される。

弥生時代

弥生時代になると遺跡は増加する傾向にある。静間川下流域の平野部には前期の土器が見つかった土江遺跡や八日市遺跡などが存在している。平成 28 年度に発掘調査が行われた栗林 B 遺跡では前期の河道 2 本が検出され、河道内から環状杭列が確認されていることから、周辺に集落が営まれていたことが想定されている。中期になると鶴山遺跡で土器が確認され、鳥井南遺跡では弥生時代中期から古墳時代後期にかけての大規模な集落跡が発見されている。弥生時代の遺構には、焼失住居が含まれているほか、塙町式土器が多数出土していることから、備後北部との交流が推測される。また、後期の竪穴建物からは鉄製鋤先とともに多量の土器も出土している。平成 28 年度に発掘調査を実施した平ノ前遺跡は弥生時代から古代の集落遺跡であることが判明した。弥生時代の遺構としては後期前葉の水路跡 2 条が検出されているが、この水路は静間川からの導水用施設の可能性が高いとみられる。以上のように静間川周辺地域では弥生時代の遺跡が多く確認されており、最も早く弥生社会に入った地域といえる。

古墳時代

古墳時代の集落跡としては、平ノ前遺跡、鳥井南遺跡、市井深田遺跡などが知られている。平ノ前遺跡では前期から後期にかけての竪穴建物の他に中期から後期頃の灌漑用水路跡が確認されている。水路内からは多量の土器とともに金銅製歩幅付空玉 1 点が発見された。この空玉は朝鮮半島製もしくは国内で製作された可能性が考えられ、当時の朝鮮半島との交流を窺い知ることのできる貴重な資料といえる。鳥井南遺跡では人形や武器形、鏡、玉などの祭祀に関する土製模造品が出土していることが注目される。市井深田遺跡は丘陵部に営まれた古墳時代後期から古代の集落跡で、竪穴建物や掘立柱建物を建てた加工段が多数見つかっている。

また、古墳時代の大田市域は、石見地方でも有数の横穴墓の密集地帯として知られている。特に



1	静間城跡	2	平ノ前遺跡	3	網引原遺跡	4	平山横穴
5	平遺跡	6	近藤平遺跡	7	垂水古墳	8	近藤浜横穴
9	柿田立目後横穴群	10	竹下忠紀宅後横穴	11	垂水遺跡	12	湊東遺跡
13	鯛渕遺跡	14	静間鉢	15	渡瀬遺跡	16	西鳥井遺跡
17	山根遺跡	18	上山根遺跡	19	北沢遺跡	20	伝地山古墳
21	大平横穴群	22	鳥井南遺跡	23	桜田遺跡	24	鳥井西遺跡
25	浄土寺遺跡	26	八石遺跡	27	笛川遺跡	28	土江遺跡
29	八日市鉢	30	八日市横穴墓群	31	第二八日市横穴墓群	32	八日市遺跡
33	稻用城	34	稻用下遺跡	35	大迫横穴	36	延里遺跡
37	天主山横穴	38	大道横穴	39	宮の奥遺跡	40	宮の奥横穴群
41	鶴山遺跡	42	亀山横穴	43	貝狼城跡	44	中島遺跡
45	野井神社遺跡	46	大平A遺跡	47	石臼城跡	48	追A遺跡
49	追B遺跡	50	追山田西横穴群	51	山田横穴群	52	追横穴群
53	追C遺跡	54	鳥越B遺跡	55	中祖遺跡	56	鳥越C遺跡
57	栗林C遺跡	58	栗林B遺跡	59	栗林A遺跡	60	諸友西横穴群
61	山田原夫宅裏横穴群	62	二中横穴群	63	鳥越A遺跡	64	市井深田遺跡
65	中尾H遺跡	66	中尾横穴	67	市井遺跡	68	奥市井遺跡
69	諸友越峠遺跡	70	諸友西ヶ迫遺跡	71	尾ノ上遺跡	72	御堂谷遺跡

第2図 静間城跡の位置と周辺の遺跡

多く分布しているのは波根湖周辺の丘陵部であるが、海に面した静間町でも平山横穴や近藤浜横穴、柿田立目後横穴群などが存在している。古墳としては垂水古墳の他に鳥井南遺跡でも規模は小さいものの、横穴式石室を有する古墳が数基確認されている。

古代

古代になると平ノ前遺跡、市井深田遺跡の他に鰐淵遺跡などが知られるようになる。平ノ前遺跡では3間×6間の規模をもつ大型の掘立柱建物跡や漆付着土器、墨書き土器なども確認されており、上述した古墳時代と併せて古代においても静間川下流域で重要な位置を占めていたものと推測される。鰐淵遺跡は平ノ前遺跡同様、静間川下流域に所在しており、柱穴群や溝などが確認されている。遺物には刻書・墨書き土器や土馬、漆付着土器など、官衙的な特色をもつ土器も含まれていた。その立地から古代の交通や河川管理上に必要な地方官衙的な役割を担っていた可能性が高いと考えられており、静間川対岸に位置する平ノ前遺跡と併せて静間川下流域の古代の様相が解明されることが期待される。市井深田遺跡では海岸部では類例の少ない造り付け壠を持つ竪穴建物も発見されており、古代における山間部と海岸部の交流を窺い知ることができる資料といえる。また、中尾H遺跡（1・2区）からは「二斗一升二合」「石匁」と読める木簡が出土しており、海産物のカメノテを貢献する際の荷札木簡と推定されている。この他に円面鏡や平安時代初期の須恵器が出土した八石遺跡など、大田市域に官衙に関連する遺跡が多数存在することは注目されよう。

中世・近世

戦国期になって石見銀山の開発が本格化されると、銀山の支配を巡って大内氏と尼子氏が争うことになり、大田市東部では各所に山城や砦が築かれた。本書掲載の静間城跡周辺には稲用城が築かれている。

近世に入ると、静間川河口では前原家による静間鉄の操業が開始され、明治末まで稼業されている。現地には金山彦を祀った祠の跡が残り、周辺の家々では石垣などに铁滓や炉壁の破片が転用されている様子が窺える。

【参考文献】

- 角川書店『角川日本地名大辞典 32 烏程県』1991年
島根県教育委員会『島根県中近世城館分布調査報告書（第1集）石見の城館』1997年
島根県教育委員会『門遺跡・高原遺跡1区・中尾H遺跡』2013年
島根県教育委員会『市井深田遺跡・荒槌遺跡・鈴見B遺跡1区』2014年
島根県教育委員会『高原遺跡（3区）・中尾H遺跡（4区）・門遺跡（2区）』2017年
大田市教育委員会『栗林B遺跡』2016年
大田市教育委員会『鰐淵遺跡』2017年

第3章 静間城跡

第1節 調査の概要

静間城跡は大田市静間町に所在し、静間川左岸に位置する標高約27mの低丘陵上に築かれた山城である。静間川に面する南側斜面以外のほぼ全域が調査対象範囲となり、調査面積は約4,800m²であった。調査前の縦張り図(第3図)作成において3箇所の郭で構成されているものと考えられ、丘陵頂部に位置する東西方向に延びる細長い平坦面を主郭、一段下がった平坦面を北郭、丘陵東裾を廻る小規模な平坦面を帯郭とした。なお、主郭については「L」字状の平坦面を形成していたことから、西側で南北方向に延びる平坦面を主郭1、東側に延びる平坦面を主郭2として調査を実施している。

主郭の堆積土は基本的に表土と遺物包含層に大別され、その厚さは約20cmを測る。ただし、主郭2の東端部等では厚い整地層が観察されており、山城を築くにあたり大規模な普請が行われたと推測される。なお、主郭2の東端部分では旧表土の下層に古墳時代の遺構面が存在していることも判明した。

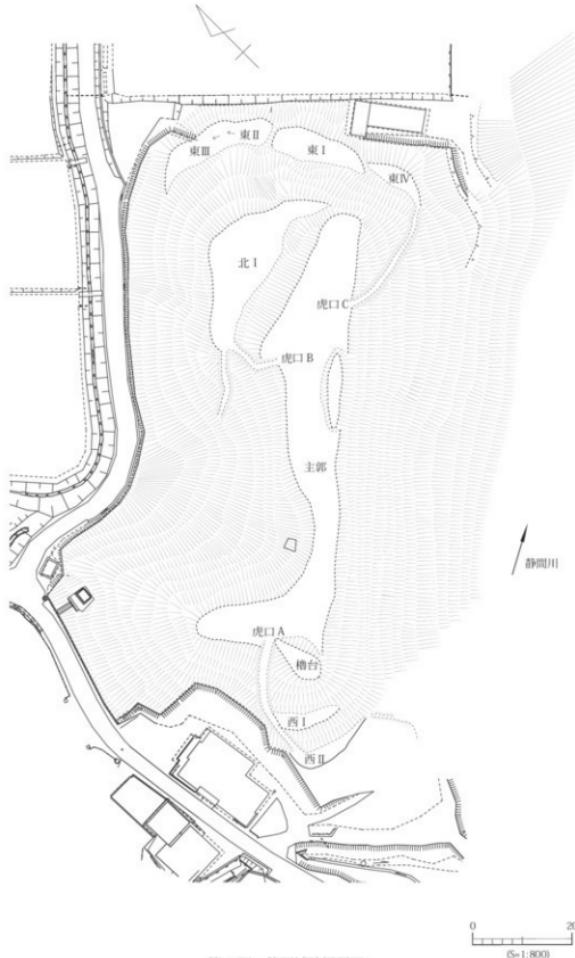
北郭は主郭に比べて堆積土が約70cmと厚く、これは主郭を構築していた整地層等が崩壊して流れ込んだものと考えられる。また、主郭2東端部分と同様に中世遺構面下層に古墳時代の遺構面も存在していた。

帶郭は後世に地形が改変された可能性が高く、遺構、遺物とも確認されなかった。その結果から、主郭と北郭の2箇所の郭で構成された山城と考えられる。

中世遺構面で検出された遺構としては、多数の柱穴とともに掘立柱建物跡や礎石建物跡、土坑、土塁、鍛冶跡等がある。主郭では掘立柱建物跡4棟と礎石建物跡2棟、土坑5基、土塁2基が検出された。掘立柱建物跡は2間×2間の小規模なものから2間×5間の大規模なものまでが存在し、大規模建物は両面または片面に庇が付属しているのが注目される。また、中には火災に遭った建物跡も確認できた。これら掘立柱建物跡と比較すると礎石建物跡は2間×2間と基本的に小規模であり、倉庫等の用途が想定されようか。土塁は主郭の周囲を廻らず部分的に2箇所確認でき、両者とも掘立柱建物跡と隣接する状況で存在していた。土塁1の南東隅では多数の飛礫石が置かれたような状態で検出されている。この他にも飛礫石と推定できるものは土塁1の北東部分の表土下及び主郭2の東端部分でも確認されているが、検出状況から推察すると後世に寄せ集められた可能性が高い。北郭では掘立柱建物跡1棟と礎石建物跡1棟のほかに鍛冶跡2基を確認した。礎石建物跡は根石を伴うもので、主郭で検出したものとは様相を異にしている。鍛冶跡は2基検出され、1号炉の内部には多量の炭と鍛冶滓が含まれていた。

遺物は包含層及び柱穴内から出土している。貿易陶磁である青磁・青花の供膳具や備前系の鉢類や壺類が大半を占め、天目碗のほか茶白や香炉と思われるものが少量含まれていた。これらの時期は15世紀中葉～16世紀前葉頃に位置づけられ、静間城の存続期間を示唆している。

古墳時代の遺構としては竪穴建物跡2棟、加工段3棟が確認された。遺物包含層には古代の遺物も混在していることからみれば、古墳時代から中世までこの丘陵が集落や城跡として営まれていたものと推測される。



第3図 静岡城跡拡張図

第2節 中世遺構の調査

1. 主郭の調査

主郭は丘陵頂部の標高約 27 m に位置する幅約 6 ~ 20 m、長さ約 95 m の東西方向に延びる細長い平坦面である。前述したように西側を主郭 1、東側を主郭 2 として調査を実施している。

主郭の堆積土は第 5・6 図に示したように基本的に表土と遺物包含層に大別され、その厚さは約 20 cm を測るが、第 7 図の主郭 1・2 境のセクションを見ると、郭平坦面から切岸にかけて 50 cm 程度の厚さで土が堆積しているのが確認できる。また、第 5 図及び第 21 図の SX05 横のセクションを観察すると、斜めに下降する旧表土が認められている。第 10 図の主郭 2 東端側セクションでは表上下約 2 m の位置に古墳時代の遺構が存在しており、その上層の厚い堆積土は整地層であることが判明した。この整地は東側に向かって下降する斜面に、主郭東端部を整地するために削平した山頂部の掘削土を埋め立てて東側に延伸させている。第 1 層と第 3 層は土質が異なっていることから、整地は 2 段階に分けて行われたことがわかる。このことは、山城を築くにあたり大規模な普請が行われたことを示しており、南北及び東西方向に延びる丘陵の尾根頂部の掘削を行って、これら丘陵の間や主郭東端部分等に盛土を施して東西に細長い主郭を造り出したものであろう。

検出された遺構は掘立柱建物跡 4 棟と礎石建物跡 2 棟、土坑 5 基、土塁 2 基であり、礎石建物跡は主郭 2、土坑は主郭 1 のみで確認されている。

(1) 建物跡

建物跡として明瞭なものは 6 棟であった。主郭 2 では建物跡として復元できなかった柱穴も存在しており、建て替えが行われたと推察されるものの、それを復元するまでには至らなかった。

S B O 1 (第 12 図)

S B O 1 は主郭 1 の北寄りで検出した 2 間 × 2 間の建物跡で、南隣に S B O 4 が存在している。建物の規模は桁行、梁行とも 4 m、柱穴間距離もいずれも 2 m を測る正方形の建物空間を持つ。P 5 と P 6 の中に柱穴が存在していると考えられたが、大きな切り株があるため確認することはできなかった。主軸方向は N - 48° - W となっている。

柱穴の平面形態は円形もしくは梢円形を呈しており、規模は長軸 30 ~ 60 cm、短軸 20 ~ 40 cm、深さ 15 ~ 60 cm を測る。P 1・2・4・5 では 20 cm 前後の大きさの根石が認められている。

建物の用途について明確には判断できないが、形状及び柱穴に根石を作うことや主郭先端部という配置状況などから櫓等の可能性が想定される。また、詳細な時期については遺物が出土していないため特定できない。

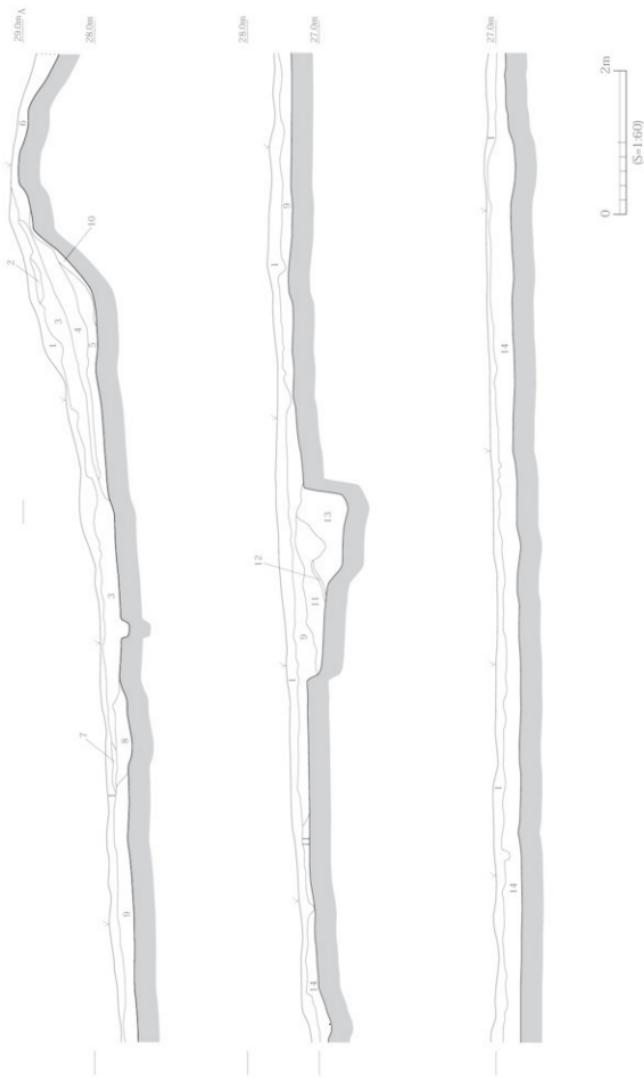
S B O 2 (第 13 図)

S B O 2 は主郭 2 の西寄りで検出した 2 間 × 5 間の総柱建物跡で北側に庇を作った。土塁 2 に接するように配置され、東には後述する S B O 3 が隣接している。建物の規模は桁行 10 m、梁行は 4.2 m であるが庇部分を含めると 5.1 m を測る。P 7 と P 8 の間の柱穴は何度精査しても確認することはできなかったが、柱穴間距離は桁行 2 m、梁行 2.1 m と規則的な配列となっており、庇との間隔は 0.9 m を測る。主軸方向は N - 43° - E となっている。

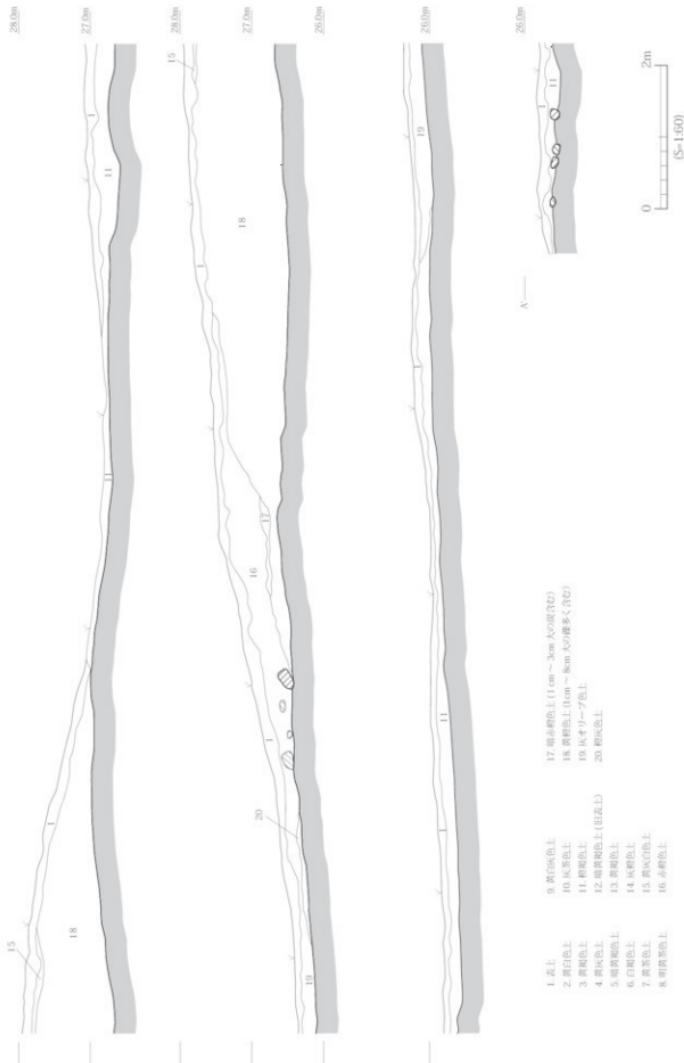
身舎を構成する柱穴の平面形態は円形もしくは梢円形を呈しており、その規模は長軸 30 ~



第4図 静間城跡中世遺構面全体図



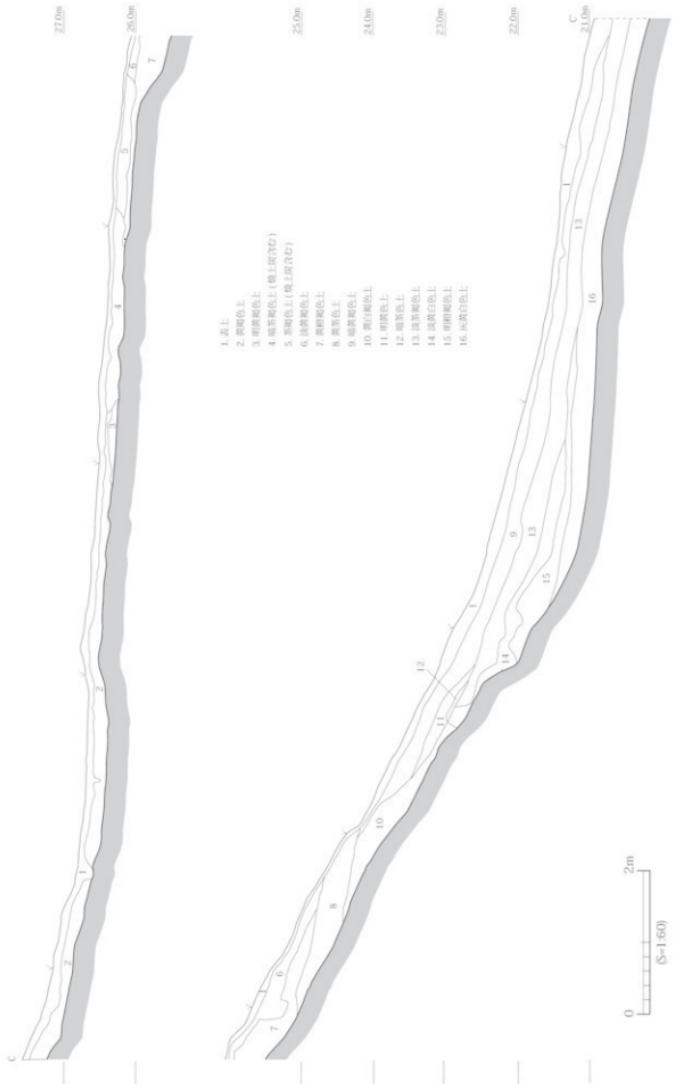
第5図 主郭第1ベルトセクション図①



第6図 主郭第1ベルトセクション図②



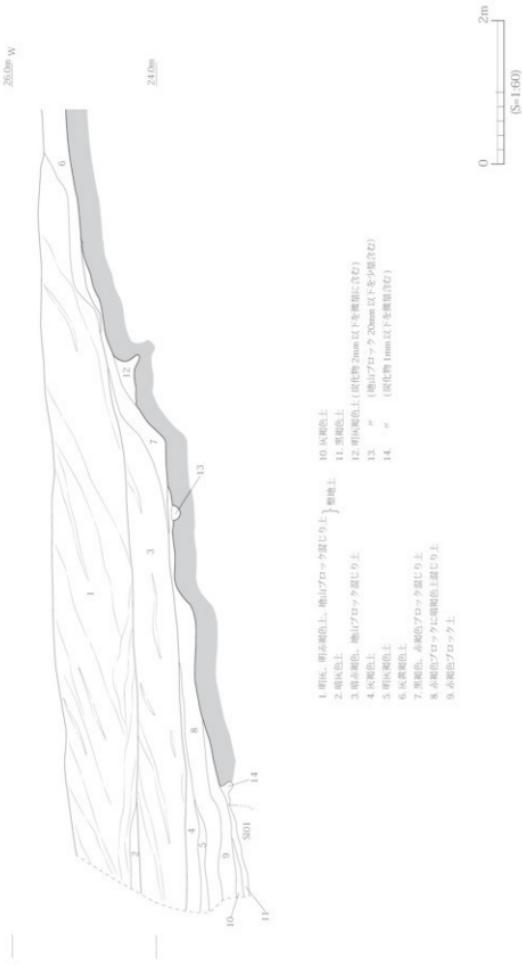
第7図 主幹第2ベルトセクション図



第8図 主郭第3ベルトセクション図



第9図 主郭第4ベルトセクション図



第10図 主幹東端セクション図

105cm、短軸 30～80cm、深さ 40～80cm を測る。S B O 1 で確認されたような根石は検出されなかった。庇の柱穴も円形及び楕円形の平面形態を呈するが、長軸 30～60cm、短軸 20～50cm、深さ 20～58cm と身舎の柱穴よりも小さい傾向にある。

片面庇付きの総柱建物という特異な建物跡であることから山城の中では重要な施設の可能性が考慮される。

遺物は P 4 から備前系の輪花鉢が出土している。

S B O 2 出土遺物（第 14 図）

S B O 2 を構成するピット内より出土した遺物である。

1 は焼き締め陶器の輪花鉢である。丸味を帯びた胴部に輪花形の口縁がつく。口縁端部に指をかけて外面を押さえて摘み出し、輪花の谷間に工具を軽く押し当てる。輪花は復元すると八方に摘み出されるが間隔はまばらとなる。見込みから肩部にかけて細かな自然釉が降りかかる。緻密な胎土で、白色粒子を少量含む暗褐色土と珪石が溶着する。紐作りで成形され、薄手の底板に厚手の器壁を積み重ねている。肩部に継ぎ目がみられることから胴部と頸部を貼り合わせた可能性がある。頸部は強く撫でつけられてくびれる。内外面は回転撫でで調整され、下位部分は鉗状の工具で調整する。器面の一部は細かく剥落しており、二次的な被熱を受けたものと思われる。推定される産地は備前系である。備前市分類で V A 期の製品に見られる緻密な胎土であることから、15 世紀末から 16 世紀初め頃の年代観が想定される。

S B O 3（第 15 図）

S B O 3 は S B O 2 の東隣に位置する 2 間 × 5 間の総柱建物跡で北側に庇を作う。S B O 2 同様、土里 2 に接するように配置されている。建物の規模は桁行 10.8 m、梁行 3.8 m であるが庇部分を含めると 4.9 m を測る。柱穴間距離は桁行の P 1～P 6 列をみると P 1・2・3 間が 2.4 m、P 3・4・5・6 間が 2.0 m を測り、西側 2 間が若干長くなっている。他の 3 列も同様の値を示しており、西側が長くなる構造をもっていたようである。梁行では P 16 だけが少し南側にズレているが、1.9 m とほぼ均一の数値を示している。主軸方向は N = 59° - E である。

身舎を構成する柱穴の平面形態は円形もしくは楕円形及び不整形なものが多く、他の柱穴と切り合っているものも認められる。大きさも様々で長軸 30～120cm、短軸 30～70cm、深さ 20～90cm を測る。S B O 2 同様に根石は確認されていない。庇の柱穴も円形及び楕円形を呈し、長軸 28～75cm、短軸 28～55cm、深さ 30～50cm を測り、身舎より若干小規模である。

図示はしていないが、P 3 から北東にかけて炭を含む焼土層が確認されている。二次的な被熱を受けた遺物も比較的多く出土していることから、火災に遭ったものと考えられる。

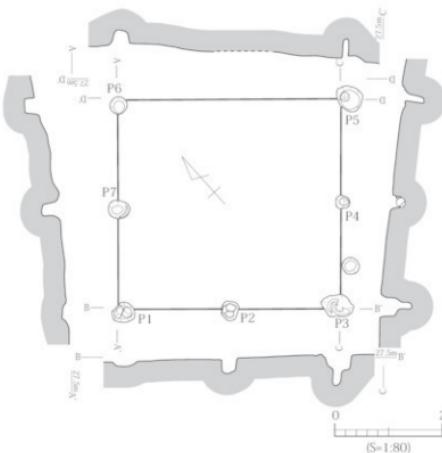
S B O 2 同様に片面庇付きの総柱建物という特異な建物跡であり、重要な施設であったと考えられるが、配置状況等からみて 2 棟が同時に併存していたとは考えにくい。柱穴及び周辺出土の遺物は 15 世紀中葉～16 世紀前葉の様相を示しており、16 世紀前葉頃に火災に遭ったことは間違いない。それ以後の遺物は皆無であることから、S B O 2 が先行し、S B O 3 は後出するものと理解しておきたい。

S B O 3 出土遺物（第 16 図）

いずれも S B O 3 を構成するピットの内部より出土した遺物である。主郭 2 と同様に出土遺物の一部は火災と思われる二次的な焼成を受ける。



第11図 主郭遺構配置図



第12図 SBO1 実測図

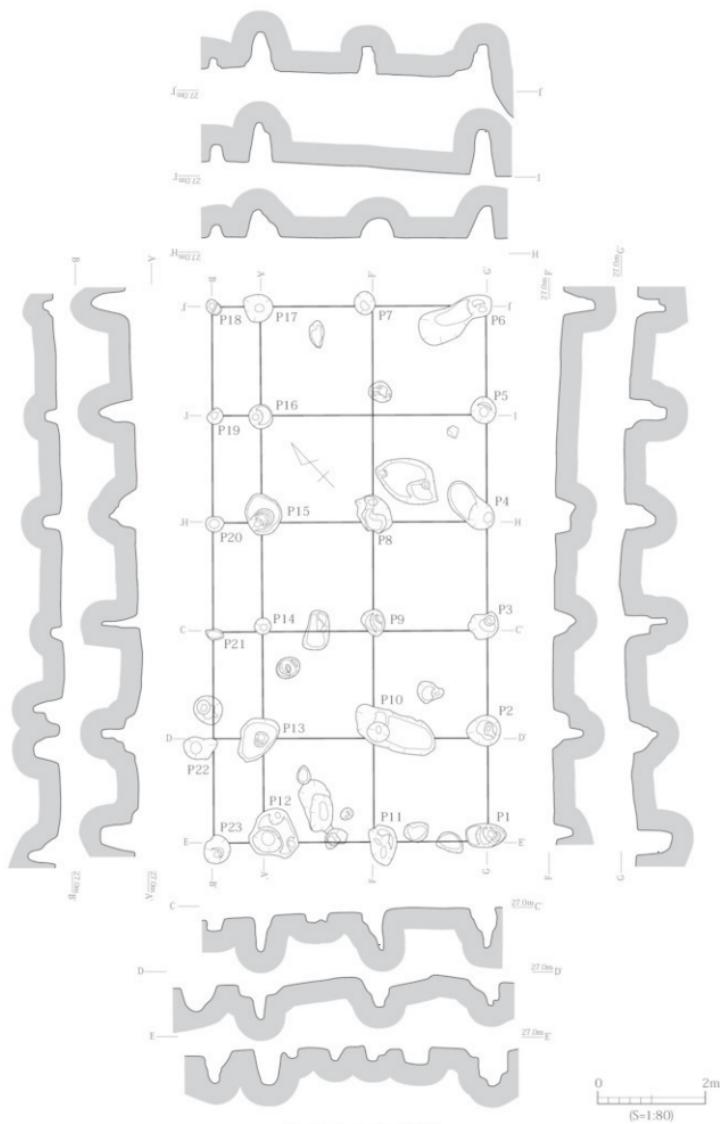
条の波状文が線刻される。胎土は緻密で灰色を呈する。貫入の少ない薄い青磁釉を掛けた。上田分類の青磁碗B-IV類ないし瀬戸分類の青磁VI類古占に比定され、年代観は15世紀末頃になる。3は青磁の稜花皿である。器壁は厚く、腰部で屈折して外反しながら立ち上がる。内口縁には三条の波状文が線刻される。胎土は粗く灰色を呈している。貫入のある青磁釉が施釉される。博多における出土傾向から15世紀後半～16世紀前半頃の年代観が想定される。1～3の推定される産地は中国の龍泉窯系である。

4は口縁が外反する青花皿である。外面に渦状の唐草文崩し、内面に花樹状の文様が描かれる。胎土は緻密で白色を呈する。推定される産地は中国の景德鎮窯系である。小野分類の染付皿B1群に比定され、年代観は15世紀後半から16世紀前半頃になる。第29図5とは文様構成が同じであることから同一個体になる可能性がある。

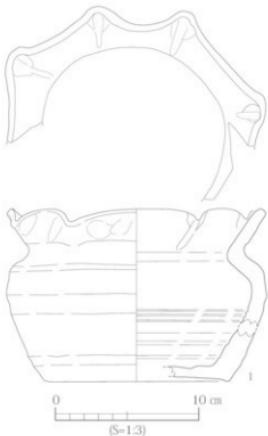
5は灰釉陶器の卸皿である。器壁は外開きに立ち上がり、内口縁に段を有する。口縁周りに灰釉を施釉する。胎土は粗目で淡黄色を呈している。見込みには格子状の卸目が刻まれる。器表面は二次的な焼成を受けて激しく剥落する。推定される産地は瀬戸美濃系である。藤沢編年古の古瀬戸後期IV期に比定され、年代観は15世紀後半である。

6は焼き締め陶器の輪花鉢である。厚手の器壁は丸味を帯びて立ち上がり腰部から頸部にかけて内湾する。口縁は手捻りで外側へ摘み出し、輪花の谷間に笠状の工具で筋を入れる。見込みから肩にかけて自然釉が降りかかり斑となる。灰色を呈した緻密な胎土で、肩部付近には8mmの大いな小石を含む。珪石分の少ない粘土で黒色粒子と白色粒子が溶着する。紐作り成形され、肩部付近に継ぎ目がみられる。器面は粗く調整され、腰部に縄目状の圧痕が薄く付着する。器面の一部が細かく剥落しており、二次的な被熱を受けたものと思われる。推定される産地は備前系である。全体的な作りが備前市分類でIV-B期とされる壺に見られる雰囲気を備えることから、15世紀中頃から16世紀

1～3は青磁である。1は青磁碗の上半部で、外面には細蓮弁文が施文される。蓮弁の単位は比較的意識されている。灰白色を呈した胎土は粗目で、貫入のある薄い青磁釉を掛けた。上田分類の青磁碗B-III類ないし瀬戸分類の青磁V類新に比定され、年代観は15世紀中葉頃になる。第32図-7と同一個体になる可能性がある。2は青磁碗の上半部で、外面には線描細蓮弁文を施文する。弁先は若干の角をもち、一部に乱れがあるものの蓮弁の単位は比較的意識されている。内壁面には二



第13図 SB02 実測図



第14図 SB02出土遺物実測図

初頭の年代観が想定される。

7は土師皿の底部である。胎土は黄橙色で砂粒を少量含む。見込み外周は指で撫でつけられて少し狂む。

8は石臼の上臼(離臼)である。形状は円柱形を呈し側面から上面にかけて研磨される。芯木受けと供給口を兼ねて中央部は開孔され、芯木を受ける内壁は磨滅している。臼の上面を浅く彫り窪め、下面の擦り面は中心にむかって若干のせり上がりをみせ、ふくみを成す。擦り溝は主溝間の角度を45°とした八分割で、主溝に平行する副溝を八本彫り、八分割八溝の構成となる。溝は中心にむかって深く彫られ、擦り合わせ部分は浅くなる。擦り面には同心円状の擦痕を伴っており、溝も彫り直される。石の材質は安山岩である。県内ではこの石材を使用した石製品への加工がみられないことから他所より運び込まれたものと思われる。二次的な被熱を受けて断面を含めて全体的に変色し一部が黒色化している。

S B 0 4 (第17図)

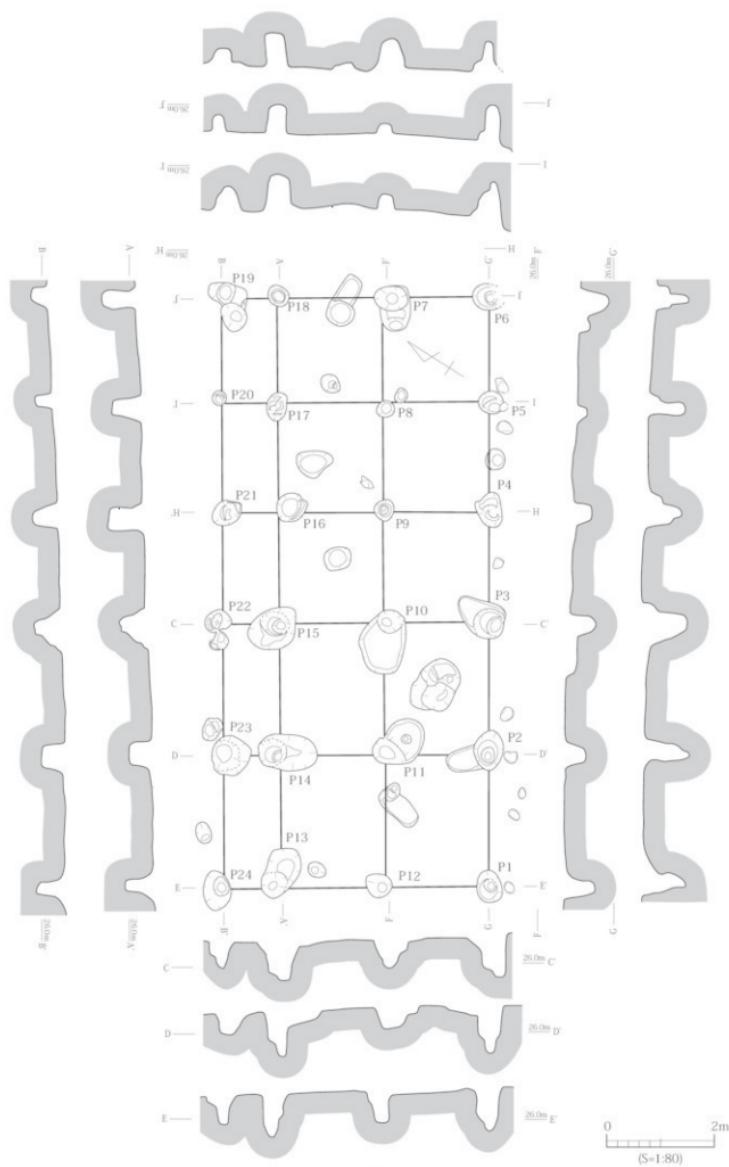
S B 0 4は主郭1でS B 0 1の南隣で検出した2間×5間の掘立柱建物跡である。東西両面に庇を作り、土塁1に接するように配置されている。建物の規模は桁行10m、梁行は4mであるが両面庇部分を含めると6.2mを測り、山城の中では庇を含めると最大規模の建物となる。柱穴間距離は桁行列のP 1～P 6列、P 7～P 12列、P 17～P 21列、P 22～P 27列ともにそれぞれ2mと規格性のある配列となっている。南北の梁行列も2mとなっているが、P 9～P 19列の中間にP 15、P 10～P 20の中間にP 14が存在している。深さは約20cmと浅いが、これらがS B 0 4を構成する柱穴であるならば、建物内の間仕切りに伴うものと推測される。主軸方向はN-41°-Wである。

身舎を構成する柱穴の平面形態は円形及び楕円形を呈するものが多く、規模は長軸40～110cm、短軸40～58cm、深さ40～80cmを測る。S B 0 1同様に柱穴内に根石の認められるものも存在している。庇の柱穴も円形及び楕円形を呈し、規模は長軸30～90cm、短軸30～65cm、深さ30～75cmを測り、身舎とほぼ同規模のものといえる。

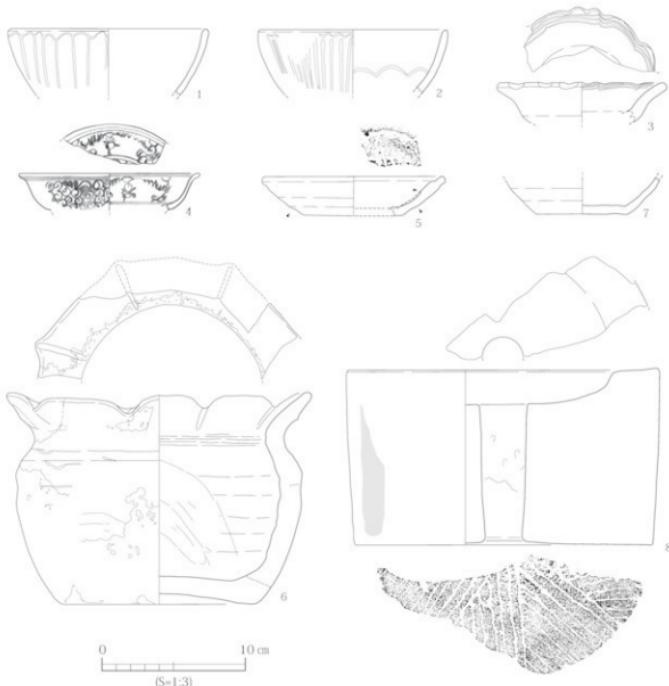
山城の中では両面庇を作り特異なものであること、庇を含めると最大規模の建物になることなどを勘案すれば、主殿等、山城の中心的施設であった可能性も想定される。詳細な年代については遺物が出土していないため特定できない。

礎石建物跡1(第18図)

礎石建物跡1は主郭2でS B 0 3の北東側で検出された礎石建物である。現存する礎石は7個あり、現状では2間×2間の建物跡の様相を呈している。礎石の形状は扁平で円形もしくは隅丸長方形に近く、規模は長軸38～48cm、短軸30～40cm、厚さ16～24cmを測る。建物の規模は桁行、梁行とも3mを測る正方形の建物空間を持つ。礎石間の距離は礎石1から2、礎石3から4、礎石



第15図 SB03実測図



第16図 SB03出土遺物実測図

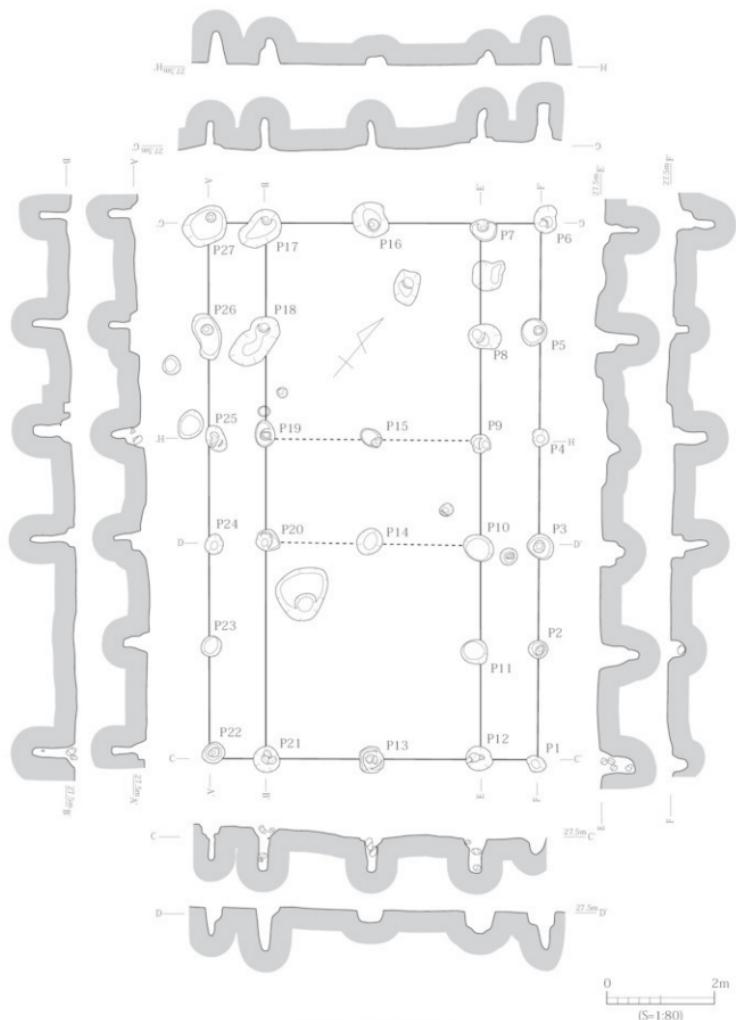
4から5、礎石6から7とも1mと均一になっている。このことから推測すれば本来は3間×3間の建物であったことも想定される。主軸方向はN-24°-Wである。

礎石3～5周辺にはSB03で確認された炭を含む焼土層が広がっており、礎石5には被熱した痕跡が認められることから、SB03と同時に火災に遭った可能性が高い。そうであればSB03と併存していたものと思われる。

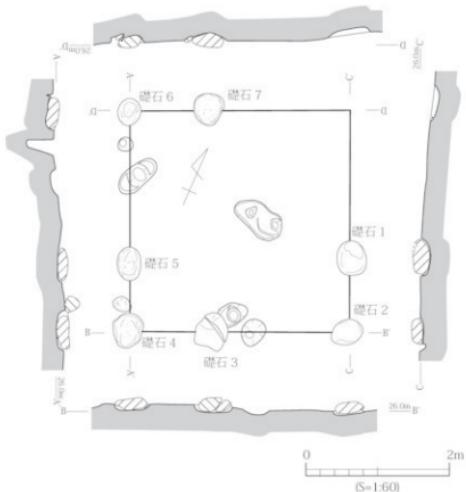
用途については櫓や倉庫跡等が想定されるが、周辺からは茶白や青磁の供膳具、備前系の鉢や壺を含む遺物が多く出土する状況から、倉庫跡と考えた方が妥当であるかもしれない。

礎石建物跡2（第19図）

礎石建物跡2は主郭2でSB03の東隣で検出された礎石建物であるが、南側が調査区外となるため全形は明らかではない。現存する礎石は4個であり、現状では1間×1間の建物跡の様相を呈している。礎石の形状は礎石建物跡1とほぼ同様である。規模は長軸45～50cm、短軸34～46cm、厚さ16～18cmを測る。建物の規模は桁行で2m、梁行で1mを測る。礎石間の距離が



第 17 図 SB04 実測図



第18図 碓石建物1実測図

礎石1と2、礎石3と4とともに1mであることから推測すれば礎石建物跡1と同様な形態をしていた可能性も考慮される。主軸方向はN-28°-Wである。

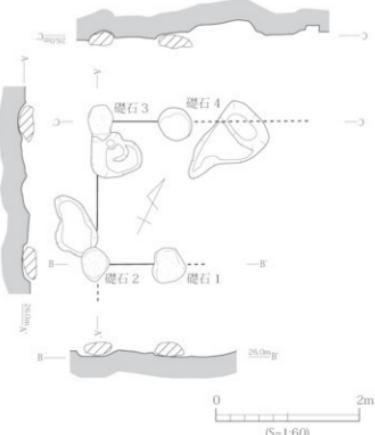
用途については礎石建物跡1同様に倉庫跡の可能性が想定される。詳細な年代については遺物が出土していないため把握し難いが、仮に礎石建物跡1と同時併存していた場合、配置された位置関係から察すると、SB03の火災時に同時に焼失している可能性が高いと考えられる。しかし、火災の痕跡は認められないため、同時併存の可能性は低いであろう。従って、礎石建物跡1より先行する時期と理解しておきたい。

(2) 土坑

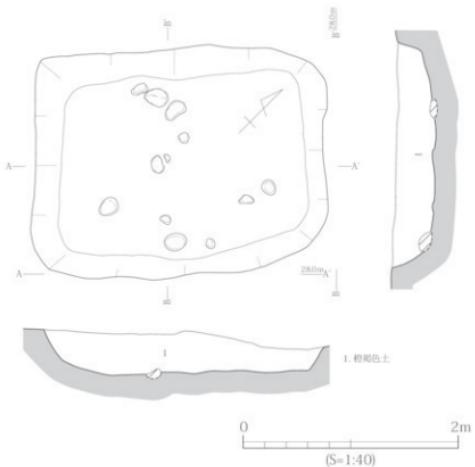
柱穴以外の用途不明な土坑をSXとして調査を行った。5基確認されたがすべて主郭1から検出されている。平面形態は円形や隅丸方形などのものがあり、その規模も1m以上のものが大半を占める。

S X 0 1 (第20図)

S X 0 1はSB04の東隣で検出した。平面形態は隅丸方形を呈しており、規模は長軸2.7m、短軸2.3m、深さ38cmと比較



第19図 碓石建物2実測図



第20図 SX01 実測図

である。

内部から遺物が出土していないため、年代及び性格については判断できなかった。

S X 0 3 (第22図)

S X 0 3はS B 0 1の北側約1.5mの位置で検出した。平面形態は不整形で東側は消失している。規模は長軸4m以上、短軸約2m、深さ15cmを測る。覆土は暗黄褐色土の単層である。底面中央付近に径10cm程度の浅いピットが認められている。

内部から遺物が出土していないため、年代や性格については判断することができなかった。

S X 0 4 (第23図)

S X 0 4はS X 0 3の北隣で検出した。平面形態は楕円形に近く、規模は長軸2.5m、短軸85cm、深さ16cmを測る。覆土は黄褐色土の単層である。

内部から遺物が出土していないため、年代や性格については判断することができなかった。

S X 0 5 (第21図)

S X 0 5は北側をS X 0 2に、東側を調査のためのサブトレンチによって切られた状態で検出された。残存部分から判断すれば円形もしくは楕円形の土坑といえる。残存長は最大で2.5m、深さ22cmを測る。覆土は橙褐色土の単層である。

他の土坑同様、遺物が出土していないため、年代や性格については判断することができなかった。

(3) 土塁

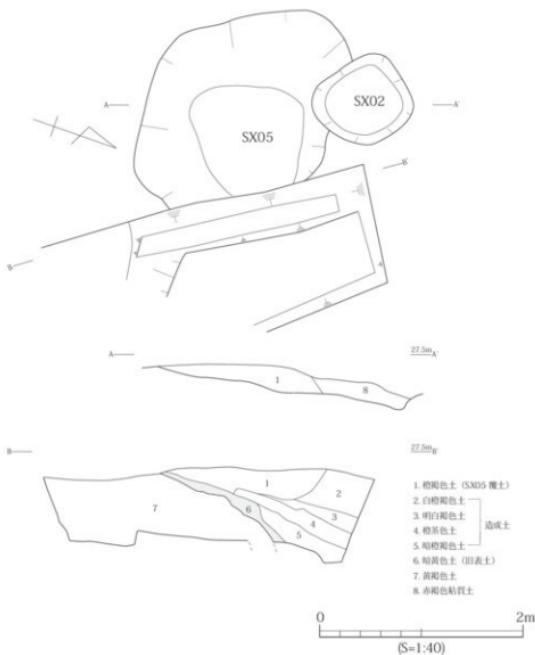
土塁は主郭の周囲を廻らず部分的に2箇所確認されている。主郭1のS B 0 4の西側に隣接するのを土塁1、主郭2でS B 0 2・0 3の南側に隣接するものを土塁2としている。

的大きな土坑である。覆土は橙褐色土の単層となっている。土坑底面には20cm前後の大きさの石が数点と図示できなかったが上師質土器の皿1点が確認されている。

年代については山城に伴うものと考えられるが、その性格については明らかにしがたい。

S X 0 2 (第21図)

S X 0 2はS X 0 1の東約2mの位置でS X 0 5を切る状況で確認された。平面形態は円形に近く、径約1m、深さ18cmを測る。覆土は赤褐色粘質土の単層



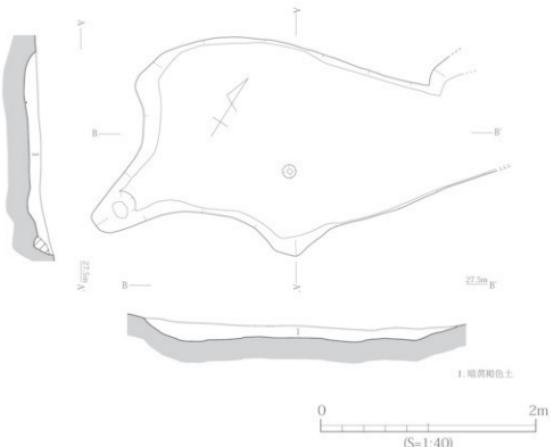
第21図 SX02・05 実測図

土塁1（第24・25図）

主郭1の南西部分に配置されている。西側は切岸により急峻な斜面となり、東側は緩やかに傾斜して主郭平坦面へと至る。調査前は長さ約9m、最大幅約6m、高さ約1.3mの高まりであったため、当初は橋台と考えていた。調査の結果、長さ約10m、幅約4m、高さ約1mの土塁であることが判明した。土塁は地山を削り出して、その掘削土を地山上部に盛土して構築されていたものと推察され、東側に厚く堆積している黄褐色土、黄灰色土、暗黃褐色土などはそれが崩落したものと理解される。南東隅には多数の投石用の飛碟石が置かれたような状態で検出されている。

飛碟石出土状況（第26図）

土塁1の南東隅を平坦に削り出した部分に15cm前後の大きさの川原石が置かれたような状態で検出された。これらは積み上げられたというより、 2.5×2.0 mの範囲に敷き並べたような状況であった。このような出土状況から土塁の補強とは考えられず、投石用の飛碟石と判断した。



第22図 SX03 実測図

土塁2（第27図）

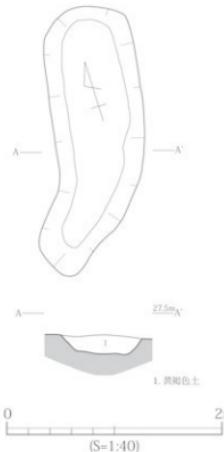
主郭2の南辺中央付近で東西方向に延びる状況で配置されているが、その大半は調査区外となっている。調査前の規模は長さ約18m、幅5m以上、高さ約80cmを測る。土塁1同様に地山削り出し成形で、SB02・03側に盛土の崩落土が堆積している。崩落土除去後の土塁壁面は垂直気味に立ち上がり、その高さは約1mを測る。

主郭1遺物出土状況（第28図）

遺物はSB04の中央付近からSB01手前側にかけて集中して出土している。その大半はSB04に関わるものと考えられ、SB01内ではほとんど認められていない。このことは建物の性格を反映しているのかもしれない。遺物には青磁・青花の貿易陶磁や備前系陶器などが認められたが、細片が多数を占めており図化できたものは少ない。

主郭1出土遺物（第29図）

1～4は青磁である。1は口縁が直口する青磁碗で、口縁外帯に雷文の崩しが篦描きされ、胸部には蓮弁らしき線刻が施文される。淡い緑色の青磁釉を薄掛けし、胎土はやや粗目で灰色を呈する。上田分類の青磁碗C II類ないし瀬戸分類の青磁V類新相に比定され、年代観は15世紀中葉頃になる。2～3は青磁の稜花皿で、内口縁に三条の波状文が線刻される。2は貫入のある青磁釉を施釉し、胎土はやや粗目



第23図 SX04 実測図

施文される。淡い緑色の青磁釉を薄掛けし、胎土はやや粗目で灰色を呈する。上田分類の青磁碗C II類ないし瀬戸分類の青磁V類新相に比定され、年代観は15世紀中葉頃になる。2～3は青磁の稜花皿で、内口縁に三条の波状文が線刻される。2は貫入のある青磁釉を施釉し、胎土はやや粗目



第24図 土壠1 調査前実測図

で灰白色を呈する。瀬戸分類の青磁V類古相に比定され、年代観は15世紀末頃になる。3は見込みに二重圓線を線刻し、その内側に印花で文花を捺す。透明性のある青磁釉を施釉し、豈付けから高台内部を軽く拭き取る。胎土はやや粗目で灰白色を呈する。第32図10・13と同一個体になる可能性がある。4は折縁の青磁盤である。折縁の内側は浅く彫り込み、口縁端部は玉縁状に厚みを帯びる。内面には放射状の鍋を入れる。青磁釉を二度掛けして深い緑色に発色させる。灰白色を呈する胎土は粗目である。瀬戸分類の青磁V類新相に比定され、年代観は15世紀中葉頃になる。釉調および器形の歪みに若干の違いがあるが、第50図4と同一個体になる可能性がある。1～4の推定される産地は、中国の龍泉窯系である。

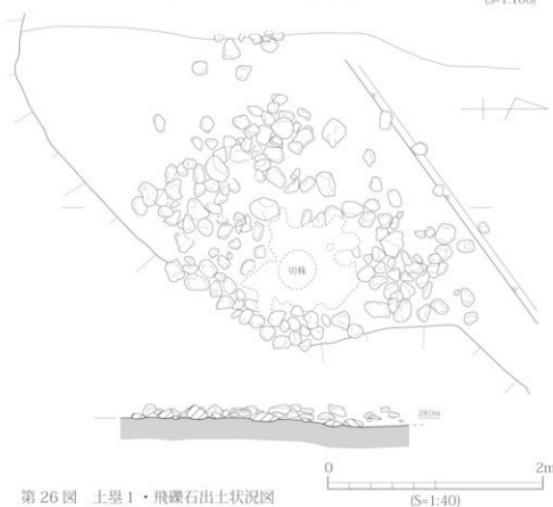
5は口縁が外反する青花皿である。文様は外面に溝状の唐草文崩し、内面に十字花文が配される。豈付け部分の釉を削り取り、少量のアルミニナ砂が付着する。胎土は白色を呈する。推定される産地は中国の景德鎮窯系である。第16図4と同一個体になる可能性があり、年代観も同じである。

6は焼き締め陶器の擂鉢である。口縁部は屈曲して内向きに均等な厚さで立ち上がり、下帯がやや突出する。口縁下の器壁に重ね焼き痕と、底部にロクロ盤の痕が転写する。内壁面には八条を単位とする掠目が間隔をあけて放射状に入れられ、擦面は使い込まれて磨滅する。胎土は外表面が灰色で内部が灰赤色を呈しており、砂粒を少量含む。断面にみえる繊目から底板に器壁となる粘土紐を積み上げた様子が伺える。推定される産地は備前系である。備前市分類のIV B-3期に比定され、年代観は15世紀後半から16世紀初頭頃になる。

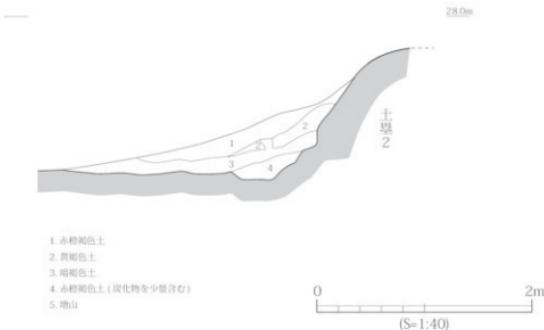
7は瓦質上器の浅形火鉢である。平面は円形を呈する。体部は内湾し、口縁端部は内側に延びて



第25図 土塁1 完掘状況図



第26図 土塁1・飛碟石出土状況図



第 27 図 土塙 2 セクション図

平坦となる。器壁の側面は磨かれており滑らかに調整される。底部には足を貼り付ける。胎土は淡黄褐色を呈し、砂粒を微量に含む。

8 は赤めのう製の勾玉である。

主郭 2 遺物出土状況（第 30 図）

各建物跡を中心にして出土しているが、その多くは火災の影響であろうか S B 0 3 周辺に集中しており、出土遺物には二次的な焼成を受けたものが多く認められた。貿易陶磁である青磁や青花、備前焼の鉢類や壺・甕などが一定量出土している。そのなかには天目碗のほか、茶白や香炉を思わせるものが含まれており主郭 1 と様相を異にする。

主郭 2 出土遺物（第 31 ~ 41 図）

第 31 図は主郭形成時に下層の包含層等が掘削されて混入した須恵器である。1・2 は环で 2 は高台を有し、いずれも底部外面に回転系切り痕が残る。3 は小形の壺で肩部がよく張り、底部に回転系切り痕が残る。4 は甕の口縁部で端部は外反してのびる。

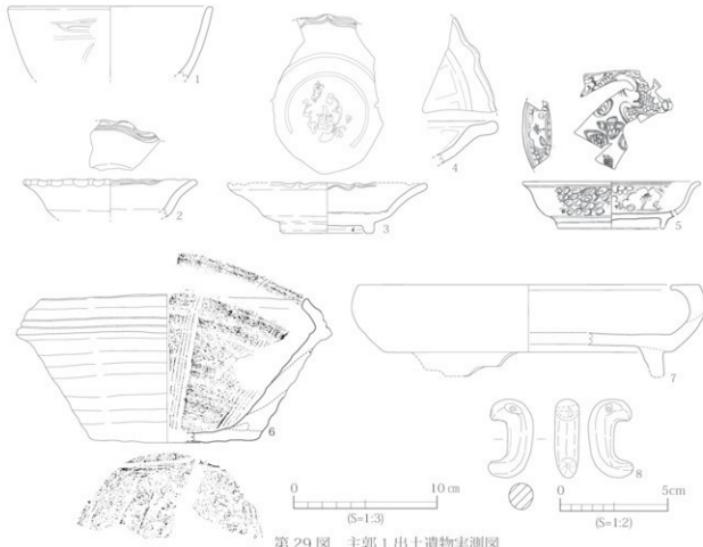
第 32 図 1 ~ 33 図 1 が貿易陶磁で、白磁・青磁・青花の中国磁器を中心として、陶器では天目碗や朝鮮半島の舟形利などを見つかっている。

第 32 図 1 ~ 25 が磁器である。1 ~ 4 は白磁である。1 は小形の白磁皿で、器壁は僅かに内湾して立ち上がる。見込みは蛇の目状に釉剥ぎしており、釉薬とともに磁胎を薄く削り取る。透明釉を墨付けの外際まで施釉し、高台内を露胎とする。高台の中心は削り残しが兜巾状にせり上がる。胎土は緻密で白色を呈し、黒色粒子を微量に含む。2・3 は白磁の平形皿で、器壁は外開きに立ち上がる。墨付けは対角に四力所を残して抉りとり、見込みに重ね焼きの痕が残る。2 は透明釉を総掛けし、墨付け部分の釉薬を剥ぎ取る。高台内は平滑に仕上げられ、高台脇を小さく面取する。緻密な胎土で白色を呈する。3 は細かな貫入の入る透明釉を内面から腰部にかけて施釉し、底部を露胎とする。高台内は削り出し成形の痕を調整していない。器壁には重ね焼きの痕が上下に付着する。緻密な胎土で白色を呈している。全体的に被熱で変色しており、二次的な被熱を受けたものと思われる。高台内の調整や釉薬からみて 2 よりも 3 が粗製となる。1 ~ 3 の推定される産地は中国福建省の邵武窯が指標とされる。森田分類の D 群に比定され、年代観は 15 世紀後半頃になる。4 は口



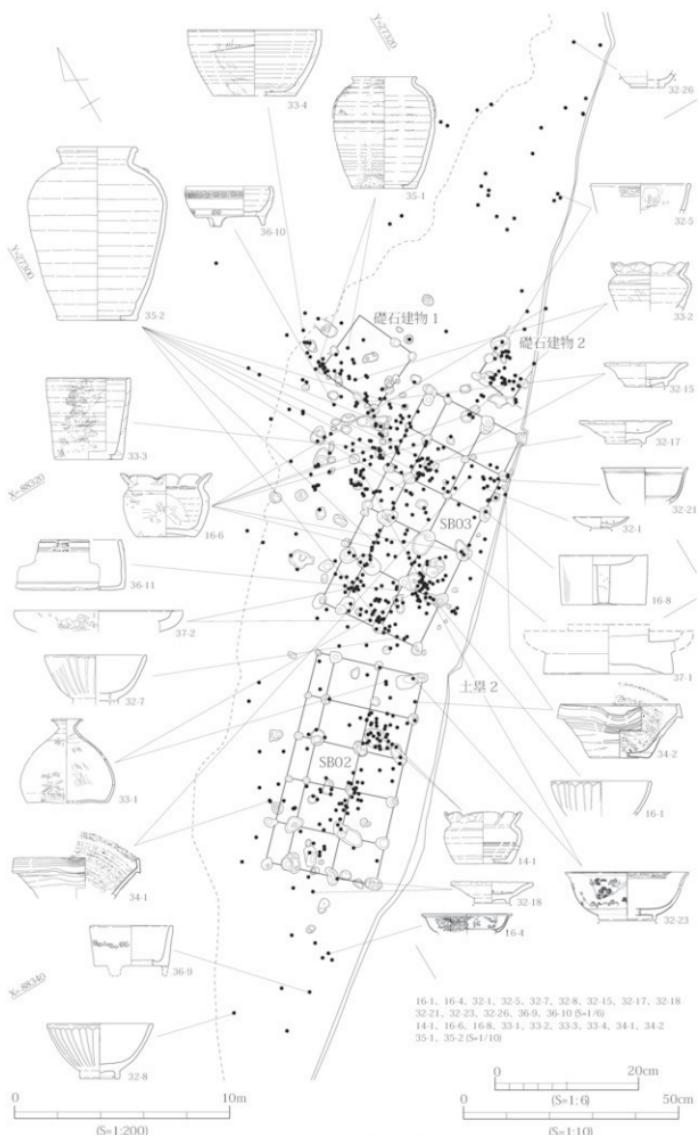
第28図 主郭1遺物出土状況図

縁端部が内湾する白磁皿である。高台内が滑らかに形成される。胎土は緻密な灰白色を呈し、細かな貫入のある透明釉を締掛けして疊付け部分を剥ぎ取る。全体的に被熱で変色しており、二次的な被熱を受けたものと思われる。推定される産地は不明であるが、朝鮮半島の軟質白磁かもしくは中國産の可能性が考えられる。

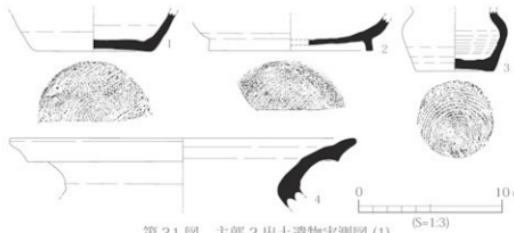


第29図 主郭1出土遺物実測図

5～20は青磁である。5は口唇部がやや膨らんで玉縁になる青磁碗である。外口縁に雷文、見込みに花弁状の印花を施す。灰白色を呈した胎土は緻密で、貫入のある青磁釉を薄掛けする。熱を受けて釉調は退色しており、二次的な被熱を受けたものと思われる。上田分類の青磁碗C II類ないし瀬戸分類の青磁V類新相に比定され、年代観は15世紀中葉頃になる。6～8は外面に細蓮弁文が施される青磁碗である。6の蓮弁は縱線が弁先に達するものの位置がずれ、蓮弁としての単位はあまり意識されていない。貫入のある青磁釉を薄掛けし、粗目の胎土は灰白色を呈する。7の蓮弁文は弁先の谷間と縱線が位置を合わせて接続するものの幅は一定感を欠く。貫入のある青磁釉を薄掛けし、胎土は粗目で灰白色を呈する。高台周りから腰部にかけて箒削り調整される。断面の一部に漆が付着することから、漆継ぎを行ったものと思われる。第16図1と同一個体になる可能性がある。8は蓮弁としての単位は意識されており、蓮弁の谷間と縱線は接続してほぼ均等な幅となる。見込みには浅広の圈線に花文の印花を捺す。貫入の細かな青磁釉を薄掛けし、高台内側の途中まで施釉する。墨付け外縁端部を面取りして、高台には削り残しが兜巾状にせり出す。火熱を受けて釉調が退色することから、二次的な被熱を受けたものと思われる。胎土は比較的緻密だが、火を受けて灰色からにぶい橙色に変色している。6～8は上田分類の青磁碗B-Ⅲ類ないし瀬戸分類の青磁V類新相に比定され、年代観は15世紀中葉頃である。9の外面には線描細蓮弁文が施される。弁先と縱線は連動しておらず、蓮弁としての単位はあまり意識されていない。外面に線刻で花弁文、見込みには印花で花文を施す。墨付けの外縁端部は面取りされる。高台内には削り残しが兜巾状にせり出し、小形の焼台を置いた痕が付着する。貫入のある青磁釉を高台の内側面まで施釉



第30図 主郭2遺物出土状況図



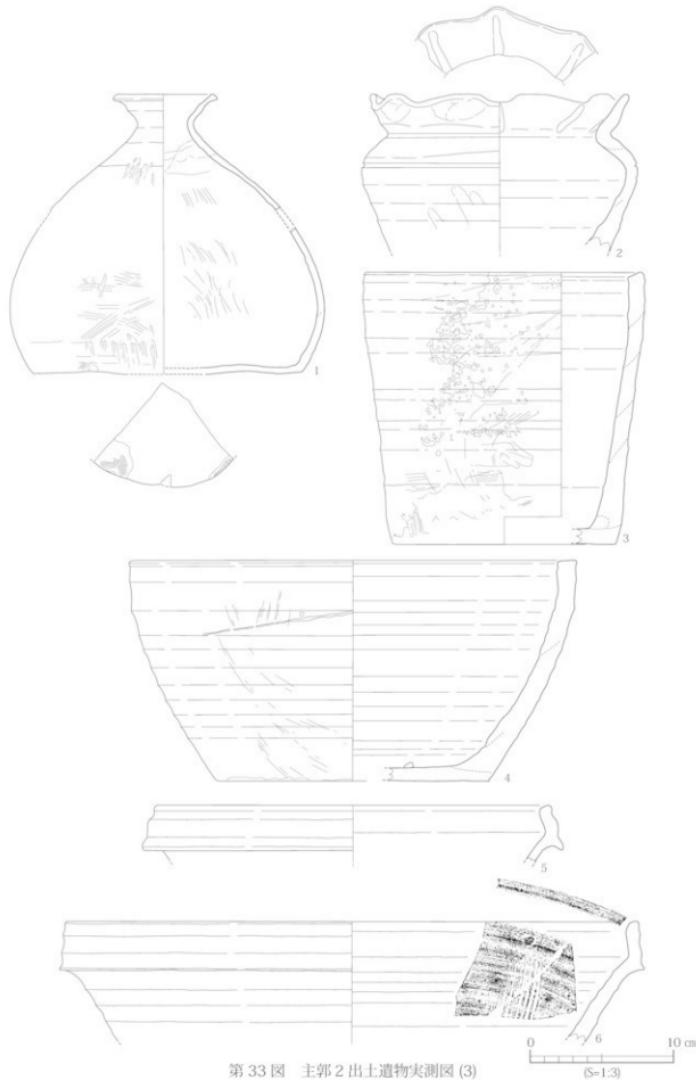
第31図 主郭2出土遺物実測図(1)

し、高台内は露胎とする。釉調は透明度が高く発色が良好である。緻密な胎土は灰白色を呈する。断面の一部に漆が付着することから、漆雜ぎを行ったものと思われる。上田分類の青磁碗B-IV類ないし瀬戸分類の青磁VI類古相に比定され、年代観は15世紀末頃になる。10~18は青磁の稜花皿である。器壁は腰折れで外反気味に立ち上がり、口縁端部は稜を持つ。10~16は内口縁に三条の波状文が線刻される。10は貫入のある青磁釉を施釉する。灰色を呈した胎土は比較的緻密である。11は不透明な青磁釉を施釉し、胎土はやや粗目で灰色を呈する。12は不透明な青磁釉を掛けるが、火膨れをおこして一部に気泡が生じる。胎土は粗目で灰色を呈する。13は貫入のある青磁釉を施釉し、胎土は比較的緻密で灰色を呈する。14は内口縁に幅がある波状文を施文する。褐色を帯びた青磁釉を置付け付近まで施釉し、高台内は露胎となる。胎土はやや粗目で暗灰色を呈する。15と16の内壁面の線刻文様は不明である。15は不透明な青磁釉を高台の内側面まで施釉し、高台内を蛇の目釉剥ぎとする。胎土はやや粗目で灰色を呈している。16の見込みには圓線内に印花で花文を捺す。貫入のある青磁釉を高台の内側面まで施釉し、高台内を蛇の目釉剥ぎとする。胎土は比較的緻密で灰色を呈する。17の見込みは重ね焼きのために見込みの一部の釉を薄く削り取り、このとき磁胎とともに圓線の一部を削り取る。貫入のある青磁釉を置付けまで薄掛けし、露胎となる高台内は削り残しが兜巾状にせりあがる。釉薬の発色は悪く若干褐色を帯びる。胎土は粗目で灰色を呈する。18は見込みの一部が無釉部分として丸く残る。器壁には圓線が浅く線刻される。貫入のある青磁釉を置付けの外際まで薄掛けし、露胎となる高台内は削り残しが兜巾状にせりあがる。釉調は火熱を受けて退色していることから、二次的な被熱を受けたものと思われる。胎土は比較的緻密であるが、火熱を受けてにぶい橙色に変色する。11と12、10と13と第29図2は、釉調と胎土が近似することから同一個体の可能性がある。博多における出土傾向から15世紀後半~16世紀前半の年代観が想定される。19は瓶ないし香炉と思われる細片である。外面は淡緑色に発色する青磁釉が施釉され、内面は無釉となる。胎土は緻密で灰白色を呈する。20は壺の口縁部分で、端部は外反する。内外面に貫入のある淡緑色の青磁釉が施釉され、胎土は緻密で灰白色を呈する。5~20の推定される産地は中国の龍泉窯系であり、釉調の発色が悪い16~18は閩江周辺の窯で作られた可能性も考えられる。

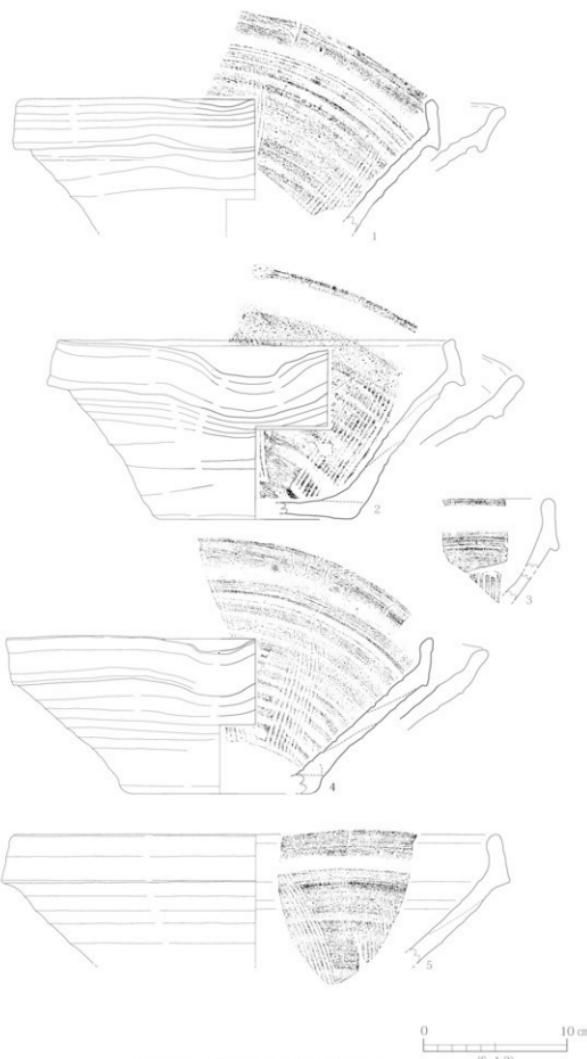
21~25は青花である。21は口縁が外反する青花碗である。器壁は内湾しながら立ち上がる。顔料の発色は異なり、圓線は若干黒味を帯び、見込みの文様は水色を呈する。口縁端部に口説を施す。胎土は緻密で灰色を呈する。22は口縁が外反する青花小杯である。文様は口縁の内外に圓線を配し、外面に梅文を描く。胎土は緻密で白色を呈し、微量の砂粒を含む。23は口縁が外反する大



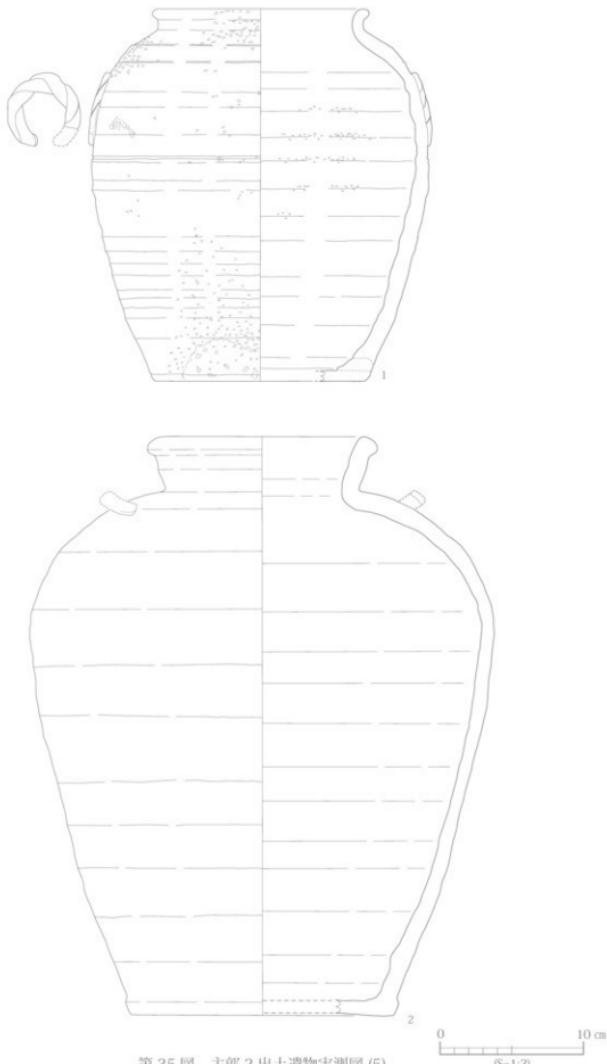
第32図 主郭2出土遺物実測図(2)



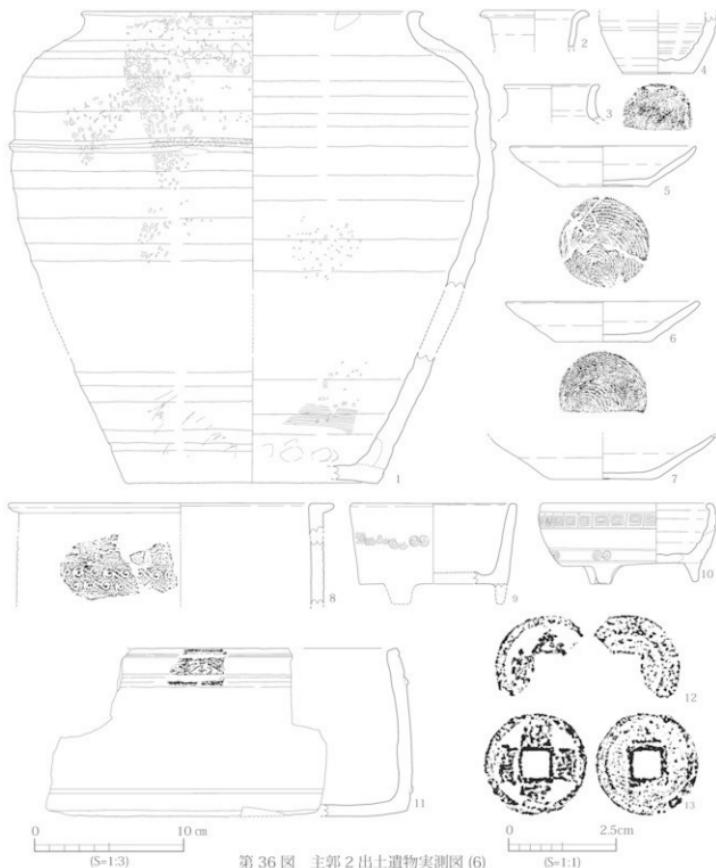
第33図 主郭2出土遺物実測図(3)



第34図 主郭2出土遺物実測図(4)

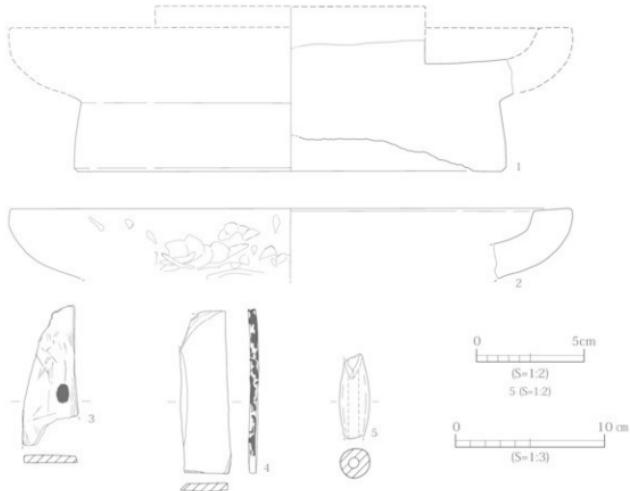


第35図 主郭2出土遺物実測図(5)



第36図 主郭2出土遺物実測図(6)

振りの青花碗である。器壁は緩やかに内湾しながら立ち上がり、高台は貼り付けられる。貫入のある透明釉が豊付けを除いて施釉される。文様は外面に花唐草文、内口縁に四方禪文、見込みは二重圓線内に唐草文を描く。胎土は緻密で白色を呈する。断面の一部に漆が付着することから、漆継ぎを行ったものと思われる。胎土や釉調の一部は火熱により退色しており、二次的な被熱を受けている。21～23は小野分類の染付碗B類に比定され、年代観は15世紀中頃～後半頃になる。24～25は口縁が外反する青花皿である。24は口縁部分で外面に透明釉が施釉されるが、内面は僅かに火照れをおこす。文様は内口縁に幅広の圓線、外口縁に圓線と草花繁ぎが描かれる。胎土は緻密



第37図 主郭2出土遺物実測図(7)

で灰白色を呈する。25の文様は内口線に二重圓線、外口線に圓線を配して唐草文を描く。胎土は緻密で白色を呈する。24・25は小野分類の染付皿B1群に比定され、年代観は15世紀後半から16世紀前半になる。21～25の推定される産地は、中国の景德鎮窯系である。

第32図26～第36図2は陶器である。26は天目碗で、高台脇に小さな面をもち器壁は外開きに立ち上がる。内面から腰部にかけて黒釉を施し、腰部以下を窓削りする。高台の外縁端部を面取りし、高台内を半月状に薄く削り取る。胎土は緻密で灰白色を呈する。断面の一部に漆が付着することから、漆継ぎを行っていたものと思われる。推定される産地は中国福建省の南平茶洋窯が指標とされる。

第33図1は舟徳利である。下膨れの胴部に喇叭口が取りつく。頭部内面から外面にかけて褐釉が薄く施釉され、底部は無釉となる。頭部と底部の二か所に継ぎ目がみられる。頭部以上と腰部以下には回転撫での調整痕、胴部の内面に青海波状の押さえ痕が残る。底部は組作り成形、胴部を叩いて成形し、難轆成形した頭部を貼り合わせたのではないかと思われる。胴部の内面が貼り合わせ付近で波打つことから絞りを加えた形跡がある。薄造りとするために部位ごとに成形方法を変えた可能性が考えられる。底部には貝目跡が認められ、二枚貝の片半を伏せて焼台としている。胎土は緻密で灰褐色を呈する。推定される産地は朝鮮半島である。島根県内における出土傾向から15世紀後半～16世紀前半代の年代観が想定される。

2～4は焼き締め陶器である。2は輪花鉢である。肩が張る胴部に輪花形の口縁が取りつく。口縁端部に指をかけて外側を押さえながら摘み出しており、輪花の谷間にには箆状工具を押し当てて縦筋を入れる。輪花の間隔はまばらである。内壁から肩部にかけて細かな自然釉が降りかかる。灰亦

色を呈した緻密な胎土で、砂粒を含む暗褐色を呈した珪石が溶着する。肩部には継ぎ目がみられることから、頸部以上を貼り合わせたものと思われる。頸部は強く撫でつけてくびれをだし、肩部には一重の沈線が廻らされる。腰部は横撫で調整し、部分的に縱方向に撫である。第14図1と同様に、備前市分類でVA期に見られる胎土を呈していることから、15世紀末から16世紀初め頃の年代観が想定される。3は筒形の鉢である。器壁はほぼ垂直に立ち上がる。器面には浅く輪轂目がつき底部以下を鎧削りする。内面から口縁にかけて薄く自然釉が降りかかる。胴部下半には布帛で拭き上げた痕や縱向きの撫でが部分的に見える。内面は回転撫でで調整する。器壁に現れた粘土の継ぎ目の痕から、底板に器壁となる粘土紐を巻き上げて成形したことがわかる。口唇部はやや内傾して平滑に仕上げられる。褐灰色を呈した胎土は緻密で、白色粒子を少量含む。器面は全体的に還元がかった暗褐色を呈する。内面に剥落がみられることから、二次的な被熱を受けたものと思われる。底部付近は備前市分類でVIB期からVA期にかけての鉢類に見られる特徴を有し16世紀前半代の年代観が想定される。4は丸形の鉢である。器壁はやや内湾気味に立ち上がり、上端部分が垂直方向に折れる。口唇部を平坦にして、底面を平滑に仕上げる。器面には浅い輪轂目がつき、底部以下を鎧削りする。器壁の上部には重ね焼き痕が認められる。内面には軽く自然釉が降りかかり、見込みに自然釉の小塊が付着していることから、窯詰めの一番上に置かれたものと思われる。胎土はやや粗目で黄褐色を呈し、黒色粒子を微量に含む。内面が若干剥落しており、二次的な被熱を受けたものと思われる。第33図5～第34図5は擂鉢である。第33図5は擂鉢の口縁部で、端部を内寄りに延ばして面をもち、下端が突出する。内面には擦り目の先端が入るが単位は不明である。灰赤色を呈した胎土は緻密で、5mm以下の砂粒を比較的多く含む。6は擂鉢の上半部である。口縁端部を均一の幅で延ばして、下端を突出させる。口唇部に重ね焼きの痕が付着し、内面に九条を単位とする擦り目を入れる。緻密な胎土で外面側は灰色で内部は灰赤色を呈し、器面は酸化炎により赤褐色となる。第34図1は擂鉢の上半部である。口縁端部は上に延びて若干内傾する。接合しないが同一個体と思われる注ぎ口部分が出土する。口唇部と口縁下の器壁には重ね焼きの溶着痕がつく。内面には十条を単位とする擦り目が間隔をあけて入れられる。内口縁の際に二～三条の沈線が入る。見込み周辺は使い込まれて磨滅する。灰赤色を呈した緻密な胎土で、白色粒子を微量に含む。2は注口をもつ擂鉢である。器壁は外開きに立ち上がり、上半がやや外反する。内傾した口縁の端部は均一の幅で上方に延ばし、下端が突出する。注口は口唇部と口縁下に指をかけて手前に引き出す。口唇部と口縁下の器壁には重ね焼きの溶着痕がつき、口縁の周りに自然釉が軽く降りかかる。内面には間隔をあけた十条を単位とする擦り目を入れるが、口縁下まで達しない。見込み周辺はよく使い込まれて磨滅する。灰赤色を呈したやや粗目の胎土で10mm以下の小石を少量含む。3は擂鉢の口縁部である。口縁の端部を均一の幅で上方に延ばし、下端が僅かに突出する。灰褐色を呈した緻密な胎土で黑色粒子を微量に含む。口縁下には重ね焼きの痕が残る。4は注口のつく擂鉢である。器壁は外開きに立ち上がる。口縁の端部を均一の幅で上方に延ばして面を持つ。口縁の下端は若干突出する。口縁外付近に軽く自然釉が降りかかる。器壁は輪轂目が目立ち、外面の一部は底部から上に向けて軽く拭き上げる。注口は口唇部と口縁下に指をかけて手前に引き出す。内面には九条を単位とする擦り目をやや斜め方向に間隔をあけて入れるが口縁下まで達していない。見込み周辺はよく使い込まれて磨滅する。破片の一部は火熱を受けて煤が付着しており、二次的な被熱を受けたものと思われる。口唇部と口縁下の器壁には重ね焼きの痕が残る。赤褐色を呈し

た緻密な胎土で、4mm以下的小石を少量含む。5は擂鉢の上半部である。口縁の端部を均一の幅で内よりに延ばして面をもつ。内壁面には十条を単位とする擦り目が間隔をあけてやや斜め方向に入れられる。浅黄色を呈した胎土はやや粗目で黒色粒子を少量含み、器面は酸化炎により淡褐色を呈する。外面の一部は底部から上に向て軽く拭き上げる。第33図5・第34図3は備前市分類のIVB-3期に比定され、年代観は15世紀後半～16世紀初頭頃になる。第33図6・第34図1・2・4・5は備前市分類のVA期に比定され、年代観は15世紀末から16世紀前半頃になる。第35図1は倒卵形の短頸壺で、最大径は上部にある。頸部は短く、口縁端部は外側に折り曲げて玉縁とする。器壁にみえる粘土の繰り目から、底板の上に粘土紐を巻き上げて成形したことがわかる。器壁には浅めの輪轂目がつき、胴部に一条の沈線が廻らされる。肩部に縄目状の耳を貼り付けており、位置から双耳になるものと思われる。底部から胴部にかけて部分的に軽く拭き上げ、口縁から底部の一部には軽く自然釉が降りかかる。外側は灰色、内部は灰赤色を呈した緻密な胎土で、白色の粒子や小石の大長石を少量含む。内面は激しく剥落しており、二次的な被熱をうけたものと思われる。備前市分類のVA期に比定され、15世紀末から16世紀前半頃になる。2は肩の張る倒卵形の壺で最大径は上部にある。頸部は外開きに立ち上がり、口縁を外側に折り曲げて玉縁とする。肩には粘土紐の耳を貼り付けるが数は不明である。器壁は回転撫でで調整され、部分的に底部から胴部にかけて拭き上げる。灰色を呈した粗目の胎土で、15mm以下の小石や砂粒を含む。口縁から肩部かけて自然釉がかかり、内面には軽く自然釉が降りかかる。内面の一部が剥落していることから、二次的な被熱を受けたものと思われる。備前市分類のIVB期に比定され、年代観は15世紀中頃から16世紀初頭になる。第36図1は倒卵形の短頸壺で最大径は上位にある。口縁部を外側に押さえて嘴状に張り出させる。器壁には輪轂目がつき、一条の胸紐を貼り付ける。緻密な胎土で外側は灰色、内部は灰褐色を呈し、7mm以下の小石と白色粒子を含む。器表面は酸化炎で赤褐色を呈し、一部に自然釉が降りかかる。備前市分類のVA期に比定され、年代観は15世紀末から16世紀前半頃になる。2～4は小形壺である。2は小形壺の口縁であり、端部は外反する。内面に自然釉が降りかかるが無釉である。胎土は粗目で灰色を呈する。3は小形壺の口縁で、垂直に立ち上がり端部が僅かに外反する。外面は回転撫で、内面は回転削りで調整される。暗褐色を呈した胎土は緻密であり、白色粒子を微量に含む。4は小形壺の底部である。器壁は丸味をもって立ち上がる。成形は輪轂水挽きで、底部の回転糸切痕を指で撫で消している。灰白色を呈した胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。2～4は備前市分類のIVB期に比定され、年代観は15世紀中頃から16世紀初頭頃になる。第33図2～第36図4の産地は第33図4を除いて、いずれも備前系と推定される。第33図4の産地は不明である。

第36図5～7は土師質土器の皿である。器壁はいずれも薄く、外開きに立ち上がる。5と6の口径は13cmであるが、7はやや大きいものと思われる。5と6には左回りの回転糸切痕が認められるが、7は磨滅して不明である。いずれの胎土も黄褐色を呈して少量の砂粒を含む。

第36図8～11は瓦質土器の火鉢である。8は筒形火鉢の上半部である。胴部には小鹿文とS字文繋ぎの印花が施される。黄褐色を呈した緻密な胎土で砂粒を少量含む。9は足付の筒形火鉢である。器壁はやや外開きに直線的に立ち上がり、見込み外周を指で押さえる。器面には印花でS字文繋ぎを捺す。胎土は淡赤褐色を呈し、砂粒を微量に含む。二次的な被熱を受けて器表面は焼けただれています。10は三足付の浅丸形火鉢である。器壁はやや外開きに立ち上がり、口縁は内湾

する。外口縁に雷文繋、腰部にS字文の印花を捺す。器面に現れる粘土の継ぎ目から、底板の上に器壁となる粘土組を積み上げた様子が窺える。器壁は回転撫でて調整し、足を貼り付ける。胎土は淡褐灰色を呈し、3mm以下の砂粒を少量含む。焼成は悪く灰褐色を呈している。9・10は小形であることから香炉の可能性がある。11は足付の角形火鉢で、平面は方形ないし長方形になる。底面には足を貼り付けた痕が残る。成形は底板と器壁を貼り付ける板作りである。外口縁に二条の突帯を貼り付け、その間に篆文の印花を捺す。胎土は表面側が赤橙色、中心部は薄灰色を呈し、砂粒を微量に含む。二次的な被熱を受けて器表面は赤く焼けただれる。

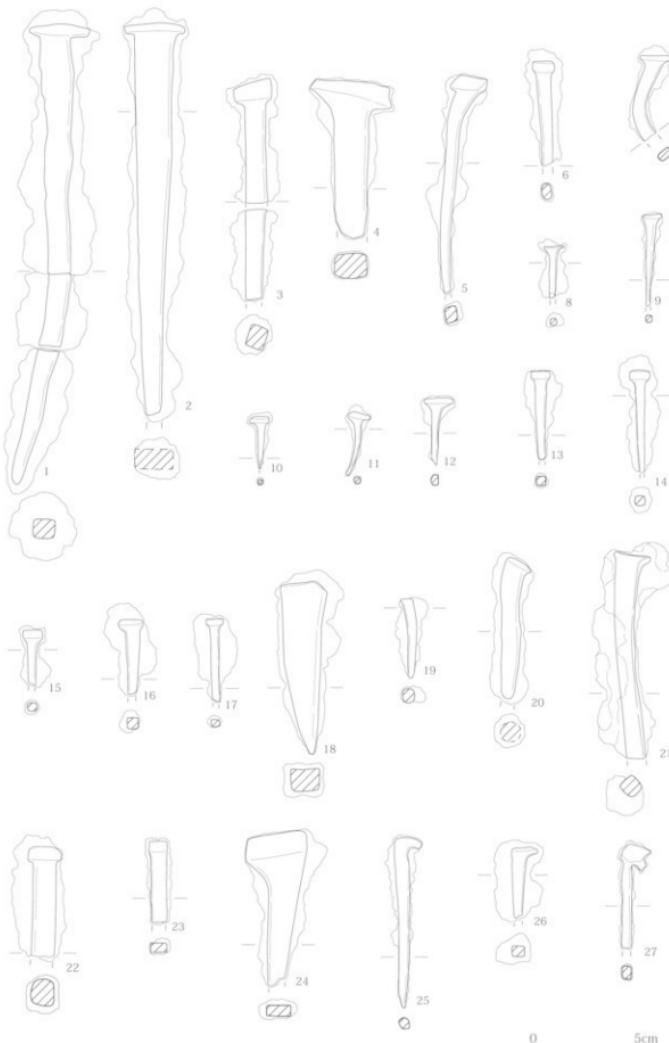
第36図12～13は銅鏡である。12は約半分程度残存し、面は行書の「元□□寶」と判読できる。行書「元」を使用する「元豐通寶（北宋：1078年初鑄）」、「元祐通寶（北宋：1086年初鑄）」、「元符通寶（北宋：1098年初鑄）」に該当するものと思われる。なかでも「元」の一画と二画が繋がり、三画が跳ねずに止める字体を使用した「元豐通寶」の可能性が考えられる。裏面の輪は幅広となつていて至輪径は小さい。13は面に「紹定通寶（南宋：1228年初鑄）」、背文字は「五」と判読でき、紹定五年（1232）の鑄造を表現する。

第37図1～2は石臼である。1は下臼（雄臼）の台座から受け皿の一部で、全体的に火を受け赤色化する。受け皿の基部から台座にかけての表面は平滑に磨かれており、受け皿の内面は使用されて磨滅する。台座の底部は堅状の工具で削りだしたまま未調整となっており、接地面のみ水平に成形される。底部の中央は抉れており、穿孔か剥離か判別できない。石の材質は安山岩である。第16図8と同じ石材で作られていることからセットになるものと思われる。2は下臼の受け皿の一部である。台座から外開きに立ち上がり、腰部を曲げて端部を水平に成形する。内面から外面途中までは平滑に磨かれており、受け皿の基部は削り出し痕が若干残る。石の材質は砂岩である。

3～4は砥石と思われる剥片である。3は不定形を呈して、両面が研磨されて刃先痕が残る。色調は灰褐色を呈し、片面には漆のような黒色の付着物がある。4は短冊形で、長軸の一側面と短軸の二側面は成形された可能性がある。片面が研磨されているが、非常に滑らかで刃先痕を残さない。色調は赤褐色を呈し、一部に漆のような黒色の付着物がある。

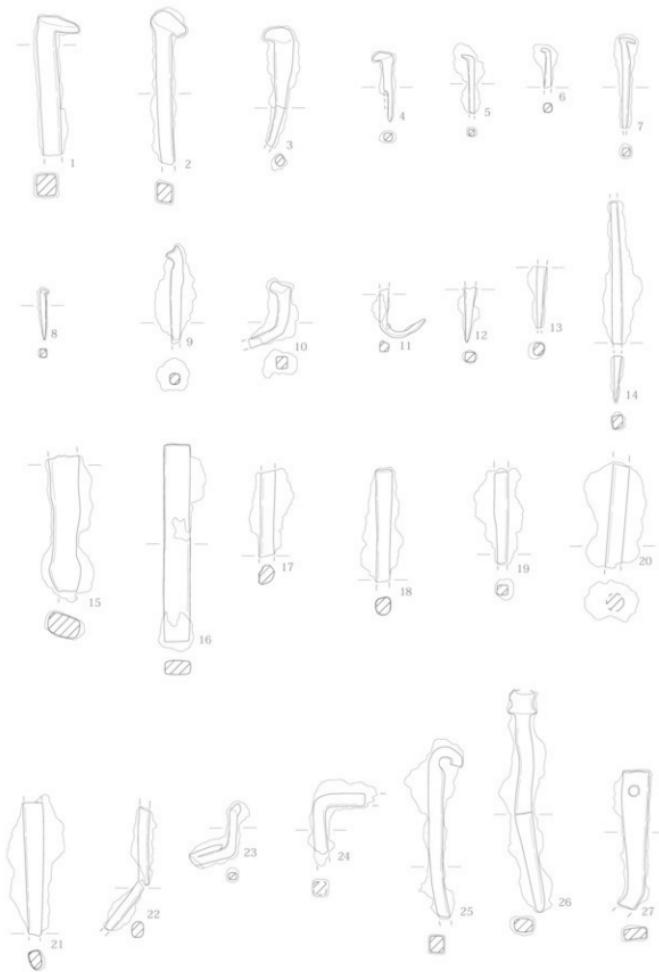
5は円錐形の土鉢である。棒状の芯材に粘土を巻きつけて成形され、芯材に巻いた布帛の布目痕が転写する。胎土は灰褐色を呈し、砂粒を少量含む。

第38～40図は鉄製品である。鉄釘等の鉄製品は小破片を含めて総数468点出土しており、そのうち今回掲載したのは89点である。第38図1～4は大型の鉄釘で頭部が外方に突出して「T」字状になったものである。断面は方形もしくは長方形を呈している。完形のものは少なく、長さは1が21.4cmと最長である。第38図5～第39図25は鉄釘で、頭部は大型のものと同様な「T」字状を呈するものと「L」字状に折り曲げたものがある。断面は方形を呈するものが大半を占める。先端部を欠損するものが多く、完形のものは少ない。第39図23～25は鉄釘にしたが、棒状鉄製品の可能性が考えられる。第39図26は上端部の形状から鉄鎌と考えられるものである。鎌身部は欠損しているが、基部が残存しており、断面は方形状を呈する。27は板状鉄製品で上端に4mmの円孔が施されている。第40図1も板状鉄製品で、断面は扁平な長方形を呈する。2は鋒彫れにより形状がわかりにくいが鐸状の鉄製品と思われ、外縁が外方に若干突出している。3は環状鉄製品で、両端部は密着せずにわずかな隙間があり、「C」字状を呈する。4は環状鉄製品と棒状鉄製品が付着したもので、環状鉄製品の両端部の隙間は3より大きい。5は端部が欠損する環状鉄製



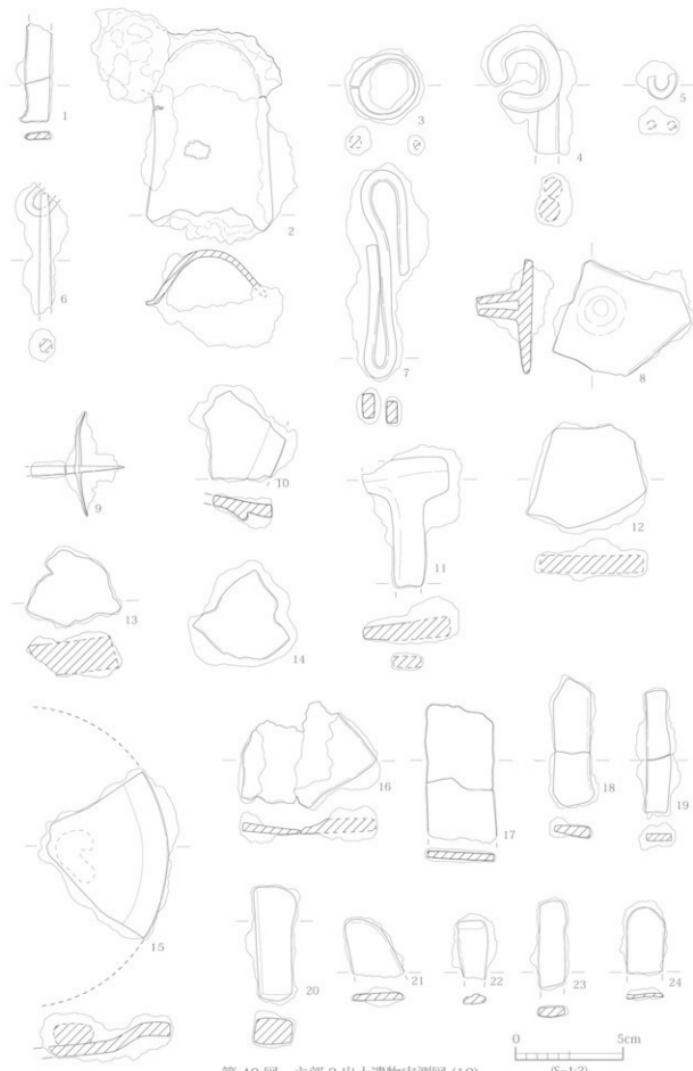
第38図 主郭2出土遺物実測図(8)

0
5cm
(S=1:2)



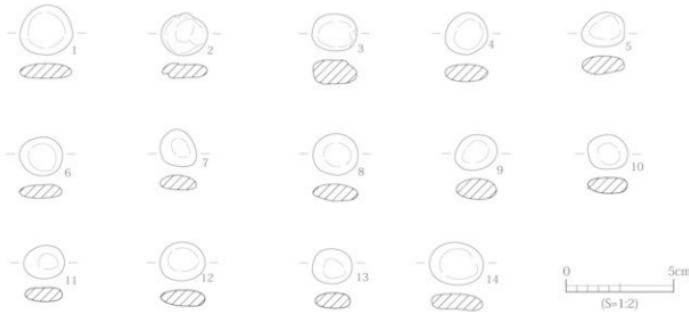
第39図 主郭2出土遺物実測図(9)

0 5cm
(S=1:2)



第40図 主郭2出土遺物実測図(10)

0
5cm
(S=1:2)



第41図 主郭1・2出土遺物実測図

品である。6は棒状鉄製品に「S」字状の鉄製品を繋げた形状を呈している。7は「S」字状の棒状鉄製品である。8・9は金具のようなものであろうか。10～24は板状鉄製品で、10は内面にかえりを有し、15は端部が屈曲する板状のもので中央付近に取っ手らしきものがあることから釜蓋等の用途が考えられる。

第41図は碁石と考えられる石製品である。平面形は円形もしくは梢円形を呈し、長さ1.6～2.4cm、幅1.8～2.5cm、厚さ0.6～1.1cmの扁平なものである。色調に黒色及び白色に近いものの2種類あることから碁石と考えた。

2. 北郭の調査

主郭から約6m下方の幅約13m、長さ約35mの平坦面を北郭としている。堆積土は主郭と比べて約70cmと厚く、これは主郭を構築していた整地土等が崩壊して流れ込んだものと考えられる。また、主郭東端部分と同様に古墳時代の遺構面も存在しており、第7図の第16層、第9図の第17層上面が中世遺構面、その下層が古墳時代の遺構面となる。このことから推察すれば主郭のような造成は行われず、古墳時代に形成された地形を基にして遺構が配置された可能性が高いであろう。

検出された遺構は掘立柱建物跡1棟と礎石建物跡1棟のほかに鍛冶跡2基を確認している。

(1) 建物跡

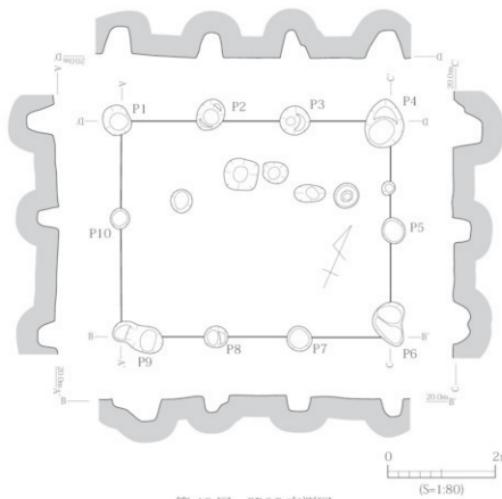
多数の柱穴を検出しているが、明瞭な建物跡として確認できたものは2棟である。建物跡や柵として復元可能な柱列もいくつか存在しているが、柱穴間距離や配列等の微妙な差から判断して、敢えて建物跡としては復元しなかった。

S B 0 5 (第43図)

S B 0 5は北郭の北端で検出した2間×3間の掘立柱建物跡である。建物の規模は桁行5m、梁行4m、柱穴間距離は桁行のP 1～P 4列で1.7m、1.4m、1.9m、P 6～P 9列では1.7m、1.6m、1.7mの順となっている。梁行ではP 1～P 9列で1.8m、2.2m、P 4～P 6列では2.0m



第42图 北郭中世遗構配置図



第43図 SB05 実測図

間隔となっている。主軸方向はN-67°-Eである。

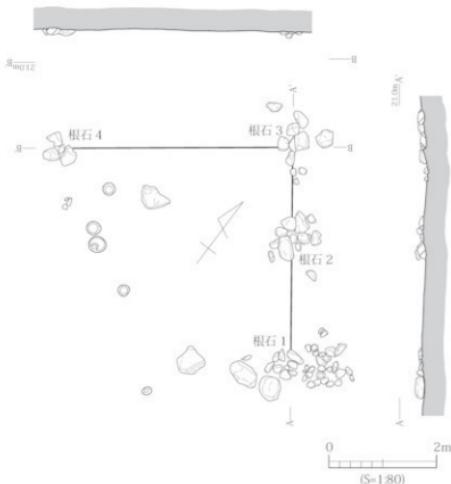
柱穴の平面形態は円形及び橢円形を呈しており、規模は長軸38~90cm、短軸35~74cm、深さ28~55cmを測る。内部に根石などは認められなかった。

詳細な年代や性格については遺物が出土していないため特定できない。

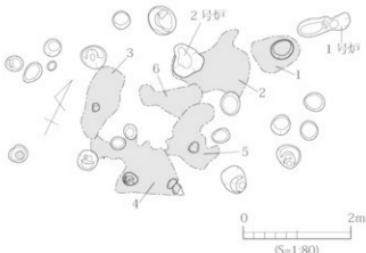
礎石建物3（第44図）

礎石建物跡3はSB05の約3.5m南隣で検出した2間以上の建物である。当初は用途不明の集石遺構を想定したが、周辺に散射している板状の石が礎石に使用された可能性が高いと考えられた。よって、礎石そのものは原位置を保っていないものの、集石は礎石の根石と考えて、ここでは礎石建物としている。

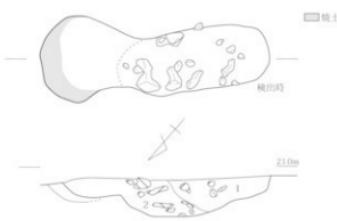
根石は径60cm~1mの範囲に集石され、4箇所確認できた。現状での建物規模は桁行4.3m、梁行4mを



第44図 紋石建物3 実測図



第45図 錫冶炉及び焼土検出状況図



第46図 1号炉実測図

27.8 g、粒状滓 0.22 g、焼土 3で鍛造剝片 17.45 g、粒状滓 1.94 g、焼土 5で鍛造剝片 1.10 g、粒状滓 1.25 g、焼土 6で鍛造剝片 31.54 g、粒状滓 6.10 gが採取されている。

1号炉(第46図)

平面形態は不整形な長楕円形を呈し、規模は長軸 1 m、短軸 28 ~ 33 cm、深さは最大で 18 cm を測る。覆土は 2 層に分かれており、第 1 層、2 層とも炭化物及び鍛冶滓を含んでいるが、特に第 2 層は多量であった。炉の北東端は被熱を受けて焼化しており、この部分が炉床であったと推測される。

1号炉出土遺物(第47図)

鍛冶滓は多量に出土しているが、その一部を図化して掲載した。1 ~ 3 が鍛冶滓で大きさは長さ

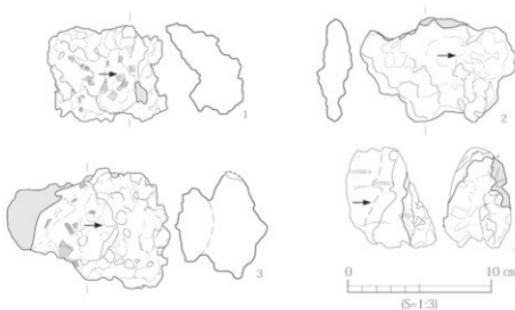
測る。根石間の距離は根石 1・2 及び根石 2・3 間が 1 m、根石 3・4 間は 2.2 m であるが、中間にも礎石が存在していたものと推測される。根石には 15 ~ 45 cm 程度の角礫が使用されており、大きなものが大半を占める。根石 1 の東隣にも根石と考えられる集石が存在するが、他の根石と比べてやや小規模な石を用いていることから、この建物を構成するものではないと判断した。主軸方向は N - 37° - W である。

主郭で検出された礎石建物にはない根石使用という要素を持っていることからみれば、特殊な用途の建物が想定されるが、主郭のように整地された強固な地盤ではないことから根石を使用せざるを得なかったものと考えられる。

性格等については他の礎石建物同様、倉庫等に使用されたものと考えておきたい。また、詳細な年代については遺物が出土していないため特定できない。

(2) 鍛冶跡(第45図)

北郭の中央やや南寄りで 2 基検出された。礎石建物跡 3 の約 5 m 西側に位置するのが 1 号炉、そこから 1.8 m 西に位置するのが 2 号炉であり、2 号炉の周辺には焼土面が 6箇所確認されている。この焼土面に微細遺物が含まれている可能性が考えられ、土壤選別の結果、1 号炉で鍛造剝片・粒状滓 1.94 g、焼土 5 で鍛造剝片 1.10 g、粒状滓 1.25 g、焼土 6 で鍛造剝片 31.54 g、粒状滓 6.10 g が採取されている。



第47図 1号炉出土遺物実測図

8.1～11.2cm、幅6.6～7.2cm、厚さ2.5～8.1cmを測る。4は羽口である。

2号炉(第48図)

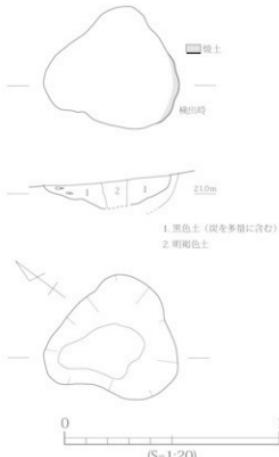
平面形態は不整形な円形を呈し、規模は径58cm、深さ約10cmを測る。覆土は炭化物を多量に含む黒色土であり、中央部分には後世の攪乱である明褐色土が混入している。南側が被熱を受けて焼化しているが、内部から鍛冶滓等の遺物は認められていない。

北郭遺物出土状況(第49図)

主郭2からの流れ込みと混在している状況であるが、内容的には主郭出土のものと大差ない。ただ北部の特徴を示す遺物として、鍛冶に関わる坩堝が出土している。

北郭出土遺物(第50～52図)

第50図1～6は磁器である。1は白磁の腰折皿で、口縁は外反する。見込みと器壁の境目に浅い段をもつ。貫入のある透明釉が施釉され、腰部以下は露胎となる。胎土は白色を呈する。推定される産地は中国の景德鎮窯系である。

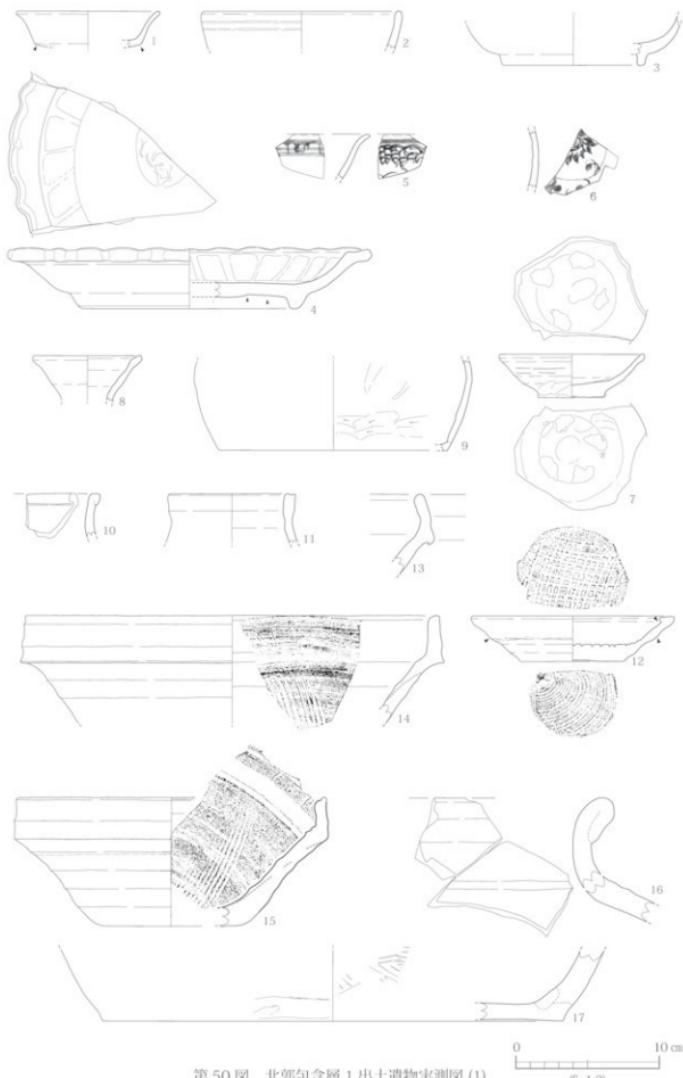


第48図 2号炉実測図

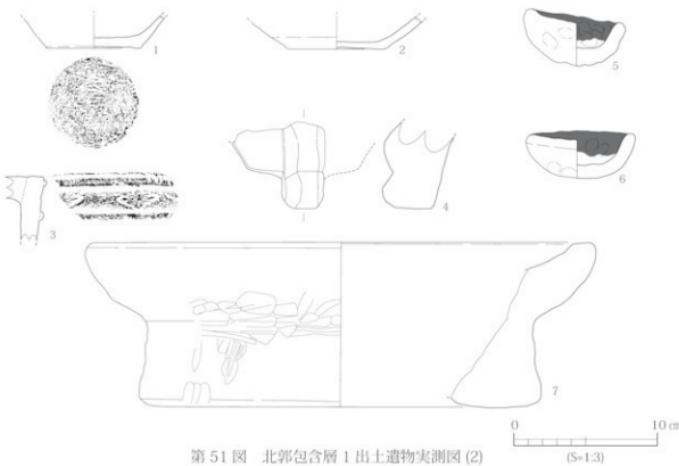
2～4は青磁である。2は口縁が直口する青磁碗で、外口縁に二重圓線が線刻される。青磁釉を厚く施釉し、胎土は灰白色を呈する。上田分類のE類に比定され、年代観は15世紀後半代頃になる。3は青磁鉢の底部と思われる。青磁釉は墨付けを含めて厚掛けされる。見込みには鍋の圓線が入る。胎土は緻密で、青灰色を呈する。4は折縁の青磁盤で、口縁は棱花となる。折縁内面は薄く削り、口縁端部を玉縁状に膨らませる。内面には放射状の鍋を入れ、見込みに印花を捺す。青磁釉を二度掛けして濃緑色に発色させる。高台内は蛇の目状に釉剥ぎし、チャツと思われる筒状の焼台痕が残る。胎土は粗目で灰白色を呈する。瀬戸分類の青磁V類新相に比定され、年代観は15世紀



第49图 北郭遗物出土状况图



第50図 北郭包含層1出土遺物実測図(1)



第51図 北郭包含層1出土遺物実測図(2)

(S=1.3)

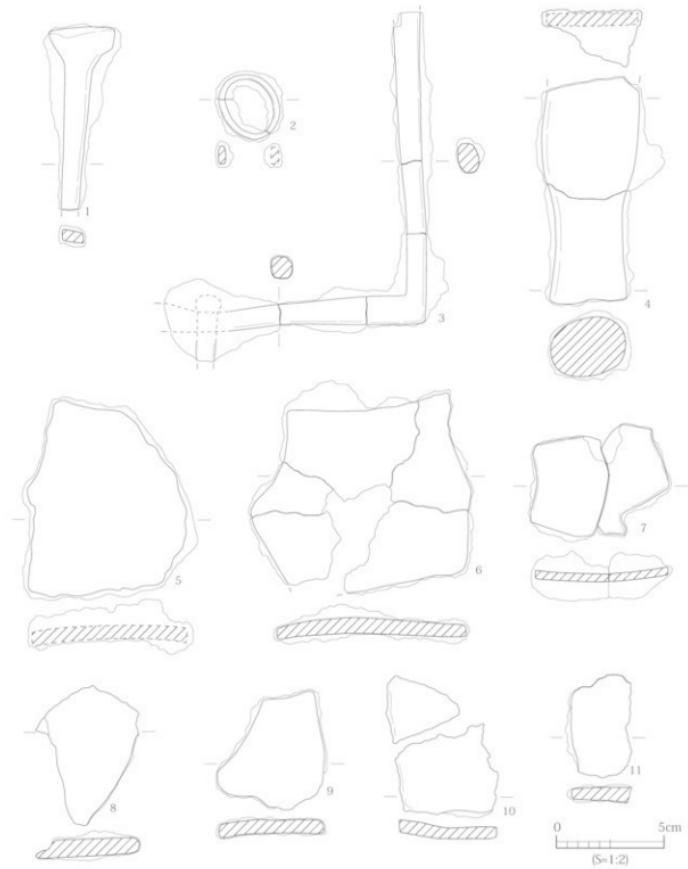
中葉頃になる。第29図4と同一個体になる可能性がある。2~4の推定される産地は中国の龍泉窯系である。

5・6は青花である。5は口縁が外反する青花碗で、外面は青海波状に樹木を描き、内口縁に帶文を描く。胎土は若干粗目で灰白色を呈する。小野分類の染付碗B類に比定され、年代観は15世紀中頃から後半になる。6は壺ないし瓶となる青花の細片である。外面には花唐草文が描かれ、内面は無釉となる。胎土は灰白色を呈する。5・6の推定される産地は、中国の景德鎮窯系である。

7~17は陶器である。7は灰青沙器の小皿で、腰部以下を篦削りして器壁は開き気味に立ち上がる。灰釉を総掛けし還元焼成するが、見込みから高台付近に焼ムラが生じる。重ね焼き用の砂目が見込みと豊付けに四ヶ所ずつみられる。胎土は砂粒を含み、還元がかった部位は褐色を呈する。島根県内における出土傾向から15世紀後半~16世紀前半代の年代観が想定される。8・9は褐釉陶器である。8は外開きに立ち上がる徳利口縁である。内外面に褐釉が施され、胎土は粗く灰色を呈する。9は瓶の底部で、下膨れに膨らむ胴部と底広の器形から舟徳利と思われる。器壁は叩き成形で薄作りされる。内外面には薄く褐釉を施釉し、胎土は粗く暗灰色を呈する。7~9の推定される産地は朝鮮半島である。島根県内における出土傾向から15世紀後半~16世紀前半代の年代観が想定される。

10・11は鉄釉陶器である。10は壺口縁で、端部を外側に折り曲げて玉縁とする。外面は黒味のある鉄釉を施釉し内面は無釉である。胎土は緻密で、にぶい黄褐色を呈している。11は直口する壺の口縁である。器壁は部分的に火脛れを起す。外面に鉄釉を施釉する。胎土は粗目でにぶい褐色を呈する。10・11の推定される産地は中国である。

12は灰釉陶器の鉢皿である。器壁は外開きに立ち上がり、口縁端部を内側に折り返して平坦とする。見込みには鉢目が格子状に刻まれる。底部には左回りの回転糸切痕が残る。内口縁から腰部



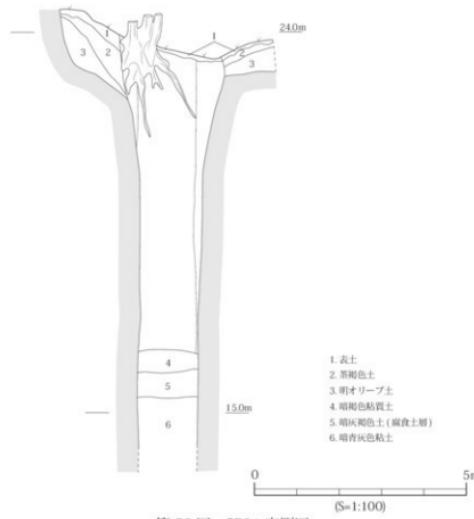
第52図 北郭包含層1出土遺物実測図(3)

にかけて貫入のある灰釉が施釉され、内面と底部が露胎となる。胎土は粗目で灰褐色を呈する。鉢面は使用されて摩耗する。推定される产地は瀬戸美濃系である。藤沢編年の古瀬戸後期IV期に比定され、年代観は15世紀後半である。

13～17は焼き締め陶器である。13は擂鉢の口縁で、内寄りに均等の厚さで立ち上がり下帯部が若干突出する。胎土は緻密で外面付近は青灰色、内部は灰赤色を呈する。器面は酸化炎により赤茶に発色し内面に自然釉が降りかかる。14は擂鉢の口縁である。口縁部は内側に屈曲して均等の

厚さで立ち上がり、下端は僅かに突出する。器面は酸化炎により赤茶に発色するが、胎土の色調は外面側が青灰色、内部は灰赤色を呈する。緻密な粘土を使用し、少量の小石を混ぜ入れる。九条以上を単位とする擦目が内面上位まで入る。15はやや小ぶりな擂鉢である。腰部は丸味を帯びるが、中位よりやや外反気味に立ち上がる。口縁は直立して上方に延ぼし端部に浅い段をもつ。十条を単位とする擦目をやや斜め方向に入れる。擦面は使い込まれて磨滅する。少量の小石を含んだ胎土は粗く、色調は外面側が黄灰色、内部は暗灰色を呈する。内面の上位には自然軸が降りかかり、口縁下の器壁に重ね焼きの痕が残る。13～15は備前市分類のVA期に比定され、年代観は15世紀末から16世紀前半頃になる。16は甕の口縁部である。頸部は外反気味に立ち上がり端部を外側に折り曲げて長楕円の玉縁となる。玉縁の下位は強く撫でつけられる。砂粒を含む緻密な胎土でにぶい赤褐色を呈する。頸部付近には自然軸が降りかかる。17は甕の底部である。紐作りで成形され、内面の器壁の立ち上がりは籠状の工具で調整される。16・17は同一個体になる可能性がある。備前市分類のIV B期に比定され、年代観は15世紀中頃から16世紀初頭頃になる。13～17の推定される产地は備前系である。

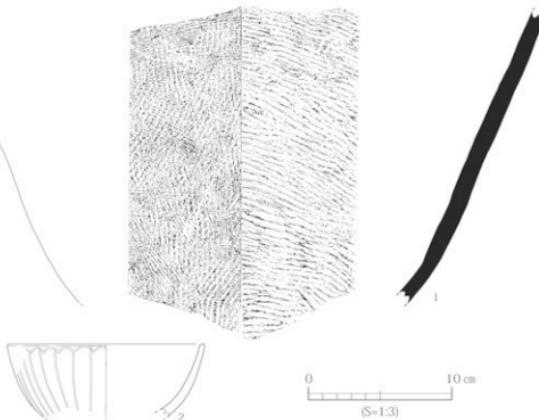
第51図1～6は土器で、1・2は土師質土器の皿の底部である。胎土は1が橙色、2は黄橙色であるが、それぞれ灰色粘土が練り込まれてマーブル状となる。1より2の方が器壁は薄く若干外開きになる。3・4は瓦質土器である。3は角形火鉢の口縁である。平面は方形を呈して、口縁部は水平に折れ曲がって面を成す。外口縁に二条の凸帯を貼り付けて、その間に剣花菱文の印花を捺す。胎土は粗目で砂粒を含む。胎土の色調は外面側がにぶい黄橙色、内部は灰色を呈する。4は火鉢の足である。足部は上下にくびれて、側面は面取りされる。付け根の両脇には板状の支えを作う。



第53図 SEI01 実測図

胎土は緻密で少量の砂粒を含み、胎土の色調は外面側が灰白色、内部が暗灰色を呈する。5・6は坩堝と考えられる手捏ね土器で、口縁内面が煤けて黒色となっている。

7は石臼の下臼(雄白)で、台座から受け皿の一部になる。受け皿の基部から台座にかけては多数の調整痕が残るが、受け皿の外面上部から内面にかけては平滑に磨かれている。石の材質は凝灰岩である。全体的に火を受けて赤色化している。当遺跡からは3個体の下臼が出土しているが、いずれも材質が異なる。



第 54 図 SEO1 出土遺物実測図

第 52 図は鉄製品である。1 は鉄釘で頭部は外方に突出して、「T」字状となる。2 は環状鉄製品で「C」字状を呈している。3 は「L」字状を呈する棒状鉄製品で両端を欠損している。頭部の丸い他の棒状鉄製品と繋がっている。4 は用途不明な鉄製品である。5 ~ 11 は板状鉄製品である。

SEO1 (第 53 図)

SEO1 は主郭 1 と主郭 2 の境に位置する北向き斜面で確認された井戸跡である。当初は新しい井戸跡と考えられたが、調査終了間に断ち割り調査を行ったところ、内部から青磁碗等が出土したことから、山城に伴うものであると判断した。

素掘りの井戸跡で、堅い岩盤を深く掘り下げる造られており、壁面には工具痕が薄く残る。平面形態は一辺約 1.3 m の方形を呈しており、深さは約 11 m の地点までは確認したものの、底面までには至らなかった。確認できた内部の堆積土は上から暗褐色粘質土、腐植土を含む暗灰褐色土、暗青灰色粘質土の順となり、暗青灰色粘質土から須恵器表片と青磁碗が出土している。なお、これらの遺物は主郭から出土した遺物と接合できた。

SEO1 出土遺物 (第 54 図)

1 は須恵器の表裏部片で、内外面に平行叩きを施している。2 は細蓮弁文が施文される青磁碗である。蓮弁としての単位は比較的明瞭に分かれる。灰色を呈した胎土は粗目で、貫入のある薄い釉を施釉する。推定される産地は中国の龍泉窯系である。土田分類の青磁碗 B-Ⅲ類ないし瀬戸分類の青磁V類新に比定され、年代観は 15 世紀中葉頃になる。

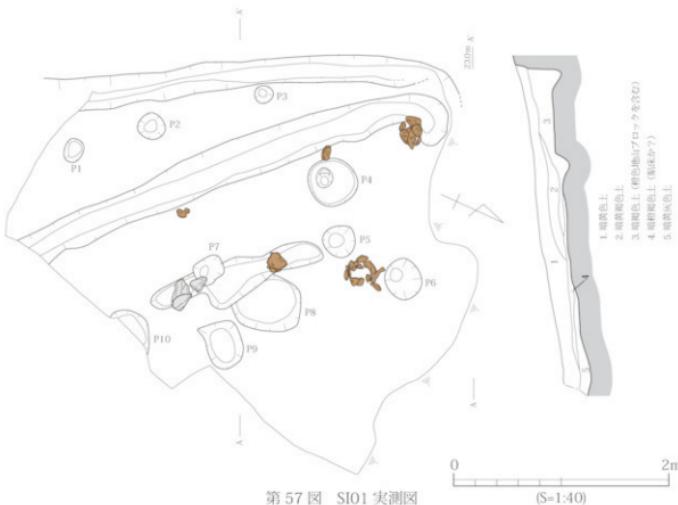
第 3 節 古墳時代遺構の調査

前述したように主郭東端部及び北郭から古墳時代の遺構面が確認されている。主郭側では竪穴建

第55図 静間城跡古墳時代遺構面位置図



第 56 図 北郭古墳時代遺構配置図



物跡1棟と加工段3棟が東向き斜面から検出された。北郭では竪穴建物跡1棟のほかに多数の柱穴を確認しているが、明瞭な建物跡として復元できるものは確認できなかった。

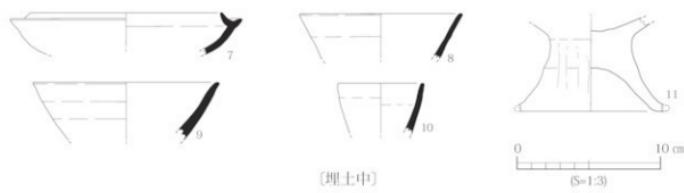
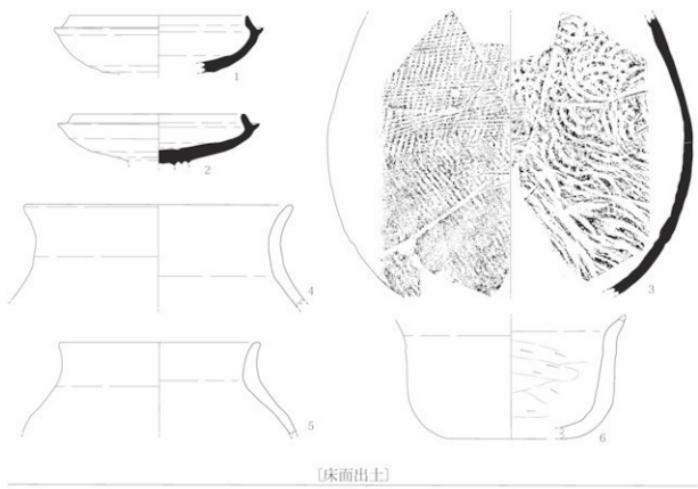
S I O 1 (第 57 図)

S I O 1 は主郭東端部の東側斜面で検出された竪穴建物跡で、西側上方に向かって加工段3棟が存在している。平面形態については、南壁及び東壁が調査区外に入ること、北壁は北郭の切岸によって削平されているため明瞭には判断できないが、西壁の状況から推察すれば丸形を呈していたものと考えられる。現状での床面規模は最大で南北4.3m、東西3.9m、壁面の高さ30cmを測る。西壁側には幅25cm、深さ約10cmの壁帶溝が廻り、その内側にも幅40cm、深さ10cmの溝が認められることから、建て替えが行われたと推測される。柱穴は10個検出されている。柱穴配置が若干いびつであるものの、P4、P6が主柱穴の可能性があるものと考えられる。平面形態は円形を呈するものが多く、径18~64cm、深さ10~25cmを測る。その他、焼土等は認められなかった。

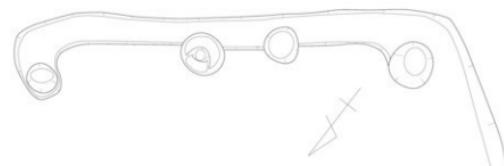
遺物は覆土中にも含まれているが、床面中央付近で須恵器環や土師器甕などが出土している。これらの遺物から古墳時代後期の竪穴建物跡と判断される。

S I O 1 出土遺物 (第 58 図)

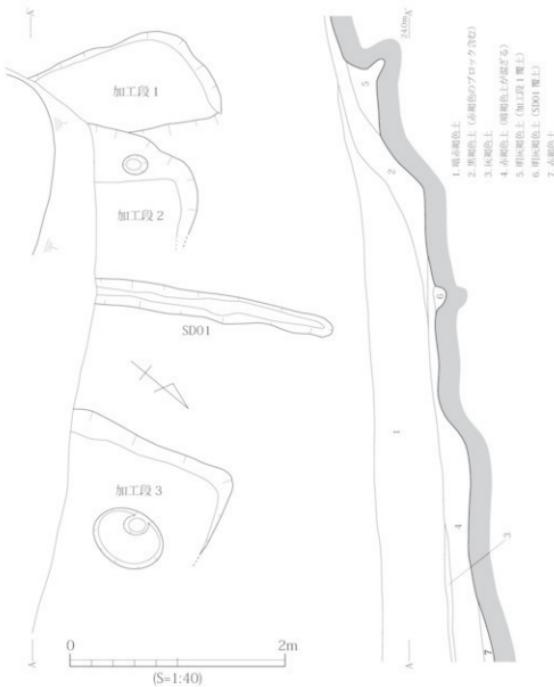
1~6は床面出土のもので、1~3は須恵器、4~6は土師器である。1は环身で立ち上がりは内傾してのび、端部内側に平坦面をもつ。2は有蓋高环の环部分で、立ち上がりは1と同様内傾してのび、端部は丸くおさめる。3は腹胸部で外面平行叩き、内面同心円状叩きを施している。4・5は甕で口縁部は緩やかにのびている。全体的に摩滅が著しく、調整は不明である。6は鉢と考えられ、垂直気味に立ち上がる体部から外反する口縁部を有する。



第 58 図 SI01 出土遺物実測図



第 59 図 SI02 実測図



第60図 加工段1~3実測図

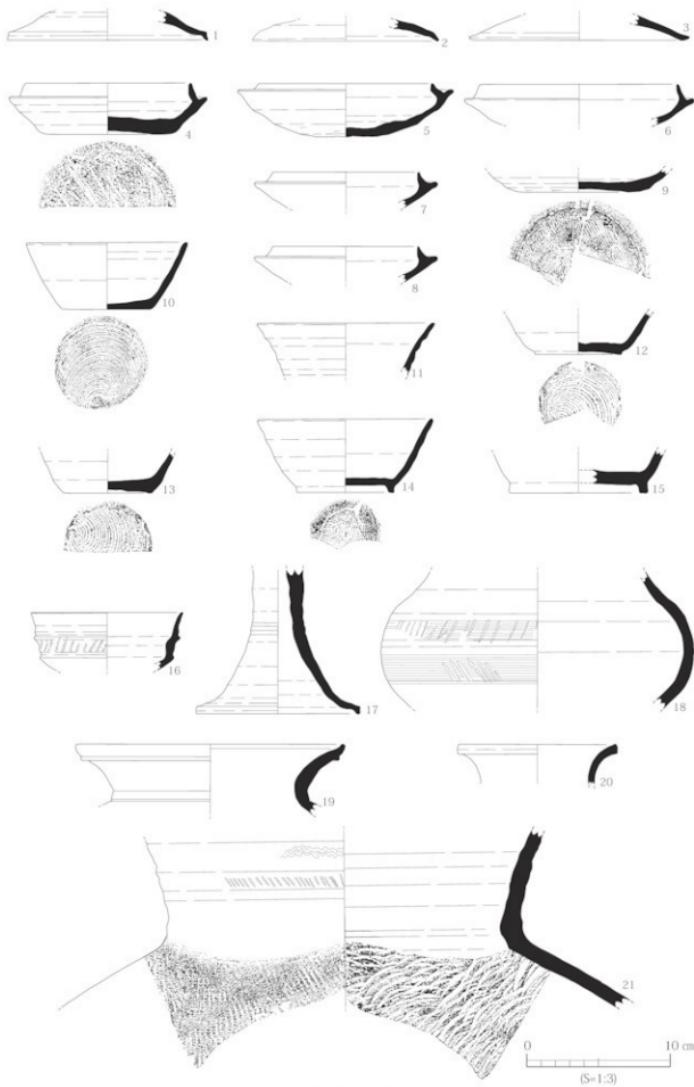
7~11は覆土中出土のもので、7~10は須恵器、11は土器である。7は环身で立ち上がりはやや低い。9・8は外傾して立ち上がる口縁部をもつ环である。10は壺でやや外傾気味に立ち上がる口縁部を有する。11は高环の脚部で「ハ」の字状に短く聞く。

S I O 2 (第59図)

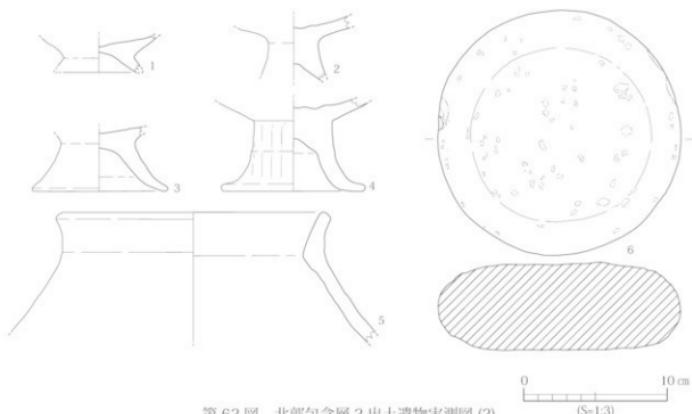
北郭の西端で検出された溝であるが、東西の端が北に屈曲していることから、竪穴建物の壁帶溝の可能性が考えられたため竪穴建物跡としている。中世の柱穴と切り合っているが、溝の規模は東西長で4.2m、幅30cm、深さ約15cmを測る。この竪穴建物に伴う柱穴や遺物は確認できなかった。

加工段(第60図)

主郭東端部の整地層下層で検出され、南側は調査区外に延びているため全形は把握できない。明瞭な加工段は3棟確認しているが、加工段2と3の間に長さ2.2m、幅25cm、深さ10cmの南北方向に延びる溝(S D O 1)が存在しており、竪穴建物の壁帶溝の可能性も推測されるものの、こ



第61図 北郭包含層2出土遺物実測図(1)



第 62 図 北郭包含層 2 出土遺物実測図(2)

こでは溝状遺構としている。

これらの遺構の時期は切り合い関係や上層断面の観察から S D O 1 → 加工段 3 → 加工段 2 の順であることがわかる。加工段 1 は加工段 2 によって切られていることから、加工段 2 より先行するものと考えられるが明確な時期を把握することはできなかった。

加工段 1

平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、現状での規模は南北軸 1.2 m、東西軸 90cm、壁高 20cm を測る。床面に柱穴や溝等は確認できず、遺物も出土していない。

加工段 2

平面形態は加工段 1 同様に隅丸方形を呈するものと考えられ、現状での規模は南北軸 95cm、東西軸 1m、壁高 30cm を測る。壁面には上層からの柱穴が掘り込まれていた。この加工段に伴う柱穴や溝は確認できなかった。

加工段 3

平面形態は方形を呈するものと考えられ、現状での規模は南北軸 1.6 m、東西軸 1.1 m、壁高 18cm を測る。床面で柱穴 1 個が確認されている。柱穴の平面形態は楕円形状を呈し、長軸 70cm、短軸 54cm、深さ 10cm を測る。覆土の赤褐色土中から須恵器小片が出土しているが、図化は不可能であり、時期を確定するまでには至らなかった。

古墳時代包含層出土遺物（第 61・62 図）

古墳時代遺構面を覆う土層から出土したもので、古墳時代から古代の遺物が認められる。第 61 図 1～21 は須恵器、第 62 図 1～5 は土師器、6 は石器である。第 61 図 1～3 はかえりの付かない蓋で、1、2 は口縁端部が下方に屈曲するが、3 は外方に短くのびている。4～15 は环である。4～8 は立ち上がりを有するもので、5 の端部は平坦であるが、他は丸みをおびている。4 の底部外面には叩きが残る。9 は环身の底部で外面に叩きが残る。10～15 は底部から外傾してのびる

体部をもち、14と15は高台を有している。口縁部は外反するものや直線的にのびるものがある。底部外面に回転系切り痕を残す。16は高环の环部と思われ、中央付近に2本の稜を有し、その間に櫛状工具による刺突文を施している。17は高环の脚部で、端部は下方に屈曲している。18は壺の胴部で、外面に平行沈線と刺突文を施している。19は壺口縁部で口縁端部外面に突帯を有する。20は壺の口縁部、21は甕の頸部である。

第62図1～4は高环及び低脚环の脚部で全体的に摩滅が著しい。脚部は「ハ」の字状に開き、端部は4のように外方に屈曲するものも認められる。5は甕で外傾してのびる口縁部をもつ。6は磨石である。

第1表 静間城跡 出土土器観察表

Fig.	遺物番号	写真番号	調査区	出土位置	種別 / 材質	器種	口径 (cm)	高さ (cm)	底径 (cm)	釉薬 / 色調	胎土	成形 / 烧成	文様 / 植定層地 / 参考 / 年代	
14	1	21	E割2	S802 P77	陶器	輪花鉢	(18.0)		(13.0)		暗褐色	組作り成形	複数: 菊瓣文 / 底地: 龍泉系 参考: 二次焼成	
16	1	21	E割2	S803 P109	磁器	青磁碗	(13.6)				灰白色	織繩成形	文様: 菊瓣文 / 年代: 龍泉系 年代: 通BⅡ	
16	2	21	E割2	S803 P48	磁器	青磁碗	(12.9)				灰白色	織繩成形	文様: 蘭草綱蓮文 / 形状: 浅碗 底地: 龍泉系 / 年代: 通BⅡ	
16	3	21	E割2	S803 P59	磁器	青磁桜花鉢	(11.8)				灰褐色	織繩成形	文様: 桜文 / 底地: 龍泉系	
16	4	21	E割2	S803 P108	磁器	青花端口鉢	(16.7)			透明釉・青料	白色	織繩成形	文様: 淡青草文 / 花絵文 / 底地: 龍泉系 / 年代: 通BⅠ	
16	5	21	E割2	S803 P116	陶器	从釉鉢皿	(13.4)				灰褐色	織繩成形	文様: 亂文 / 美濃系 参考: 二次焼成	
16	6	21	E割2	S803 P108	陶器	輪花鉢	(21.4)	14.8	(13.6)		灰褐色	組作り成形	複数: 菊瓣文 / 底地: 龍泉系	
16	7	21	E割2	S803 P38	土師質土器	皿					6.4	1mm以下砂粒含む	外: 回転成形 内: 回転成形	
29	1	22	E割1	召答器	磁器	青磁碗	(14.2)				灰褐色	織繩成形	文様: 花文・蓮作か 底地: 龍泉系 / 年代: 開CⅡ	
29	2	22	E割1	召答器	磁器	青磁桜花鉢	(12.2)				灰白色	織繩成形	文様: 淡青文 / 頭縫 底地: 龍泉系 / 年代: V割	
29	3	22	E割1	召答器	磁器	青磁桜花鉢	(13.8)	3.5	6.3		灰褐色	織繩成形	文様: 淡青文 / 頭縫 底地: 龍泉系	
29	4	22	E割1	召答器	磁器	青磁折沿盤	(17.8)				灰褐色	織繩成形	文様: 菊瓣文 / 底地: V割	
29	5	22	E割1	召答器	磁器	青花端口鉢	(12.2)	(7.4)		透明釉・青料	白色	織繩成形	文様: 淡青文 / 丁子花 底地: 龍泉系 / 年代: 通BⅠ	
29	6	22	E割1	P198	陶器	鉢	(18.6)	10.4	(11.8)		灰褐色	組作り成形	文様: 菊瓣文 / 磁器: 8条単位 年代: 開C B-3	
29	7	21	E割1	P197	瓦質土器	浅形火鉢	(23.8)	6.5	(20.0)			淡黄褐色	組作り成形 備考: 菊瓣文	
31	1	21	E割2	召答器	須器	耳舟					8.0	1mm以下砂粒含む	外: 回転成形 内: 回転成形	
31	2	21	E割2	召答器	須器	耳舟(高台付)		(11.4)			灰褐色	1mm以下白色の 砂粒を少額含む	外: 回転成形 内: 回転成形	
31	3	23	E割2	召答器	須器	蓮					5.4	白色の砂粒を少 量含む	外: 回転成形 内: 回転成形	
31	4	21	E割2	召答器	須器	蓮	(24.2)					1mm以下白色の 砂粒を多く含む	外: 回転成形 内: 回転成形	
32	1	24	E割2	召答器	磁器	白磁碗	(7.8)	(1.6)	(2.6)	透明釉	白色	織繩成形	文様: 菊瓣文 / 底地: 龍泉系 参考: 菊瓣文 / 年代: 盆D	
32	2	24	E割2	召答器	磁器	白磁碗	(8.5)			透明釉	白色	織繩成形	文様: 菊瓣文 / 底地: 龍泉系 参考: 菊瓣文 / 年代: 盆D	
32	3	24	E割2	召答器	磁器	白磁碗	(9.8)	2.2	(4.2)	透明釉	白色	織繩成形	文様: 菊瓣文 / 底地: 挿高台・ 参考: 二次焼成 / 年代: 盆D	
32	4	24	E割2	P7	磁器	白磁内側皿					6.8	透明釉	文様: 不明 / 磁器: 2次焼成	
32	5	24	E割2	召答器	磁器	青磁碗	(14.0)				灰白色	織繩成形	文様: 淡青文 / 花文 / 底地: 龍泉系 参考: 菊瓣文 / 年代: 開C B-3	
32	6	24	E割2	召答器	磁器	青磁碗	(13.4)	(4.3)			灰白色	織繩成形	文様: 菊瓣文 / 底地: 龍泉系 参考: 菊瓣文 / 年代: 通BⅢ	
32	7	24	E割2	召答器	磁器	青磁碗	(14.0)				灰白色	織繩成形	文様: 菊瓣文 / 底地: 龍泉系 参考: 菊瓣文 / 年代: 通BⅢ	
32	8	24	E割2	召答器	磁器	青磁碗	(14.8)	7.7	(5.8)	青磁釉	に赤・橙色	織繩成形	文様: 菊瓣文 / 底地: 龍泉系 参考: 二次焼成 / 磁器: 2次焼成	
32	9	24	E割2	召答器	磁器	青磁碗	(12.8)	7.1	8.8	青磁釉	灰白色	織繩成形	文様: 蘭草綱蓮文 / 底地: 龍泉系 参考: 菊瓣文 / 年代: 通BⅣ	
32	10	24	E割2	召答器	磁器	青磁桜花鉢					青磁釉	灰色	織繩成形	文様: 淡青文 / 底地: 龍泉系
32	11	24	E割2	召答器	磁器	青磁桜花鉢					青磁釉	灰色	織繩成形	文様: 淡青文 / 底地: 龍泉系
32	12	24	E割2	召答器	磁器	青磁桜花鉢	(12.0)				青磁釉	灰色	織繩成形	文様: 淡青文 / 底地: 龍泉系
32	13	24	E割2	召答器	磁器	青磁桜花鉢	12.4				青磁釉	灰色	織繩成形	文様: 淡青文 / 底地: 龍泉系
32	14	24	E割2	召答器	磁器	青磁桜花鉢	(14.8)		(5.6)		青磁釉	暗灰色	織繩成形	文様: 淡青文 / 底地: 龍泉系
32	15	25	E割2	召答器	磁器	青磁桜花鉢	(11.8)	3.4	(6.2)		青磁釉	灰色	織繩成形	文様: 淡青文 / 底地: 龍泉系
32	16	25	E割2	召答器	磁器	青磁桜花鉢					(5.6)	青磁釉	灰色	織繩成形
32	17	25	E割2	召答器	磁器	青磁桜花鉢	(12.7)	3.2	(5.6)		青磁釉	灰色	織繩成形	文様: 菊瓣文 / 底地: 龍泉系 参考: 内面削ぎ
32	18	25	E割2	召答器	磁器	青磁桜花鉢	11.6	3.0	5.0		青磁釉	に赤・橙色	織繩成形	文様: 菊瓣文 / 底地: 龍泉系 参考: 二次焼成
32	19	25	E割2	召答器	磁器	青磁瓶 or 香炉					青磁釉	灰白色	織繩成形	文様: 不明 / 底地: 龍泉系
32	20	25	E割2	召答器	磁器	青磁瓶	(5.2)				青磁釉	灰白色	織繩成形	文様: 不明 / 底地: 龍泉系

Fig	器物 番号	写真 版画	調査区 名	出土 地点	種別/材質	器種	口径 (cm)	縦高 (cm)	底径 (cm)	色調/勧葉	胎土	焼成/成形	備考・文様・产地
32	21	25	主部2	包合層	磁器	青花端反碗	(12.0)			透明釉、 青料	灰色	輪轉成形	文様：團扇・束腰；燒成：景德鎮系 標考：口絞；年代：宋BII
32	22	25	主部2	包合層	磁器	青花小杯	(7.0)			透明釉、 青料	白色	輪轉成形	文様：花卉等々・圓溝文 産地：景德鎮系；燒考：清道光・ 次文化；時代：清
32	23	25	主部2	包合層	磁器	青花端反碗	(17.2)		(7.8)	透明釉、 青料	白色	輪轉成形	文様：花卉等々・圓溝文 産地：景德鎮系；燒考：清道光・ 次文化；時代：清
32	24	25	主部2	包合層	磁器	青花端反組				透明釉、 青料	灰白色	輪轉成形	文様：花卉等々・圓溝文 産地：景德鎮系；燒考：清道光・ 次文化；時代：清
32	25	25	主部2	P40	磁器	青花端反組				透明釉、 青料	白色	輪轉成形	文様：花卉文・二面開闊 産地：景德鎮系；燒考：年代：唐BII
32	26	25	主部2	包合層	陶器	天目碗		(4.8)		黑釉	灰白色	輪轉成形	産地：南平折沿式；燒考：漆纏支
33	1	26	主部2	包合層	陶器	青釉利	(7.2)	(16.0)	(9.4)	青釉	青釉成形	産地：朝鮮；燒考：日目	
33	2	23	主部2	包合層	陶器	輪花鉢	(8.0)		(19.2)		灰赤色	捺作り成形	対馬在原作成形；産地：景德 鎮系；年代：唐
33	3	26	主部2	包合層	陶器	筒形鉢	(19.2)	18.9	(15.6)		灰赤色	捺作り成形	対馬在原作成形；燒考：二次焼成
33	4	26	主部2	包合層	陶器	丸形鉢	(31.2)	15.4	(19.0)		黄灰色	捺作り成形	産地：不明；燒考：二次焼成
33	5	23	主部2	包合層	陶器	盤鉢	(27.4)				灰赤色	捺作り成形	産地：懸前系；年代：懸IV-B-3
33	6	23	主部2	包合層	陶器	盤鉢	(30.0)				灰赤色	捺作り成形	産地：懸前系；燒考：9条1単位 年代：懸V-A
34	1	26	主部2	包合層	陶器	盤鉢	(28.6)				灰赤色	捺作り成形	産地：懸前系；燒考：10条1単 位年代：懸V-A
34	2	26	主部2	包合層	陶器	盤鉢	(27.4)	12.5	(13.6)		灰赤色	捺作り成形	産地：懸前系；燒考：10条1単 位年代：懸V-A
34	3	27	主部2	包合層	陶器	罐鉢					灰色	捺作り成形	産地：懸前系；年代：懸IV-B-3
34	4	26	主部2	包合層	陶器	盤鉢	(29.6)	10.8	(12.8)		灰褐色	捺作り成形	産地：懸前系；燒考：9条1単位 年代：懸V-A
34	5	27	主部2	包合層	陶器	盤鉢	(34.0)				浅黄色	捺作り成形	産地：懸前系；燒考：10条以上 1単位/年代：懸V-A
35	1	27	主部2	包合層	陶器	短颈瓶	(15.2)	(25.9)	(14.6)		灰赤色	捺作り成形	産地：懸前系；燒考：水井窯・ 萩・二次焼成；年代：懸V-A
35	2	27	主部2	P101	陶器	瓶	18.8	40.1	(18.0)		灰色	捺作り成形	産地：懸前系；燒考：二次焼成 年代：懸IV-B
36	1	27	主部2	包合層	陶器	短颈瓶	(24.0)		(17.6)		灰褐色	捺作り成形	産地：懸前系；燒考：水井窯・ 萩；年代：懸V-A
36	2	28	主部2	包合層	陶器	小形瓶	(7.6)				灰褐色	輪轉成形	産地：懸前系；年代：懸IV-B
36	3	28	主部2	包合層	陶器	小形瓶	(5.4)				暗褐色	輪轉成形	産地：懸前系；年代：懸IV-B
36	4	27	主部2	包合層	陶器	小形瓶			(7.0)		灰白色	輪轉成形	産地：懸前系；年代：懸IV-B
36	5	27	主部2	包合層	土師質土器	瓶	(13.0)	2.8	6.3	黄褐色	1mm粒 少量含む	良好	外：細目ナメテ・回転式切り 内：細目ナメテ
36	6	28	主部2	包合層	土師質土器	瓶	(13.5)		(6.5)	浅黄褐色	0.5mm砂粒 わずかに含む	良好	外：細目ナメテ・回転式切り 内：細目ナメテ
36	7	27	主部2	包合層	土師質土器	瓶			(7.4)	黄褐色	1mm以下砂粒 少量含む	良好	外：細目ナメテ 内：細目ナメテ
36	8	28	主部2	包合層	瓦質土器	筒形火鉢	(21.4)				黄褐色	捺作り成形	文様：小波文・S字文繋ぎ
36	9	28	主部2	包合層	瓦質土器	筒形火鉢	(11.6)				淡赤褐色	捺作り成形	文様：S字文繋ぎ；燒考：二次燒 成・青白釉
36	10	27	主部2	包合層	瓦質土器	浅丸形火鉢	11.8	5.5	9.7		淡褐色	捺作り成形	文様：波文；燒考：S字文繋ぎ
36	11	28	主部2	包合層	瓦質土器	角形火鉢					薄灰色	捺作り成形	文様：波文；燒考：二次燒成
37	5	28	主部2	包合層	土製品	土鍵	長5 (5.9)	幅2.2	2.1	黄褐色		良好	外：ナメテ 内：ナメテ
50	1	31	北郊	包合層I	磁器	白磁腰折組	(8.6)			透明釉	白色	輪轉成形	産地：景德鎮系
50	2	31	北郊	包合層I	磁器	青磁碗	(13.7)			青磁釉	灰白色	輪轉成形	文様：二重開闊・束腰；燒成：景德 鎮系；年代：直口E
50	3	31	北郊	包合層I	磁器	青磁碗			(9.6)	青磁釉	青灰色	輪轉成形	文様：開闊・束腰；燒成：龍泉系
50	4	33	北郊	包合層I	磁器	青磁折腰盤	(25.4)	4.2	(15.0)	青磁釉	灰白色	輪轉成形	文様：花文；産地：龍泉系；年代： V型鉢
50	5	31	北郊	包合層I	磁器	青花端反碗				透明釉、 青料	灰白色	輪轉成形	文様：團扇・束腰；燒成：景德 鎮系；年代：直口E
50	6	31	北郊	包合層I	磁器	青花碗 or 盆				透明釉、 青料	灰白色	輪轉成形	文様：花卉文；産地：景德鎮系 燒考：內輪轉
50	7	31	北郊	包合層I	陶器	灰青沙漿頭					灰釉	輪轉成形	産地：朝鮮；燒考：絆目
50	8	31	北郊	包合層I	陶器	青釉利	(7.6)			青釉	灰褐色	輪轉成形	産地：朝鮮
50	9	31	北郊	包合層I	陶器	青釉利			(26.0)	青釉	暗褐色	輪轉成形	産地：朝鮮

Fig	遺物番号	写真回数	調査区	出土地	種別/材質	器種	口径(cm)	底高(cm)	底径(cm)	色調/釉薬	胎土	焼成/成形	備考・文様・産地
50	10	31	北郊	包貯庫1	陶器	瓦胎壺				灰釉	に赤い黄褐色	輪縁成形	産地：中国
50	11	31	北郊	包貯庫1	陶器	瓦胎壺	(8.8)			灰釉	褐色	輪縁成形	産地：中国
50	12	31	北郊	包貯庫1	陶器	灰胎壺	(12.0)	2.7	(6.0)	灰釉	灰褐色	輪縁成形	産地：中国
50	13	31	北郊	包貯庫1	陶器	盤				灰赤色	紹作り成形	産地：蜀南系/年代：備IV A	
50	14	31	北郊	包貯庫1	陶器	盤	(16.8)			灰赤色	紹作り成形	産地：蜀南系/参考：9条1単位/年代：備IV A	
50	15	31	北郊	包貯庫1	陶器	盤	(11.6)	9.0	(9.6)	墨灰色	紹作り成形	産地：蜀南系/参考：10条1単位/年代：備IV A	
50	16	31	北郊	包貯庫1	陶器	甕				に赤い褐色	紹作り成形	産地：蜀南系/年代：備IV B	
50	17	31	北郊	包貯庫1	陶器	甕			(32.0)	に赤い褐色	紹作り成形	産地：蜀南系/年代：備IV B	
51	1	33	北郊	包貯庫1	土師質土器	皿	(6.4)			褐色	1mm以下切粒 少量含む	良好	外：回転子 内：ナメル
51	2	33	北郊	包貯庫1	土師質土器	皿		(6.7)		黄褐色	0.5mm砂粒 わずかに含む	良好	外：回転子 内：ナメル
51	3	33	北郊	包貯庫1	瓦質土器	角形火鉢				灰褐色	板作り成形	文様：斜花文	
51	4	33	北郊	包貯庫1	瓦質土器	火鉢(足)				暗灰色	板作り成形		
51	5	33	北郊	包貯庫1	土師器	多つ足	7.0	4.0		黄褐色	0.5mm~1.5mm 砂粒少含む	良好	外：ナメル 内：ナメル・焼付着
51	6	33	北郊	包貯庫1	土師器	多つ足	7.4	3.4		黄褐色	1mm以下砂粒 少含む	良好	外：ナメル 内：ナメル・焼付着
54	1	34	主部	SE01	須恵器	甕				青灰色	釉	良好	外：平行タスキ・カキメ 内：背面有り
54	2	34	主部	SE01	須恵器	青磁碗	(13.8)			青磁釉	灰褐色	輪縁成形	文様：斜花文/産地：龍泉系 年代：遼/五代
58	1	34	北郊	S01-床面	須恵器	环(身)	(12.3)			灰色	密	良好	外：回転子・回転ヘラケズリ 内：回転子
58	2	34	北郊	S01-床面	須恵器	高环	(12.0)			深灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
58	3	34	北郊	S01-床面	須恵器	甕				尾白色	密	不良	外：平行タスキ・カキメ 内：背面有り
58	4	34	北郊	S01-床面	土師器	甕	(18.0)			褐色	密	良好	マツのため調整不明
58	5	34	北郊	S01-床面	土師器	甕	(14.0)			褐色	密	良好	マツのため調整不明
58	6	34	北郊	S01-床面	土師器	詰				褐色	密	良好	外：マツのため調整不明 内：ケズリ
58	7	34	北郊	S01-埋土	須恵器	环(身)	(13.3)			青灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
58	8	34	北郊	S01-埋土	須恵器	环	(11.3)			灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
58	9	34	北郊	S01-埋土	須恵器	环	(13.0)			青灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
58	10	34	北郊	S01-埋土	須恵器	環(口縁)	(6.0)			灰色	密	良好	外：マツ・赤彩 内：口縁コロ
58	11	34	北郊	S01-埋土	土師器	高环				黄褐色	密	良好	外：回転子 内：回転子
61	1	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(蓋)	(14.0)			灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
61	2	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(蓋)	(13.0)			灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
61	3	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(蓋)	(15.0)			灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
61	4	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(身)	(11.5)	3.5	(9.1)	灰色	密	良好	外：回転子・静止系切り 内：回転子
61	5	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(身)	(12.0)	4.7	(4.3)	灰色	密	良好	外：回転子・回転系切り 内：回転子
61	6	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(身)	(13.8)			灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
61	7	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(身)	(11.6)			灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
61	8	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(身)	(10.2)			灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
61	9	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(身)			(8.4)	灰色	密	良好	外：回転子・回転ヘラケズリ 内：回転子
61	10	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(身)	(11.2)	(4.6)	(6.3)	灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
61	11	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(身)	(12.3)			青灰色	密	良好	外：回転子 内：回転子
61	12	35	北郊	包貯庫2	須恵器	环(身)		(6.0)		灰色	密	良好	外：回転子・回転系切り 内：回転子
61	13	36	北郊	包貯庫2	須恵器	环(身)			(6.0)	灰色	密	良好	外：回転子・回転系切り 内：回転子

Fig	番号	写真 回数	調査区	出土 地点	種別 / 材質	指標	口径 (cm)	洞高 (cm)	底径 (cm)	色調 / 著葉	胎土	焼成 / 成形	備考・文獻・産地
61	14	36	北郊	包合層2	須恵器	高円筒形(身)	(12.2)		(6.7)	灰褐色	密	良好	外：回転ナチュラル回転ヘラケズリ 内：回転ナチュラル
61	15	36	北郊	包合層2	須恵器	高円筒形(身)	(9.5)			灰褐色	密	良好	外：回転ナチュラル回転ヘラケズリ 内：回転ナチュラル
61	16	36	北郊	包合層2	須恵器	高環	(10.6)			灰褐色	密	良好	外：回転ナチュラル側突文 内：回転ナチュラル
61	17	36	北郊	包合層2	須恵器	長脚無高环	(11.4)			灰褐色	密	良好	外：回転ナチュラルしづら痕 内：回転ナチュラル
61	18	36	北郊	包合層2	須恵器	壺				白灰色	密	良好	外：回転ナチュラル側突文・横隠文 内：回転ナチュラル
61	19	36	北郊	包合層2	須恵器	壺	(28.8)			灰褐色	密	良好	外：回転ナチュラル沈隠文 内：回転ナチュラル
61	20	36	北郊	包合層2	須恵器	壺(口縁)				灰褐色	密	良好	外：回転ナチュラル
61	21	34	北郊	包合層2	須恵器	壺	8000年 (24.8)			灰褐色	密	良好	外：直筒文・斜直文・タカキ 内：回転ナチュラルケズリ・タカキ
62	1	36	北郊	包合層2	土師器	低脚壺				黄褐色	1mm以下砂粒 少量含む	良好	外：ヨコナチュラル
62	2	36	北郊	包合層2	土師器	高環				黄褐色	0.5mm砂粒 むずかに含む	良好	外：ヨコナチュラル赤彩 内：ヨコナチュラル
62	3	36	北郊	包合層2	土師器	高環		9.4		黄褐色	0.5mm砂粒 むずかに含む	良好	外：ヨコナチュラル赤彩 内：ヨコナチュラル
62	4	36	北郊	包合層2	土師器	高環		(10.0)		黄褐色	1mm以下砂粒 少量含む	良好	外：ヨコナチュラル赤彩 内：ヨコナチュラル
62	5	36	北郊	包合層2	土師器	壺	(19.0)			棕色	1~3mm砂粒 多量に含む	良好	マメツのため調整不明

第2表 静間城跡 出土錢貨計測表

Fig	番号	写真 回数	調査区	出土 地点	名称	直径A (cm)	直径B (cm)	内径A (cm)	内径B (cm)	質量 (g)	盤口 (g)	備考
36	12	28	主郭2	包合層	「元豊通貫」か					0.13	1.1	細片のみ計測不能
36	13	28	主郭2	包合層	「祐定通貫」	2.41	2.4	0.66	0.65	0.14	3.6	背字「五」

第3表 静間城跡 出土石製品観察表

Fig	番号	写真 回数	調査区	出土 地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
16	8	21	主郭1	SB03	茶白(上白)	口径:(20.6)	高さ:11.5	底径:(19.6)		二次焼成を受け、特に変色(一部黒い) 8分割8溝 材質:安山岩(37.1とセッタ)
29	8	22	主郭1	包合層	勾玉	3.7		孔径:0.15	9.4	材質:本瑪瑙
37	1	28	主郭2	包合層	石白(下白)			底径:(20.0)		二次焼成を受け、底部に押孔したような跡 材質:安山岩(16.8とセッタ)
37	2	28	主郭2	包合層	石白(下白)	口径:(39.0)				碧眼洞あり 材質:碧玉
37	3	28	主郭2	包合層	砾石	11.3	3.4	0.5	42.0	2面使用 側面に付着物あり(漆か?)
37	4	28	主郭2	包合層	砾石	9.8	4.0	0.5	27.0	2面使用 刃先端 付着物あり(漆か?)
41	1	28	主郭1	包合層	砾石	2.4	2.5	0.7	6.41	灰白色
41	2	28	主郭2	P97	砾石	1.7	2.1	1.1	2.12	灰白色
41	3	28	主郭1	P142	砾石	1.7	2.1	1.1	5.20	暗灰色
41	4	28	主郭1	P142	砾石	1.7	2.0	0.9	3.75	黑色
41	5	28	主郭1	包合層	砾石	1.7	2.0	1.0	4.05	暗灰色
41	6	28	主郭1	包合層	砾石	2.0	2.0	0.9	3.83	灰黄色
41	7	28	主郭2	包合層	砾石	1.7	1.8	0.7	2.75	黑色
41	8	28	主郭1	包合層	砾石	2.0	2.0	0.8	3.31	灰白色
41	9	28	主郭2	包合層	砾石	2.0	2.5	0.7	5.71	に深い黄褐色
41	10	28	主郭1	包合層	砾石	1.6	2.0	0.7	2.96	灰褐色
41	11	28	主郭2	包合層	砾石	1.8	2.0	0.6	2.89	灰色
41	12	28	主郭1	包合層	砾石	1.8	2.1	0.7	3.93	灰色

Fig	番号	写真 図版	調査 区	出土 地點	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考
41	13	28	上鉢1	包合層	碁石	1.6	1.9	0.65	2.26	暗灰色
41	14	28	上鉢2	包合層	碁石	1.7	1.8	0.7	3.32	灰色
51	7	33	北郭	包合層	墨白(下口)	口径:(35.6)		底径:(18.0)		二次焼成を受ける 材質:濾灰岩
62	6	36	北郭	包合層	磨石	17.1	16.9	6.1	2,306	

第4表 静岡城跡 出土金属製品観察表

Fig	番号	写真 図版	調査 区	出土 地點	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
38	1	29	上鉢2	包合層	大型鉄釘	21.4	1.2	1.0	完形
38	2	29	上鉢2	包合層	大型鉄釘	(18.0)	1.7		完形
38	3	29	上鉢2	包合層	大型鉄釘	(10.3)	0.9	1.0	先端部欠損
38	4	29	上鉢2	包合層	大型鉄釘	(8.0)	1.9	1.0	先端部欠損
38	5	29	上鉢2	包合層	鉄釘	(10.2)	0.6	0.8	先端部欠損
38	6	29	上鉢2	包合層	鉄釘	(4.8)	0.6	0.8	先端部欠損
38	7	29	上鉢2	包合層	鉄釘	(3.7)	0.6	0.4	先端部欠損 曲線的に曲がる
38	8	29	上鉢2	包合層	鉄釘	(2.5)	0.35	0.35	先端部欠損
38	9	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(4.3)	0.4	0.35	先端部欠損
38	10	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(2.5)	0.3	0.25	先端部欠損
38	11	29	上鉒2	包合層	鉄釘	3.0	0.3	0.3	先端部欠損 少し曲がる
38	12	29	上鉒2	包合層	鉄釘	3.1	0.4	0.5	ほぼ完形か
38	13	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(4.2)	0.5	0.4	先端部欠損
38	14	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(4.8)	0.4	0.4	先端部欠損
38	15	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(2.5)	0.4	0.3	先端部欠損
38	16	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(3.5)	0.6	0.5	先端部欠損
38	17	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(3.8)	0.4	0.3	先端部欠損
38	18	29	上鉒2	包合層	大型鉄か	8.0	1.9	1.0	完形か
38	19	29	上鉒2	包合層	鉄釘	3.7	0.6	0.6	頭部わずかに欠損
38	20	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(6.5)	0.8	0.9	ほぼ完形
38	21	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(9.6)	1.0	0.9	先端部欠損
38	22	29	上鉒2	包合層	大型鉄釘	(5.2)	1.1	1.2	先端部欠損
38	23	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(7.6)	1.5	0.9	先端部欠損
38	24	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(7.3)	1.4	0.5	先端部欠損
38	25	29	上鉒2	包合層	鉄釘	8.0	0.6	0.6	完形
38	26	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(3.3)	0.6	0.5	先端部欠損
38	27	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(4.8)	0.4	0.6	先端部欠損
39	1	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(6.5)	0.9	1.0	先端部欠損
39	2	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(7.1)	0.7	0.8	先端部欠損
39	3	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(5.5)	0.8	0.5	先端部欠損
39	4	29	上鉒2	包合層	鉄釘	3.2	0.4	0.35	先端部欠損
39	5	29	上鉒2	包合層	鉄釘	(3.2)	0.40	0.35	頭部及び先端部欠損

Fg	番号	等高 間隔	調査 区	出土 地点	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	備考
39	6	29	主部2	包含層	鉄釘	(1.8)	0.5	0.4	先端部欠損
39	7	29	主部2	包含層	鉄釘	(4.3)	0.35	0.4	先端部欠損
39	8	29	主部2	包含層	鉄釘	2.4	0.3	0.3	ほぼ完形か
39	9	29	主部2	包含層	鉄釘	(4.6)	0.5	0.5	先端部欠損
39	10	29	主部2	包含層	鉄釘	(3.4)	0.5	0.5	先端部欠損 直線的に曲がる
39	11	29	主部2	包含層	鉄釘		0.4	0.5	頭部欠損 曲線上に曲がる
39	12	29	主部2	包含層	鉄釘	(2.5)	0.4	0.4	頭部欠損
39	13	29	主部2	P108	鉄釘	(2.8)	0.3	0.6	頭部欠損
39	14	29	主部2	包含層	鉄釘	(9.3)	0.6	0.6	中央部一部欠損、頭部及び先端部欠損
39	15	29	主部2	包含層	鉄釘	(6.3)	1.3	1.0	両端部欠損
39	16	29	主部2	包含層	鉄釘	9.2	1.2	0.6	
39	17	29	主部2	包含層	鉄釘	(4.0)	0.6	0.9	頭部及び先端部欠損
39	18	29	主部2	包含層	鉄釘	(5.2)	0.6	0.8	先端部欠損
39	19	29	主部2	包含層	鉄釘	(4.3)	0.6	0.5	頭部及び先端部欠損
39	20	29	主部2	包含層	鉄釘	(4.8)	0.7	0.8	頭部及び先端部欠損
39	21	29	主部2	包含層	鉄釘	(6.2)	0.9	0.9	頭部及び先端部欠損
39	22	29	主部2	包含層	鉄釘	(6.1)	0.4	0.7	中央部一部欠損、頭部及び先端部欠損
39	23	29	主部2	包含層	鉄釘		0.4	0.35	先端部折れ曲がる
39	24	29	主部2	包含層	鉄釘		0.6	0.7	頭部及び先端部欠損 直角に折れ曲がる
39	25	29	主部2	包含層	鉄釘	(7.9)	0.7	0.8	頭部垂直に折り曲がる 先端部欠損
39	26	29	主部2	包含層	鉄釘	10.3	0.8	0.6	中央部で折れるがほぼ完形
39	27	29	主部2	包含層	板状鉄製品	(6.4)	1.2	0.5	上端部(4mm)の穿孔 先端部欠損
40	1	30	主部2	包含層	板状鉄製品	(4.5)	6.1	0.3	一部欠損
40	2	30	主部2	包含層	環状鉄製品	(10.5)	(5.8)		中央部0.7×1.1mmの方形孔か 跡割れにより形状不明
40	3	30	主部2	包含層	環状鉄製品	径:3.3			完形
40	4	30	主部2	包含層	不規則製品				2個体が縁により付着した可能性あり
40	5	30	主部2	土壤下	環状鉄製品	径:(1.3)		0.4	約1/2欠損
40	6	30	主部2	包含層	環状鉄製品	(6.0)			
40	7	30	主部2	包含層	棒状鉄製品	(7.3)	1.6	1.2	
40	8	30	主部2	包含層	鉄製金具	5.3	6.3		
40	9	30	主部2	包含層	鉄製飾り金具	7.3	6.5		
40	10	30	主部2	P108	鉄製鍍金か	径:14.0			内面に反しあり
40	11	30	主部2	土壤下	不規則製品	6.0			
40	12	30	主部2	包含層	不規則製品	(5.2)		0.8	
40	13	30	主部2	包含層	不規則製品	(4.3)		1.5	
40	14	30	主部2	包含層	不規則製品	(4.6)			
40	15	30	主部2	包含層	鉄製鍍金か	径:14.0		0.7	中央部に底手彫りか
40	16	30	主部2	包含層	不規則製品	(6.4)			
40	17	30	主部2	SB03 PS1	板状鉄製品	(6.4)	3.1	0.3	
40	18	30	主部1	包含層	板状鉄製品	5.9	1.6	0.5	

Fig	番号	写真 図版	調査 区	出土 地点	器種	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	備考
40	19	30	玉器2	包合層	板状鉄製品	(7.9)	1.7	0.5	
40	20	30	玉器1	包合層	棒状鉄製品	5.3	1.7	1.2	
40	21	30	玉器2	包合層	板状鉄製品			0.3	
40	22	30	玉器2	包合層	板状鉄製品	(2.7)	1.4	(0.5)	
40	23	30	玉器2	包合層	板状鉄製品	4.0	1.2	0.4	
40	24	30	玉器2	包合層	板状鉄製品	(3.1)	1.7	0.15	
52	1	33	北部	包合層	大型鉄釣	(8.6)	1.1	0.6	先端部欠損
52	2	33	北部	SK02	環状鉄製品	径: 2.8 ~ 3.0		0.9	
52	3	33	北部	包合層	棒状鉄製品		1.1	1.0 ~ 1.4	両端部欠損 頭部の丸い軒状製品が打ち込まれている 直角に曲がる
52	4	33	北部	包合層	鉄製把手か	(10.6)	4.3		
52	5	33	北部	包合層	不明鉄製品	(9.1)	(7.4)	0.6	
52	6	33	北部	包合層	板状鉄製品	(10.2)	(9.5)	0.8	
52	7	33	北部	包合層	板状鉄製品	(6.5)	(5.1)	0.4	
52	8	33	北部	包合層	板状鉄製品	(4.7)	(5.5)	0.8	
52	9	33	北部	包合層	板状鉄製品	(5.1)	(5.5)	0.6	
52	10	33	北部	包合層	板状鉄製品			0.6	
52	11	33	北部	包合層	板状鉄製品	(3.0)	(4.6)	0.6	

第5表 静岡城跡 出土鍛冶津観察表

Fig	番号	写真 図版	調査 区	出土 地点	種別	長さ [cm]	幅 [cm]	厚さ [cm]	重量 [g]	磁着度	メタル度	備考
47	1	28	北部1	1号炉	鍛冶津	8.1	6.6	5.2	206	5	H	
47	2	28	北部1	1号炉	鍛冶津	9.7	7.1	2.5	189	7	H	
47	3	28	北部1	1号炉	板型鍛冶津	11.2	7.2	8.1	696	11	M	
47	4	28	北部1	1号炉	羽口	6.2	4.6	6.9	118	4	鉄化	

第4章 総括

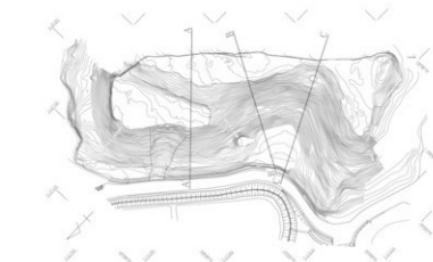
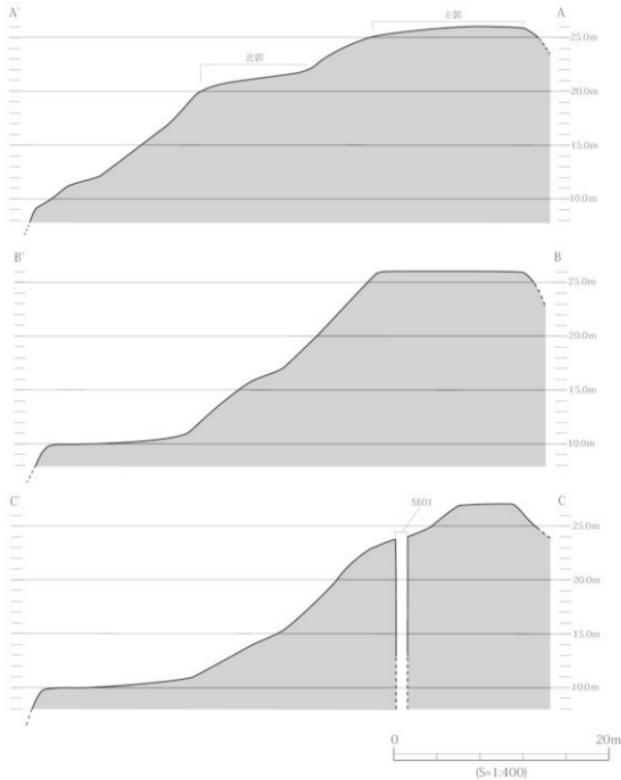
今回の調査では静間城跡の南側斜面以外のほぼ全域の調査が行われた。これまで城の斜面(切岸)を含む城の全域を発掘した事例としては県内初と言え、山城の全体構造を解明する上でも貴重な調査となった。山城の残りも非常に良く、大規模な建物跡や土塁等が検出されたが、堀切や堅堀などの山城に通常見られる防御施設は確認されていない。防御施設は城の重要な構成要素であるにもかかわらず、それらがほとんど存在しない静間城跡は軍事的な性格が薄い山城と言えそうである。それがどのような理由によるものか明らかにすることはできないが、ここでは、調査で確認された遺構や遺物を中心にして静間城跡の構成と性格、存続期間等について検討してみたい。

第1節 静間城跡の特徴と性格

1. 静間城跡の構成と景観

今回確認された遺構は主郭で掘立柱建物跡4棟、礎石建物跡2棟、土坑5基、土塁2基、井戸跡1基、北郭で掘立柱建物跡1棟と礎石建物跡1棟、鍛冶跡2基を検出している。遺物も国産陶器の他に貿易陶磁も多数出土しており、山城としては比較的多くの遺構、遺物が確認されたことになる。建物の規模や鍛冶炉、井戸跡等の存在は、恒常的にこの場所が居住域であったことを示しているものと推測され、近年の発掘調査でも関津城跡や石山城跡など山頂部の郭から建物跡等が検出されるなど、明らかに山城で居住していたことを示す事例が増加している。静間城跡は丘陵上に築かれた居館的な居住空間を兼ね備えた山城と評価されようか。

静間城跡は他の山城に見られるような多郭のタイプではなく、主郭と北郭の2箇所の郭で構成されていた。両者の様相には明らかに相違が認められ、たとえば主郭の掘立柱建物跡は片面または両面に庇を伴う構造を呈するが、北郭の建物跡には認められない。礎石建物跡も主郭では礎石のみであるのに対して、北郭では根石を伴っている。さらに主郭にはない鍛冶跡が確認されていることにも差異が生じている。それぞれを詳細に見ていくと、主郭1は南北方向に延びる平坦面に2棟の建物を配置し、北端付近に櫓の可能性のあるSB01を置き、その南隣には東西両面に庇を伴う建物であるSB04が配置されている。SB04は庇部分を含めると山城の中では最大規模となることから主殿等の用途が考慮され、主郭1は日常的な空間としての機能が推定される。主郭2は主郭1から東側に細長く延びる平坦面で4棟の建物跡が確認された。SB02・03ともに片面に庇を伴う総柱建物という特異な要素をもつ掘立柱建物であり、これに接するように礎石建物跡2棟が配置されている。掘立柱建物と礎石建物はそれぞれ同様の規模及び構造を有する建物であることから、4棟が同時に併存していたとは考え難い。SB03と礎石建物跡1が同時に火災に遭っていることや配置状況等から推察すれば、SB02と礎石建物跡2、SB03と礎石建物跡1が時期を異にして併存していた可能性が高い。周辺からは天目茶碗、香炉、茶臼などが比較的多く出土していることからみれば、会所的な施設であった可能性も考えられ、礎石建物跡は贅沢に用いられる財を収納した道具蔵のような用途も想像される。よって、主郭2は儀礼的空間としての機能が想定されようか。主郭1と主郭2の間には堀切や区画溝などは認められないものの、機能が異なると考えられる建物がそれぞれ配置されていることは、「ハレ」と「ケ」の場という空間が使い分けられていたのでは



第63図 静岡城跡エレベーション図

ないだろうか。

北郭については柱穴も多く確認されており、多数の建物が建っていた様子も推測される。しかしながら建物として復元できたものは2棟と少なく、主郭と比較してもやや規模が小さい。大きく異なるのは鍛冶場の存在である。これは北郭で金属加工が行われていたことを示す証拠となり得るものであるが、城主が直々に金属加工に関わる可能性は極めて低いと考えられ、家臣など城主以外の居住者の存在を示唆していると言える。なお、出土遺物に武器等の戦闘に関わる製品はほとんどなく、建築部材用の釘等が主であることから、城の維持管理に必要な部材を生産していた可能性が指摘できる。従って、北郭は居住空間を保ちながら鍛冶関係の作業場等として利用されていたと理解しておきたい。

以上のように主郭と北郭では明瞭に機能差もしくは階層差があったものと考えられ、主郭は城主層の居住区域で北郭は城主以外の居住もしくは作業区域が想定されよう。このような建物構成は居館的様相を示し、基本的な構成は平野部の居館と大きく変わるものではない。それは出土遺物にも現れており、茶道具や青磁、白磁等の貿易陶磁が出土する点も同様である。このように概観すると、主郭の西側には櫓と主殿、東側には会所と倉庫、北郭では作業小屋や倉庫などが建っていたという景観が復元される。

2. 防御施設から見た静間城跡

城の重要な構成要素である防御施設については、土塁と切岸のみが確認されており、堀切や堅堀など通常の山城にみられる防御施設を備えていない点が静間城の特徴と言える。なお、縄張り図作成時においては虎口の存在も想定していたが、調査の結果、その痕跡等を確認することはできなかった。

切岸は城の斜面部のほぼ全面に施され、斜度はおむね45°前後である。主郭と山城裾部との高低差は約20mであるが、麓からそびえ立つように見える切岸の状況は、視覚的にも防御機能としての効果を具体的に示しているものと言える。

土塁は郭を廻るものではなく2箇所の高まりのような状態で検出されている。土塁1はSB04に、土塁2はSB02・03に接するように配置されており、建物を防御することを最大の目的として築造されたものと捉えることができる。現状での高さは両者とも約1m程度であるが、堆積土の状況から地山削り出し後に盛土成形で造り出されたと考えられ、築造時の規模は2m以上の高さを備えていたものと思われる。土塁1・2の背後は急峻な切岸であり、特に土塁2では切岸裾部が静間川に面することから、これらと併せて高低差が増すことで防御性を高めた状況を造り出すことになり、郭を廻らなくても十分防御性能を発揮できたのではないだろうか。

ただし、土塁1の内側には非常に際する備えとしての飛礫石が置かれており、土塁と切岸のみでの防御が本当に可能であったのか注意されるところである。全体的な構成からみれば恒常に軍事的な緊張状態に陥ることの少ない状況にあったと推測され、居住と政治の支配拠点としての居館に重点を置いた城と見ることができる。

3. 建物跡の様相と城の存続期間

前述したとおり、静間城跡では掘立柱建物跡5棟と礎石建物跡3棟の計8棟の建物跡が確認されている。これらのほとんどは柱列が直線的で柱間の寸法もほぼ統一されている。当該期の建物跡には城跡や集落跡を問わず、柱間が直線的でないことが多く見受けられる。

けられる中で、当城の建物は規格性の高い建物であることが窺える。また、掘立柱建物跡の多くには庇を作うものが存在することも特徴の一つと言えよう。

掘立柱建物跡の構造及び面積等について改めて見ると、S B 0 1 は 2 間 × 2 間の側柱建物で面積 16m²、S B 0 2 は 2 間 × 5 間の総柱建物で北側に庇を作り、身舎の面積は 42m²、庇を含むと 51 m²となる。S B 0 3 も S B 0 2 と同様の構造を呈するが、身舎の面積 41.04m²、庇を含むと 52.92 m²となり、S B 0 2 より若干大きい。S B 0 4 は 2 間 × 5 間の掘立柱建物で東西両面に庇を作り、身舎の面積 40m²、庇を含むと 62m²と城内では最大の規模を誇る。S B 0 5 は 2 間 × 3 間の側柱建物で面積は 20m²である。先に述べたようにそれぞれ機能の異なる建物と考えられ、再度、記述すれば以下のとおりである。S B 0 1 は城内で最小規模の建物であり、複数の人間が居住するのに適しているとは考え難い。正方形の建物空間を有すること、根石を作うことや配置場所などから櫓の可能性を考えた。S B 0 2・0 3 のような規模の大きい総柱建物は日常的な居住施設として評価されるが、出土遺物から考慮すれば儀礼的な場もしくは会所的な建物が想定される。S B 0 4 は両面に庇を作うことと間仕切りの柱穴により 2~3 の部屋に分割されることなどから、他より格式が高い建物と考えられ、主殿などの当城の中核的施設の可能性が高い。S B 0 5 は通常見られる側柱建物であり北郭で検出されたことから判断すると居住用もしくは作業小屋等の用途が推測される。

礎石建物跡では礎石の残存状況が悪く明確な規模を把握するのは困難であるが、礎石建物跡 1 は 3 間 × 3 間と推定され、面積は 9m²と小規模である。礎石建物跡 2 も全形が判明しないが礎石建物跡 1 と類似した形態の可能性が高いであろう。礎石建物跡 3 は現状では 2 間 × 1 間で面積 17.2m²となる。礎石建物が採用される背景には瓦葺きや建物の高層化などに伴って増加した建物の重量を支えるためという機能が考えられるが、瓦の出土は皆無であることから、瓦葺き建物の存在は考えられないだろう。櫓などの高層建築物の可能性も否定できないものの、礎石建物跡 1・2 は出土遺物の内容からみて倉庫の可能性が高いと判断した。礎石建物跡 3 は北郭で確認されたことを鑑みれば作業等に関する倉庫と考えた方が妥当ではなかろうか。

次に建物の存続期間について見ることにする。主郭 1 で検出された S B 0 1 と 0 4 については、周辺に他の柱穴の存在が少なく、重複するものも認められないことから判断すれば、建て替えが行われた可能性は低いと考えられる。出土遺物は 15 世紀中葉～16 世紀前葉に位置づけられることから、15 世紀中葉頃の建築時期が想定される。ただし、陶磁器類は伝世されることも多く、古い時代のものが使用されることはある。詳細は次節で述べるが消耗材である備前焼鉢の年代観は 15 世紀後葉から 16 世紀前葉と考えられ、そうした観点からすれば、建築時期は 15 世紀後葉の可能性が高いのではないだろうか。主郭 2 では S B 0 3 と礎石建物跡 1 が火災に遭っている。火災跡から出土した二次焼成を受けた遺物から判断すると、16 世紀前葉頃に火災によって焼失したことは間違いない。また、それより新しい時期の遺物が認められないことから、火災後に建物等を建て替えたとは考えられない。だとすると S B 0 2 は S B 0 3 より先行する建物と言え、建築時期については S B 0 4 と同時期頃と理解されようか。また、S B 0 3 周辺には他の柱穴も多数存在していることから推察すれば、S B 0 2 が存在していた時期に他の用途の建物が建てられていた可能性もあるものと判断しない。

このように建物跡及び出土遺物の様相から静間城の存続期間は 15 世紀後葉～16 世紀前葉頃と想定され、比較的短期間の山城であったと言える。居住を主にして築かれたと考えられるにもかか

わらず、存続期間が短いのはどのような理由によるのであろうか。契機となった要因の一つに S B 0 3 等の火災が考えられる。火災跡から出土した遺物量の多さは、廃絶時に伴う火災・破壊行為などではなく、明らかに生活している状態で火災に遭った状況を示している。これは不注意の火事もしくは戦などの不時の原因による火災が想定されるだろう。火災後に再建されなかった理由が問題となるが、この時点で廃城となった、もしくは防御性能を高めた城を別の場所に築いたことなどが推測されようか。推測の域を出ない部分が多いものの、いずれにしても 16 世紀前葉頃には居館的な居住空間も兼ね備えた静間城は終焉を迎えたのであろう。

4. 文献史料からみた静間

この静間城の築城や廃城についての文献史料や伝承等は存在しない。そのため城主を特定することも困難と言える。石見地方には出雲の尼子氏のような有力な戦国大名は存在せず、中小の領主層が乱立していたと見られており、静間城もそのうちの中小領主が築いたものと言える。静間地域における当時の社会的構造を記す文献史料も僅かであり詳細不明な部分が多い中で、『島根県の地名』(平凡社 1995) の静間郷において、当地の歴史的事象を少し知ることができる。静間郷は邇摩郡に属しており、室町期を通じて邇摩一郡支配を続ける大内氏の支配下にあった。ただ当時の大内氏と邇摩郡の関わりは緩やかであり、現地に代官を駐在させて事務処理に当たらせていたものと思われる。文明 13 (1481) 年に大内氏は吉川兼祐 (石見吉川氏) に対して、上静間右馬充が治める静間郷の 36 貢文の領地を宛行っている。しかし、上静間氏はこの移譲を認めず実行支配を続けて、石見吉川氏との間で 60 年にも及ぶ争論となっている。この静間郷は石見吉川氏にとって本拠地の一つとしてあげられる重要な所領でもあったが、天文 10 (1541) 年には吉川経典は静間郷の領有を諦め、大内氏に対して代替地を求めている。このことから、上静間氏がこの時期まで静間郷に割拠していた様子を窺い知ることができる。

以上のように文献史料には上静間氏の名が認められ、静間郷において有力な領主であることがわかった。このように見ると上静間氏は静間城の築城主として有力な候補と評価することも可能であるが、現状ではそれを確証する根拠に乏しいと言える。また、静間郷は上静間と下静間に分かれていたと推測されていることから、下静間氏の存在も予想される。そうであれば静間郷には少なくとも有力な領主が二人存在していたことになる。

築城主の特定には静間郷及び静間氏に関連する史料の増加に期待しなければならないが、山上に居館を構えた時代背景として、当時の静間郷をめぐる上静間氏と石見吉川氏との緊張関係を反映している可能性も指摘できるのではないだろうか。

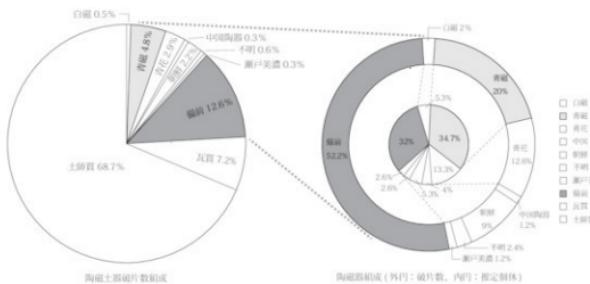
第2節 出土遺物の様相

個別の遺物については本文に記しているので、ここでは出土遺物にみられる様相を、集計表と組成をもとにして窺うこととする。後述するように貿易陶磁と備前系陶器に時代相や地域性が現れていることが確かめられた。次に出土遺物にみる静間城の様相として、遺跡の年代観について検討を行った。本来は消費幅が小さい土師質土器をもって年代観の比定を行うのが最善と思われるが、当遺跡周辺の土師質土器の編年が未確立により、陶磁器の編年を用いることとした。そのうち貿易陶磁よりも消費幅が小さいと思われる備前焼編年を基準に置いている。出土遺物にみる年代幅は比較的小小さく、おおむね一時期のものとして捉えられた。最後に当遺跡から出土した備前系の輪花鉢と

	貢易陶磁器																	
	白磁			青磁						青花			中国陶器		朝鮮			
	中国系		高麗系	高麗系		高麗系												
	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	高麗系												
	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	高麗系												
	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	高麗系												
破片数	1	3	1	1	2	14	7	20	4	1	1	1	15	3	12	1	1	2
推定個体数	1	3	1	1	2	5	5	9	1	1	1	1	3	2	4	1	1	2

	貢易陶磁器						国産陶器						土器					
	白磁			青磁			備前系			備前系			瓦質			土師質		
	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系
	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系
	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系
	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	不明	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系	高麗系
破片数	22	4	1	1	3	14	1	34	17	16	3	47	1	62	7	4	1	2
推定個体数	3	1	1	1	2	3	1	12	1	2	3	2	2	1	1	1	1	71

第6表 静岡城跡出土陶磁器集計表(個)



第7表 静岡城跡出土陶磁器組成円グラフ(%)

筒形鉢についての小考を行った。

1.組成からみる土器・陶磁器の様相

当遺跡から出土した土器・陶磁器の破片数と推定個体数を集計したのが第6表である(註1)。この集計表をもとに3つのグラフを作成したのが第7表であり、左側の円グラフは集計した破片数を材質・産地別に分けている。陶磁器のみを抽出したのが右側の円グラフで、外縁は破片数、内円は推定個体数の組成比をそれぞれ示したものである。

破片数を材質的にみると、磁器(白磁・青磁・青花・不明)が8.8%、陶器(中国・朝鮮・瀬戸美濃・備前)が15.3%、土器(瓦質・土師質)が75.9%であり、磁器・陶器・土器のそれぞれの特性(剛性・耐熱・価格など)を生かして機能を分化している。産地別では在地系(土師質)が68.7%、備前系が12.6%、中国(白磁・青磁・青花・中国陶器)が8.5%、朝鮮が2.2%、瀬戸美濃系が0.2%、不明(不明・瓦質)が7.8%となる。機能別にみると供膳具(碗・皿など)が77%、貯蔵具(壺・甕など)が12%、暖房具(火鉢)が7%、加工具(搗鉢・鉗鉢)が3%である。土師皿に油煙痕を伴うものは確認されなかったことから、大部分は酒宴に使われる“かわらけ”と思われる所以供膳具として扱っている。

第7表の右側円(内・外)グラフで示される陶磁器における破片数と推定個体数を比較してみると、備前系や朝鮮陶器は推定個体数では比率が減少し、逆に青磁の比率は増加する傾向が窺える。

器種別にみると瓦質土器の火鉢(18.3倍)、備前焼の甕(11倍)、朝鮮陶器の舟徳利(7.3倍)は推定個体数に対して破片数の比率が高く、青磁や白磁の碗・皿はあまり変化しない傾向が認められる。大形のものないし薄手のものは小形で厚みのあるものよりも破片数の比率が高くなる傾向が想定されていたが、今回の集計では10倍を超える事例のあることが確かめられた。推定個体数では、多い順から青磁碗が13個体、備前系擂鉢が12個体、青磁皿が8個体を数える。青磁の碗や皿は同一器種を一定数を揃えることから供膳具であったと考えられるが、加工具の擂鉢が数多く出土していることが注目される。粉碎を目的とする加工具は擂鉢以外にも石臼3個体(16-8、37-1、37-2、51-7)や卸皿2個体(50-12、16-5)も出土しており、いずれも使用面は摩耗している。城内で盛んに粉碎加工を行っていた様子が窺える(註2)。

土師皿以外の供膳具は貿易陶磁によって占められており、なかでも約八寸大(25.4cm)の青磁盤(29-4/50-4)は小野氏が威信財として位置付ける貿易陶磁に含まれる(小野2003)(註3)。そのほか青磁の瓶 or 香炉(32-19)、壺(32-20)、青花壺 or 瓶(50-6)、天目碗(32-26)、茶臼(16-6、37-1他)、香炉(36-9、36-10)、瓦質火鉢(29-7、36-8、36-11、51-3、51-4)なども上位ランクの什物と思われる(註4)。貯蔵具や加工具はすべて国内陶器で、そのほとんどが備前系で占められており、僅かに瀬戸美濃系を含む。当時の備前焼では生産していない卸皿は瀬戸美濃系のものを使用するが、それ以外の鉢類や壺・甕類は備前系のものであった。

以上、機能別の組成は居住性を備えた家財道具の様相を呈している。少量ではあるが当時の威信財や茶道具などを所持する文化的な素養と経済力が窺え、組成の7割近くを占める“かわらけ”は酒宴を主催したこと示している(註5)。以上のことから静間城は応急的な施設ではなく居住性を備えた領主の居館であったと思われる。

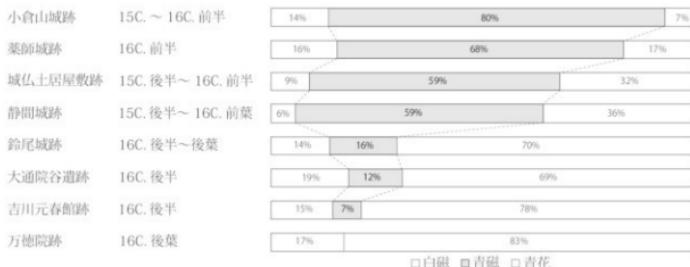
土師質土器

出土した土師質土器の器種はすべて皿(土師皿)であり、破片数の比率は68.7%と最も多い。土師皿は輪轆で成形されたもので、成形や胎土が異なるものは含まれなかった。遺跡地周辺で作られた在地系と思われる。器形は高台が小さく外開きに立ち上がり、おおむね共伴する陶磁器に示される年代観に収まるものと思われる(註6)。県内における土師皿の組成比が高い遺跡をあげると、石見国最大の国人領主である益田氏の居城七尾城跡(益田市)が78.3%(註7)、15世紀末から16世紀前半の城館遺跡である上居造遺跡(安来市)が77.3%(註8)、12世紀後半から15世紀前半代の方形居館である蔵小路西遺跡(出雲市)が97.1%となる(註9)。土師皿の大量出土について、福井県一乗谷遺跡の出土遺物を分析した小野氏は、朝倉館の“かわらけ(土師皿)”が京都周辺並みに組成の9割を占めることから、“かわらけ”を大量に使用する儀式を行う階層性を示すものと重視する(小野1991)。

当遺跡は出土遺物の総点数が少ないことから、大量使用については不明な点もあるが、県内の城館遺跡に準じた組成をしたものといえる。

白磁・青磁・青花

広島県内で出土した中国製の白磁・青磁・青花の組成比に当遺跡を加えたのが第8表であり、中国地方における中国磁器の組成比の変遷を示したものである(註10)。15世紀代には8割を占める青磁は16世紀かけて減少し続け、代わって青花が高くなる傾向が窺える。尼子氏関連遺跡と吉川氏関連遺跡の貿易陶磁の検討を行った村上氏は、青磁主体から青花主体へと変化したのは16



第8表 中国磁器の組成(%) (沢元 2008/ 小都・西尾・守岡 2016 掲載表より作成)

世紀中頃と指摘するので(村上 2013)、当遺跡はその前段階であったことがわかる。15世紀中葉から16世紀中葉における貿易陶磁の全国的な傾向を分析した水澤氏は、遺跡から出土する青磁・白磁・青花の割合が時期的に変化することを示している。青磁の場合、通常の遺跡では15世紀後半では6割を超え、16世紀第1四半期は3割強とされる。当遺跡は58%であり、ほぼ上記の範疇に収まる。また白磁は15世紀後半から16世紀第1四半期にかけて2～3割を占めるとされるが、当遺跡では6%にとどまり低い傾向を示している。青花は大多数の遺跡では15世紀後半は2割以下で16世紀前半から1570年頃までは3割程度とされる。当遺跡では36%となりやや高めの比率になる。全国的な傾向と比較すると、青磁はほぼ同率であるが、白磁が少なく代わりに青花が若干高めの傾向となる。

朝鮮陶磁

貿易陶磁に占める朝鮮陶磁の割合は19.3%であり一定量を占めている。全国的にみて朝鮮陶磁の比率が高いとされる中須西原遺跡(益田市)では12%であり、とくに15世紀後半から16世紀前半代がピークとされる(木原・佐伯 2016)。当遺跡では全体的な資料点数が少ないなか破片点数の多い舟徳利が換算されることにより実感より高めの数値となるが(註11)、遺跡の存続期間が短いことから15世紀後半から16世紀前半の傾向を端的に示した可能性も考えられる。村木氏は日本海沿岸の中須東原・西原遺跡などでみつかる朝鮮陶磁器の灰青釉陶器(本報告書:灰青沙器)の皿などは商品的価値が低い雑器と考えられ、主力製品の錦布に伴ったものではないかとする。またこうした雑器は瀬戸内地方での出土例は少なく、博多を経由しない対馬から山陰地域の港に直接持ち込まれた可能性を指摘する(村木 2016)。関氏はこうした村木氏の見解を受けて、貿易形態は朝鮮における私貿易ないしは密貿易であった可能性を考える(関 2016)。越前と若狭の貿易陶磁を分析した阿部氏は、日本海側で出土する朝鮮陶磁は海岸に近い遺跡では多く、内陸部では急減する傾向があり、福井県小浜より西でみられる朝鮮陶磁の卓抜は山陰的様相の特徴の一つと指摘する(阿部 2016)(註12)。

静間城は日本海を望む高台に位置し、東麓は静間川が流れる水陸を結ぶ要地である。朝鮮陶磁からみる当遺跡は15世紀後半代から16世紀前半代の山陰地方沿岸部の遺跡に見られる特徴を示している。

備前系陶器

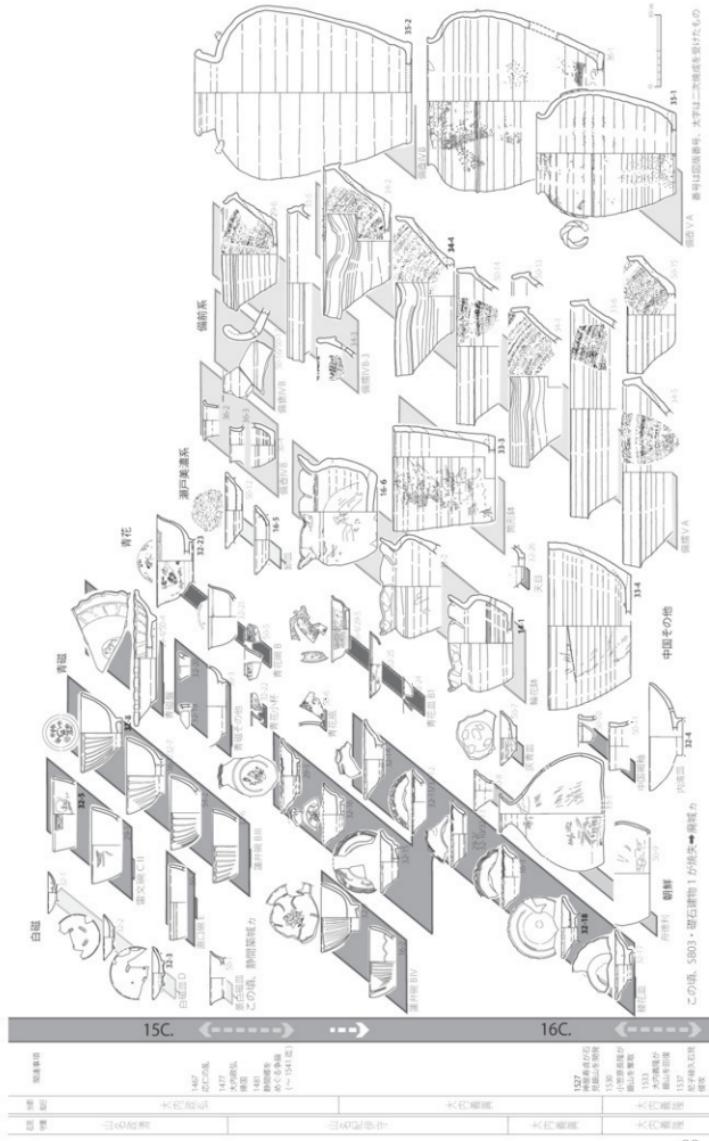
土師質土器に次いで破片数が多いのが備前系陶器であり全体の 12.6 % となる。陶磁器では 52.2 % と過半数を占めるが、これは破片数の多い表によって比率が高めに出ているものと思われる。陶磁器の推定個体数でも青磁について多く、ほぼ三分の一を占める。器種は壺・甕・擂鉢に、15世紀後半以降に作られ始めた筒形鉢と輪花鉢を加えている。時期は IV B 期（15世紀前半～16世紀初頭）から V 期（15世紀末～16世紀後半）であるが、いずれの器種も IV B 期から V 期への移行期に属するものである。広域にわたって備前焼の分布とその傾向を分析した重根氏によると、IV B 期は分布域が拡大した時期で遺跡あたりの出土点数も増加する。この備前焼の流通が拡大する背景として、中国地方一帯を押さえた山名氏勢力の伸張が影響を与えた可能性を示唆する。続く V 期は遺跡数・点数とともに減少して城館関連遺跡のみから出土する状況へと変化する（重根 2016）。大田市域では IV A 期（14世紀前葉～15世紀中葉）から備前焼が出土し、IV B 期から V A 期は遺跡数と器種を増やすが、VB 期（16世紀後葉）から VI 期（17世紀前葉～17世紀中葉）にかけて石見銀山遺跡内に収斂する状況であった（重根 2008）。

県内の中世遺跡の事例をあげると、石見部の七尾城跡では備前系は土器・陶磁器（瓦を除く）の 0.4 % であり、陶磁器では 10 % である。同様に中須東原遺跡（益田市）では土器・陶磁器の 0.3 %、陶磁器では 10 %（註 13）となる。出雲部の土居成遺跡では土器・陶磁器の 17.4 %、陶磁器の 76.7 % を占める。事例数は少ないものの、出雲部の城館遺跡では備前系の比率が高く、石見西部の益田氏関連遺跡では低い傾向が窺える。

当遺跡は備前焼が広範囲かつ大量に流通した IV B 期から城館を中心とした流通へ変わる V 期にかかり、陶磁器の過半を備前系が占める状況を呈している。備前系の組成比でみると石見西部より出雲側の様相に近く、美保閥を中継地とする当時の流通の有様を示している可能性がある。

2. 出土遺物にみる静間城の様相

第 64 図は出土した陶磁器を年代観の分かることを軸に産地別に配置したものである（註 14）。出土した陶磁器では古いものは白磁皿（D）、青磁碗（C-II, E, B III）、青磁盤、青花碗（B）などがあげられ、時期は 15 世紀中葉に遡る。ただしこうした磁器製品は耐久消費材として世代を超えて使用される財産的価値があり（註 15）、消耗を前提とする使用価値である擂鉢がより築城年代を示しているように思われる。出土した備前系擂鉢はいずれも IV B - 3 期から V A 期への移行期に属しており、年代観は概ね 15 世紀後葉から 16 世紀前葉に収まる。よって、静間城が築城されたのは 15 世紀後葉頃と想定される。これは応仁の乱（1467～77）によって中央の権門勢力が衰えて各地で紛争が発生し、代わりに地方領主が台頭した時期にあたる。柴田氏は全国的な城館遺跡の動向から、15 世紀を中心とした時期にそれまでの農業生産地帯に立地した居館の廃絶や移転する動きが相次ぎ、直接的勧農権から間接的勧農権へと変化するなかで在地領主権が格段に強化されたのではないかとする（柴田 1991）。松井氏は遠江国の山城を例にとり、威信財となる貿易陶磁や饗宴に伴う「かわらけ」が集中的に出土する曲輪は平地の居館機能の一部が山城に移されたのではないかとする。出土遺物は 15 世紀末葉から 16 世紀前葉にピークがあり、駿河今川氏による遠江侵攻に伴う軍事的な緊張感が居館の山城移転を促す契機となった可能性を指摘する（松井 2011）。第 1 節で述べたように静間郷では上静間氏と石見吉川氏が約 60 年にわたる争論を繰り返している。緊張関係が続くなか、それまでの平地からより防衛的に有利な静間城へ居館機能を移したものと思



第64図 静間城跡出土陶磁器一覧

われる。15世紀中葉に比定される築城時期を遡る製品の一部は、以前の居館で使用していたものと運び込んだ可能性が考えられる（註16）。

15世紀後半から16世紀にかけて加わる器種として、青磁稜花皿・青花皿・備前系の輪花鉢・筒形鉢、朝鮮陶器の舟徳利や灰青沙器の皿があり器種構成は多彩となる。全体的に白磁の比率が低いが、16世紀前葉に出現し中葉から急増する白磁皿E群が出土しなかったことで割合が低く抑えられているものと思われる。これは青磁が貿易陶磁の6割近くを占める組成や16世紀前葉に納まるとした備前系播鉢の様相とも一致する。主郭2の出土遺物の一部には二次的に被熱をうけた一群があり、出土位置からS B 03と礎石建物1の焼失に伴って類焼した可能性が高い。この被熱した資料より新しい時期の遺物ではなく、この火災をもって廢城したものと考えられる。16世紀前葉は石見鉄山の開発が進み、鉄山をめぐり近隣勢力が相次いで仁摩郡に攻め込む時期にあたり、静間郷周辺の政情はきわめて不安定であった。

また16世紀前葉は分立した諸勢力の再編成が促される時期でもある。石見国西部を拠点とした益田氏でも、16世紀直前に七尾城下への集住が促され家臣団の編成が進展した可能性が指摘される（村上2016）。水澤氏は越後国の動向として、方形居館から戦国期城郭に拠点を移す時期として、15世紀末から16世紀初頭頃を想定する（水澤2009）。静間城が16世紀前葉の火災をもって再利用されなかった背景には、石見国東部においても小勢力が割拠する状況から集約にむけた再編への動きを示しているものと思われ、本遺跡は居館から戦国期城郭へ向かう過渡期における一様相として位置づけられる。

3. 備前系輪花鉢と筒形鉢について

備前焼は13世紀後半以降、主に壺・甕・播鉢を焼き続けていたが、15世紀後半になると新しい器種が出現する。当遺跡も備前系輪花鉢と筒形鉢が出土しているが、こうした器種は茶会へ取り入られた国内（和物）陶器との関わりのなかで注目されている（註17）。

輪花鉢

当遺跡からは備前系輪花鉢（14-1、16-6、33-2）が3個体出土している。県内では鷺浦遺跡（出雲市）から三足付の備前系輪花鉢が埋甕の蓋に転用された状態で見つかっており（註18）、合わせると県内の事例は4例となる。当遺跡から出土した輪花鉢は伝世品の砂金袋形水指と形状が酷似している。16世紀前半代に出土する備前系の輪花鉢を検討した梶山氏は、16世紀前半までの喫茶は、基本的に茶を点ててから客の待つ会所へ運ぶのを基本とし、点前をみせる喫茶は堺や京都・奈良の町衆に導入されたばかりの先進的なスタイルで地方まで普及していたとは考え難いとし、寺院跡などの出土例から香炉として作られた可能性を指摘する（梶山2011）。香炉や火鉢の場合、底部の足や煤の付着などは有力な傍証になり得るが、当遺跡から出土した輪花鉢はいずれも平底であり煤の付着はみられなかった。当遺跡で出土した3個体のうち、2個体はSB03と礎石建物1の焼失に伴って被熱しており複数個体を使用する状況が考えられる。

筒形鉢

備前系の筒形鉢（33-3）の類例として、県内では新宮谷遺跡（安来市）から備前系筒形鉢1点が出土していることが確かめられる（註19）。こうした筒形鉢は信楽焼や丹波焼にもみられるもので、曲げ物桶を模したものといわれる（註20）。備前焼では武野紹鷗（1502-55）が所持したと伝えられる水指「青海」が著名であり、当遺跡から出土した筒形鉢の外見も一見するとそれに類似す

る。16世紀から17世紀代を中心に備前焼の茶道具を検討した下村氏は、備前焼の水指・建水に関わる表現として「長蘆寺校割帳案（以下、校割帳）」『大徳寺文書』から大永5年（1526）「水刺 備前物」と享徳元年（1528）「下水器 備前物」をあげる。ただし、「校割帳」に記載されるものは茶道具に限定できないことから“侘び茶”用の道具かは不明とし、日常的な喫茶用の小型水溶器の可能性を指摘する。各地から出土した備前系の筒形鉢を、口唇部が平滑な「一重口筒形」と、口寄せをもつ「口寄せ筒形」にわけ、一重口筒形は「水指の特徴を有した先駆的な例の可能性があるもの」と位置付けて、口寄せ筒形の出土例をもって「青海」の製作年代を「遅くとも天正年間（1573～92）には生産」とすることから、口寄せ筒形は水指として作られた可能性を示唆する（下村2016）。

当遺跡で出土した筒形鉢（33-3）は「一重口筒形」にあたり、「青海」などにみられる口寄せ（蓋受け）はもたない。天正年間は茶道に作びの要素が加えられ、国産（和物）陶器が茶会に取り入れられた時期に相当する。当遺跡の廃絶は16世紀前葉頃と想定されるので時期的に「校割帳」の年代に近く、これらの記載をもって茶道具に限定できないことは当遺跡の筒形鉢にも該当する。備前焼水指がいつまで遍及させ得るのか、また出土遺物のどこまでが範疇に入るのか、地方への伝播を含めて現段階では定見は得られていない。

以上、当遺跡で出土した輪花鉢3個体と筒形鉢1個体は、いずれも伝世品の水指と外形は似ているものの、用途を絞り込むには細部の形状や時代背景の裏付けが不十分と思われる。

第3節 まとめ

今回の調査では山城の他に古墳時代の遺構・遺物も確認されている。主郭東端及び北郭で中世遺構面の下層から竪穴建物跡2棟、加工段3棟と建物跡にはならなかったが、多数の柱穴が検出された。これらの時期は古墳時代後期頃に位置づけられ、山城として使用される以前からこの丘陵が利用されていたことが判明した。静間城跡が立地する丘陵の東側に広がる水田には平ノ前遺跡が存在し、同時期の集落が展開されている。平ノ前遺跡では古墳時代中期～後期の灌漑用水路跡から県内2例目となる金銅製歩打付空玉が出土しており、朝鮮半島との関わりが指摘されている興味深い遺跡である。静間城跡で確認された建物跡などはこの平ノ前遺跡の一部と考えられ、これと一体となった大規模な集落がこの地に營まれていたことが明らかとなり、当地域の古墳時代集落の様相を知る上で貴重な成果と言える。また、古代の遺物も僅かではあるが出土していることは、古墳時代から中世に至るまで、集落等が營まれ続けていたことを示している。

静間城跡については再三述べたように、居館的な居住空間を兼ね備えた山城と評価され、恒常に城主等が居住していた可能性を指摘した。その存続期間は15世紀後葉～16世紀前葉と考えられ、建物跡の規模も大きく規格性を持って建てられている。また、出土遺物は比較的多く、国産陶器と青磁や青花などの貿易陶磁などが確認された。これら以外に鍛冶炉跡も確認されたことから主郭と北郭では機能差や階層差が存在するものと考えられ、主郭は城主の居住空間、北郭は城主以外の家臣等の居住または城の維持管理に必要な釘等の部材を生産するための作業場等として使用された可能性も指摘したところである。

上記のような構成を有する静間城跡の立地の特徴としては、南側に静間川、北側には日本海が一望でき、海上交通やその周辺の交通路を見渡せる位置にある。このことから推測すれば、城跡がこ

の地に築造された要因の一つに、これら交通の要所の監視や支配を目的とした可能性も考慮されようか。

これまで、県内での城跡の調査事例は少なく、山城=戦闘施設と言ったイメージが強かった。しかし、今回の調査結果は、戦闘の場としてだけでなく、日常生活の場、儀礼の場、維持管理の場といった機能分化した多面的な空間利用が行われていたことを具体的に示す成果であったと評価できるよう。

【参考文献・註】

- 『島根県の地名』日本歴史地名体系第33巻 平凡社 1995年
- 小野正敏編『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会 2001年
- 高居茂雄編『石見の山城』ハーベスト出版 2017年
- 中井 均編『戦国城郭の考古学』『季刊考古学』第139号 雄山閣 2017年
- 『県史32』島根県の歴史 山川出版社 2005年
- 千田嘉博・小島道裕・前川要『城館調査ハンドブック』1993年
- 西ヶ谷恭弘『復原図説 日本の城』理工学社 1992年
- 西ヶ谷恭弘『戦国の城(上)』学研 1991年
- 西ヶ谷恭弘『戦国の城(下)』学研 1992年
- 島根県教育委員会『島根県中世城跡分布調査報告書 第一集 石見の城跡』1997年
- 滋賀県教育委員会『開津城遺跡』2016年
- 福井県教育委員会『石山城跡』2005年
- 木原光・佐伯昌俊「石見郡田における15・16世紀の貿易陶磁一組成と朝鮮陶磁器の様相を中心としてー』『貿易陶磁研究』No.36 日本貿易陶磁研究会 2016年
- 村木二郎「国家を超えた中世の日朝交流」『歴博』vol.195 国立歴史民俗博物館 2016年
- 閔周一『東アジア海域交流のなかの中世山陰』『貿易陶磁研究』No.36 日本貿易陶磁研究会 2016年
- 柴田龍司『中世城館の画期・館から館城へ-』『中世の城と考古学』新人物往来社 1991年
- 水澤章一『日本海流路の考古学・中世武士團の消費生活』高志書院 2009年
- 村上勇『中国地域における15・16世紀の貿易陶磁の様相と課題』『貿易陶磁研究』No.36 日本貿易陶磁研究会 2016年
- 重根弘和『中世備前焼の分類と分布』『中世陶磁器の考古学 第四巻』雄山閣 2016年
- 重根弘和・『島根県出土の備前焼』第七回山陰中世土器検討会資料集 山陰地方における備前焼』山陰中世土器検討会 2016年
- 松井一明「山城に出現した館・出土遺物より-』『戦国時代の静岡の山城 考古学から見た山城の変遷』NPO法人城郭遺産による街づくり協議会編 サンライズ出版 2011年
- 阿部来「中世後期における越前若狭の貿易陶磁・白山平泉寺跡境内と一乗谷朝倉氏遺跡を中心に-』『貿易陶磁研究』No.36 日本貿易陶磁研究会 2016年
- 下村奈穂子『備前焼茶道具の研究』法藏館 2016年
- 小野正敏『城館出土の陶磁器が表現するもの』『中世の城と考古学』新人物往来社 1991年
- 小野正敏『威信財としての貿易陶磁と場 戦国期東国を例に-』『戦国時代の考古学』高志書院 2003年
- 村上勇『出土陶磁から見た尼子時代の諸様相』『尼子氏の特質と興亡史に関わる比較研究』島根県古代文化センター 2013年
- 鶴山博史『「茶陶」の定義について—モデルとコピーの視点から-』『備前歴史フォーラム 2011 資料集 備前と茶陶 ～茶道の視点 考古学的視点～』備前市教育委員会 2011年
- 註1 土師皿の破片数および推定個体数は他のものと抽出方法が異なる。陶磁器および瓦質土器は細片全てを計数したが、土師皿は長軸 3cm以上のものを抽出している。また陶磁器および瓦質土器は、破片ごとに推定される個体の分類を行ったが、土師皿は個体数が多いことから残存する底部を加算して個体数を割り出している。よって土師皿は推定される最低個体数となる。土師皿底部の残存数は以下の通りである。尚、第弔表には合計した数字を記載している。

残存率	1/8	2/8	3/8	4/8	5/8	6/8	7/8	8/8
数量	34	84	10	4	0	0	1	1

復元底径 5cm以上

残存率	1/8	2/8	3/8	4/8	5/8	6/8	7/8	8/8
数量	72	82	22	5	1	2	3	4

復元底径 5cm以下

註 2 一般的に擂鉢は食品や薬品などの加工に用いる調理具と思われるが、手工業の素材加工にも用いられることを留意して加工具とした。中世期には粉物が広く普及したことが指摘されるが、15世紀代の中流公卿山科家の日記には、麦粉、うどん、切麦、素麺、「坂本素麺」、きしめん、味噌、垂れ味噌、かまぼこ、きびだんご、粽、あめちまき、などが挙げられ、15世紀後葉から16世紀初頭にかけての奈良興福寺『多門院日記』には加工食品として味噌（各種）、饅、米酢、うどん、そば、素麺、切麦、かまぼこ、などがみられる。とくに味噌には「三年味噌」と記載されるものもあり、当時の保存性の高い食品であった。(2014 吉田元『日本の食と酒』講談社学術文庫)

註 3 水澤氏は青磁盤の口径が30cmを超えるものと 24cm前後のものをわけ、後者は出土数が多いことから戚信財とするよりも威勢財としている。水澤幸一 2017「中世後期の青磁盤」『中近世陶磁器の考古学 第5巻』雄山閣

註 4 室町時代の「福富草子」には、書院棟に天目風碗、茶托、折縁青磁盤、茶筅、青磁風の碗を置いており、当時の分限者の持ち物の様子が描かれる。(滋澤敬二編集 1984「福富草子」『新版 絵巻物による日本庶民生活絵 冊第四巻』平凡社)

註 5 領主館は一面では政所としての機能を備えていた。日常的には領民が参加して庶務が処理され、年中行事を通じて領主と領民の間で酒宴を設ける機会も多かった(1997 藤木久志『戦国の村を行く』朝日選書)。

註 6 旗江耕史氏ご教示による。

註 7 村上勇「益田七尾城跡出土遺物の組成・陶磁器を中心にして」1998『七尾城跡・三宅御土居跡・益田氏関連遺跡群発掘調査報告書』・益田市教育委員会

註 8 舟原順 2009「土居城跡出土の陶磁器について」『西国城館論集Ⅰ』中国・四国地区城館調査検討会

註 9『萩小路跡遺跡』鳥根県教育委員会 1995年

註 10 沢元氏および小郡・西尾・守岡氏の論考に掲載された表から、白磁・青磁・青花のデータを抽出し、青磁の割合を基準にして遺跡の並び順を入れ替えたものである。沢元保夫 2008「城館跡出土の陶磁器」『芸備 第35集』芸備友の会 / 小郡・西尾克己・守岡正司 2016「安芸鈴尾城跡と採集遺物」『芸備 第47集』芸備友の会

註 11 推定個体数では貿易陶磁に占める割合は 8.2%となる。

註 12 小浜以北の城館遺跡における貿易陶磁に占める朝鮮陶磁の割合は、朝倉館(福井県)4%、江上館(新潟県)0.06%、藤島城(山形県)0.09%、浪岡内館(青森県)0.03%となる(水澤 2009 掲載表より算出)。

註 13『中須東原遺跡』益田市教育委員会 2013年

註 14 遺物実測図の配置は産地別を優先しており、必ずしも年代割を表したものではない。例えば天目碗(32-26)などは15世紀後半代に遡る可能性がある。

註 15 中古品の流通も考慮に入れなければならない。小野正敏 1991「中世陶磁器研究の視点と方法」『帝京大学山梨文化研究所シンポジウム報告集 考古学と中世史研究』名著出版

註 16 中国地方における15世紀後半の代官クラスの在地領主が所持していた家財道具を記した史料として寛正4年(1643)の「新見領地方所見搜物色々在中(東寺百合文書)」があげられる(1986 小泉和子「莊園政所の家財と生活」『週刊 朝日百科 日本の歴史 2 中世の村を歩く 寺院と狂歌』朝日新聞社)。それによると家財道具の大半は漆器や織維製品であり陶磁器類は限られていた。

註 17 畠中英二 2016「考古学からみた和物茶陶の創出とその狙い手 - 水指・建水を対象に -」『中近世陶磁器の考古学 第四巻』雄山閣

註 18 大谷從二・近藤正 1971「大社・鷺浦古墓」『鳥根県埋蔵文化財調査報告書 第III集』鳥根県教育委員会/西尾克己 2012「鷺浦遺跡出土の陶磁器」『出雲先生の森博物館 研究紀要第2集』出雲先生の森博物館)・・・表面は二次的に焼けた状態であったとされる。

註 19『新宮谷跡発掘調査報告書』鳥根県庁瀬川町教育委員会 1982

註 20 桥崎彰一 1986「国境の展開 中世の茶陶」『週刊朝日百科 日本の歴史 16 金閣と銀閣 室町文化』朝日新聞社 /19 上喜久雄・竹内順一編 1999「信楽・伊賀の水指①」『やきもの名鑑 1 窯変と焼締陶』講談社

写真図版

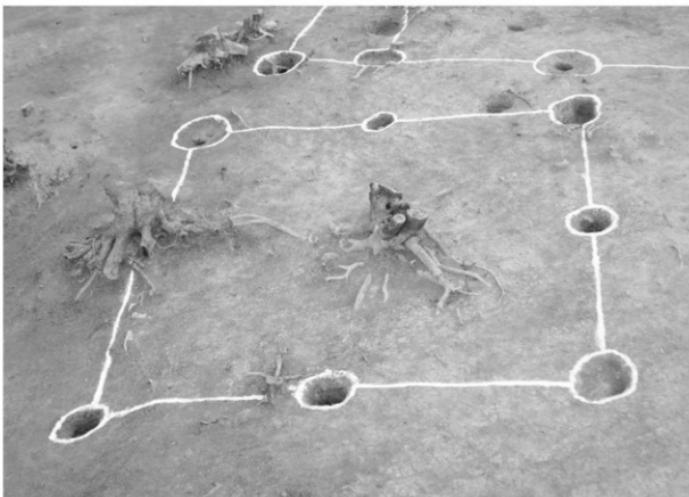


1. 調査前風景

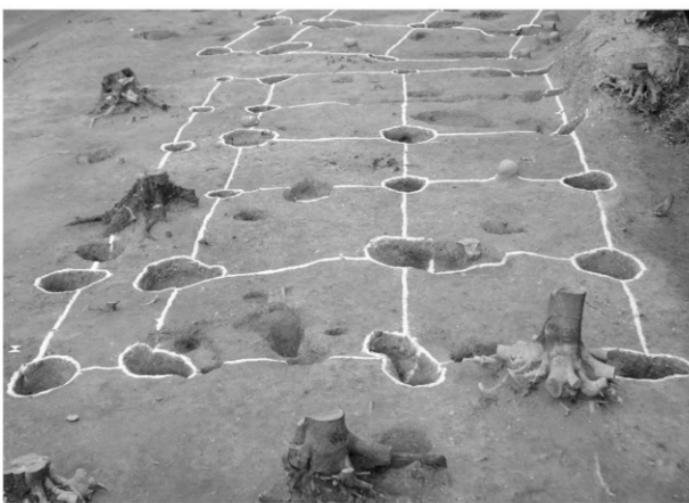


2. 主郭 2 調査前風景

図版 2



1. SBO1 完掘状況



2. SBO2 完掘状況

図版3



1. SBO3 完掘状況

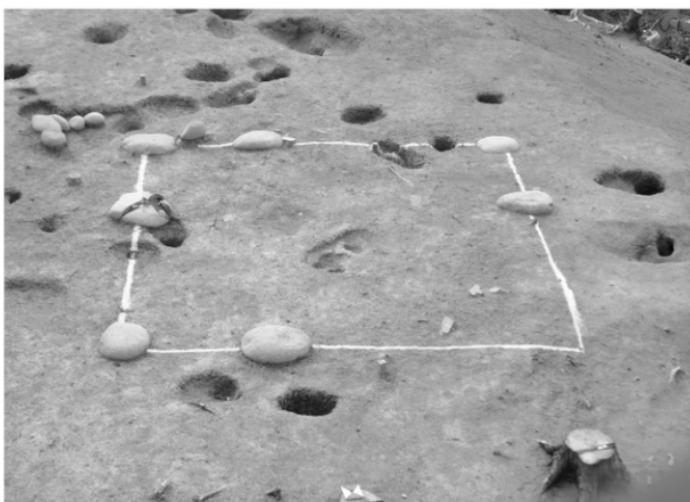


2. SBO4 完掘状況

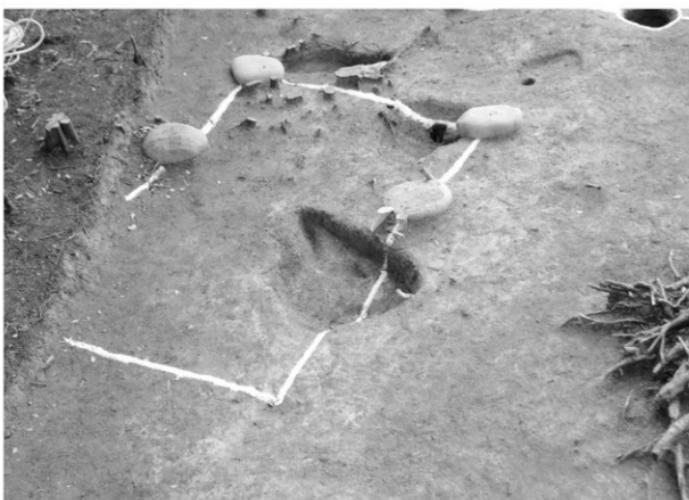
図版 4



1. SB04・土器Ⅰ検出状況



2. 磚石建物Ⅰ完掘状況



1. 磐石建物 2 完掘状況



2. SX01 完掘状況

図版 6



1. SX02・05 完掘状況



2. 土墜 1 調査状況



1. 土壁 1 土層堆積状況



2. 飛礫石調査前状況

図版 8



1. 飛躍石完掘状況



2. 主郭2焼土範囲検出状況



1. 遺物出土狀況 (1)



2. 遺物出土狀況 (2)

図版 10



1. 遺物出土状況 (3)



2. 鋸状鉄製品出土状況



1. 主郭 2 調査風景

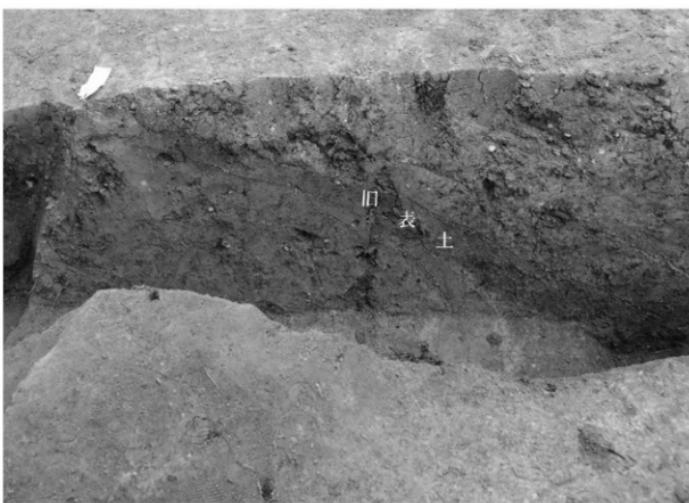


2. 主郭 1 完掘状況

図版 12



1. 主郭 2 完掘状況



2. 旧表土検出状況



1. 主郭 2 東側整地層及び S101 検出状況



2. 碇石建物 3 完掘状況

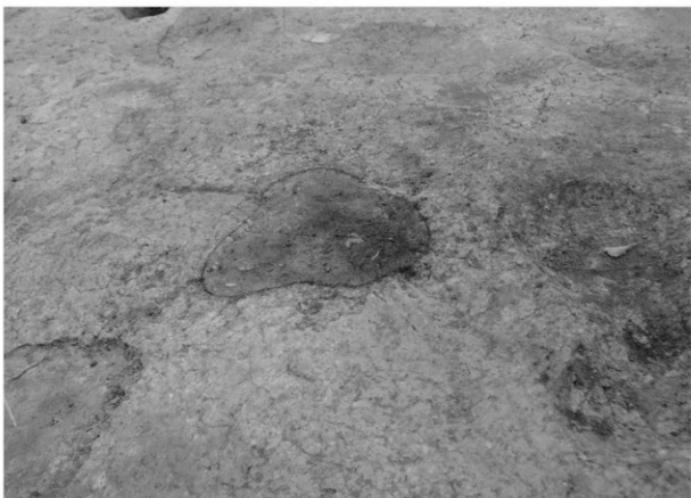
図版 14



1. 1号炉検出状況



2. 1号炉完掘状況



1. 2号炉検出状況



2. 2号炉完掘状況

図版 16



1. 北郭鍛冶炉及び焼土検出状況



2. 北郭調査風景



1. 北郭中世完掘状況



2. 主郭2切岸全景

図版 18



1. SEO1 断ち割り状況



2. S101 遺物出土状況



1. S101 床面検出状況



2. S101 完掘状況

図版 20



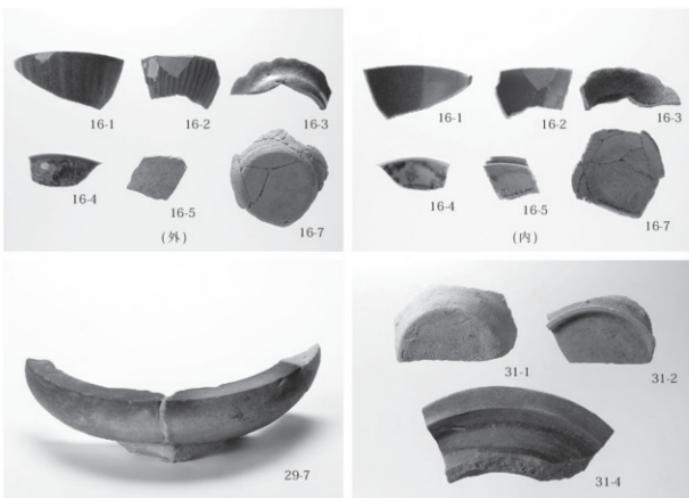
1. 加工段 1 ~ 3 完掘状況



2. 北郭古墳時代遺構完掘状況

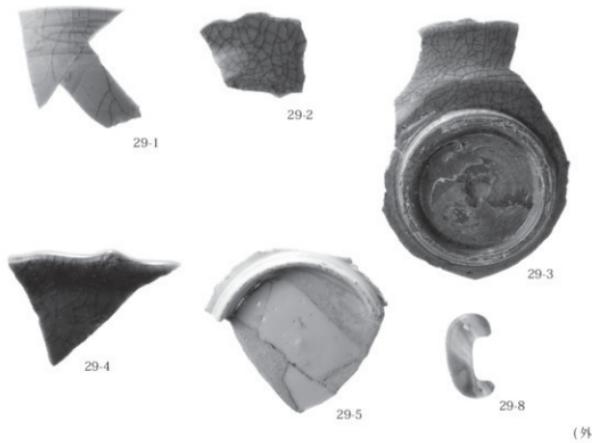


1. SB02・03・主郭1出土遺物（第14・16・29図）

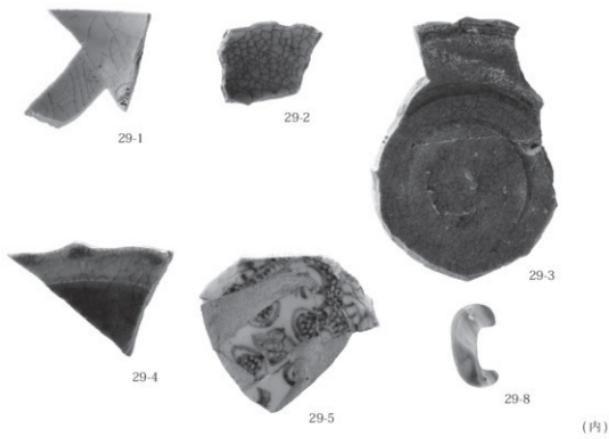


2. SB03・主郭1・主郭2出土遺物（第16・29・31図）

図版 22



1. 主郭 1 出土遺物 (第 29 図)



2. 主郭 1 出土遺物 (第 29 図)

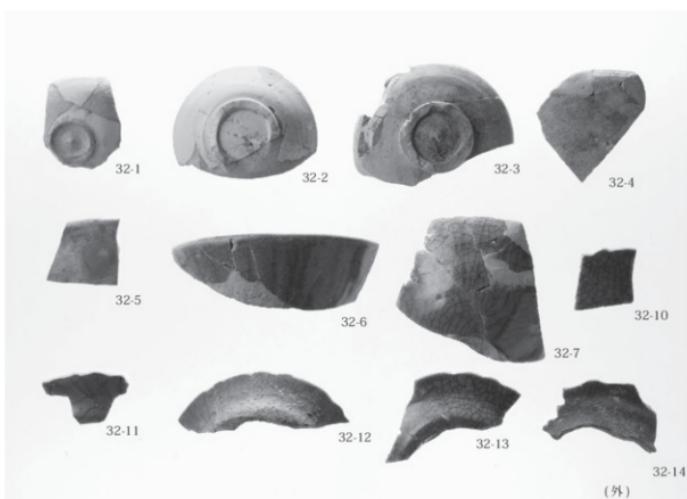


1. 主郭 2 出土遺物(1) (第 31・32 図)

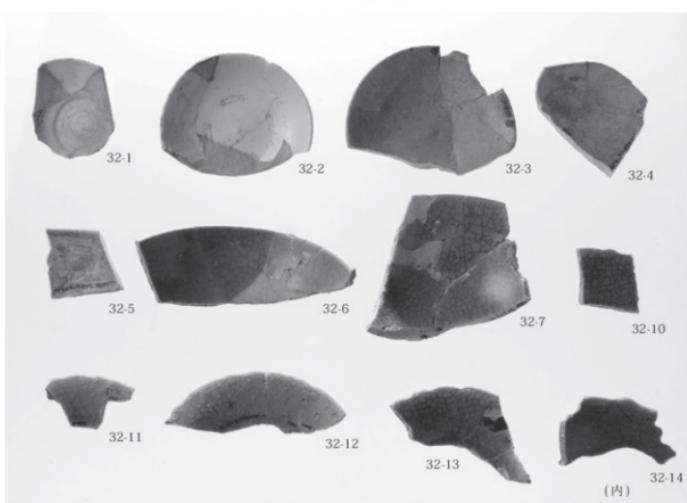


2. 主郭 2 出土遺物(2) (第 33 図)

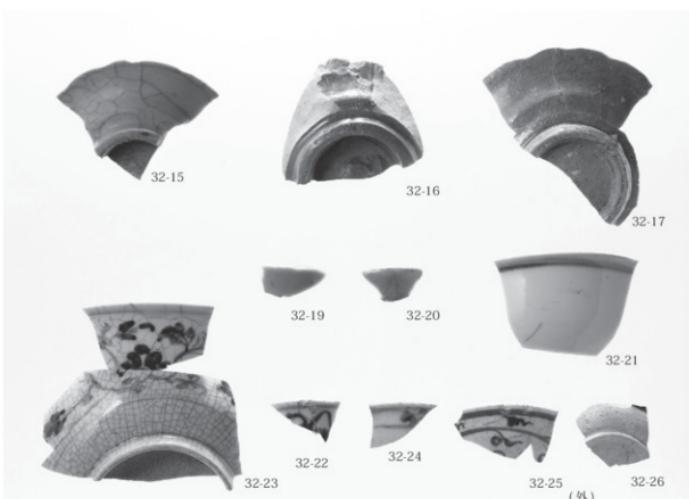
図版 24



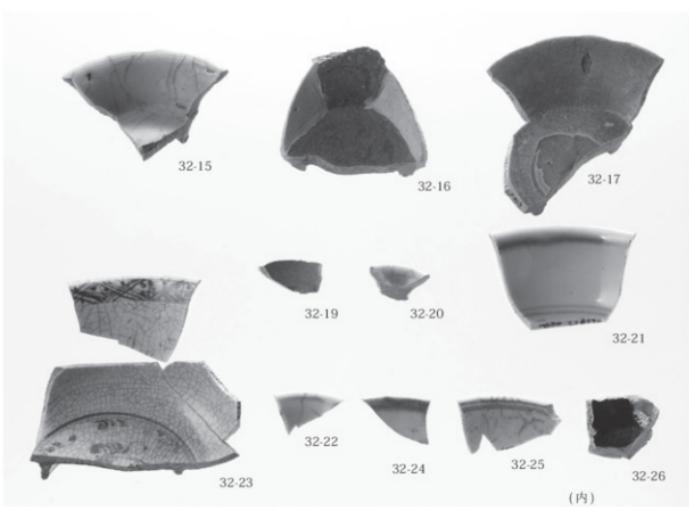
1. 主郭 2 出土遺物 (3) (第 32 図)



2. 主郭 2 出土遺物 (3) (第 32 図)



1. 主郭 2 出土遺物 (4) (第 32 図)



2. 主郭 2 出土遺物 (4) (第 32 図)

図版 26



1. 主郭 2 出土遺物 (5) (第 33 図)



2. 主郭 2 出土遺物 (6) (第 34 図)



1. 主郭 2 出土遺物 (7) (第 34・35 図)

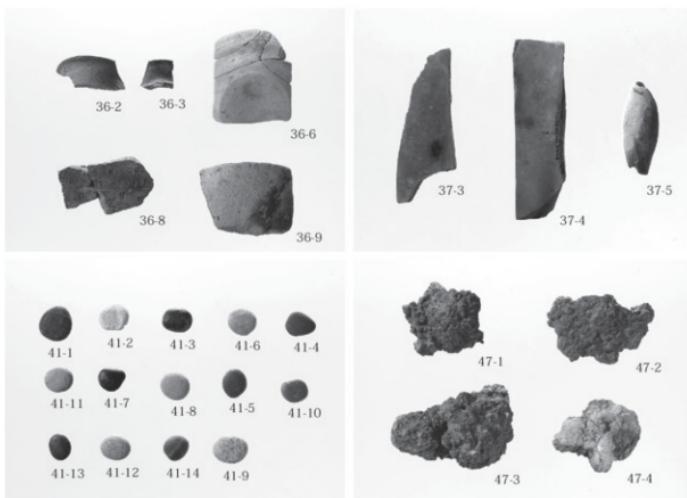


2. 主郭 2 出土遺物 (8) (第 36 図)

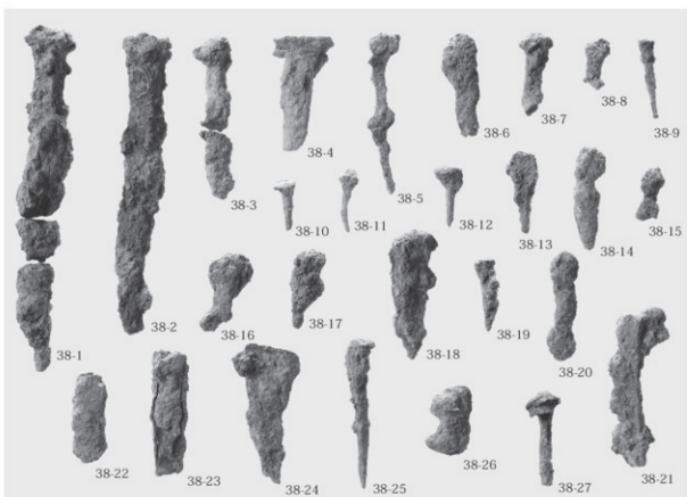
図版 28



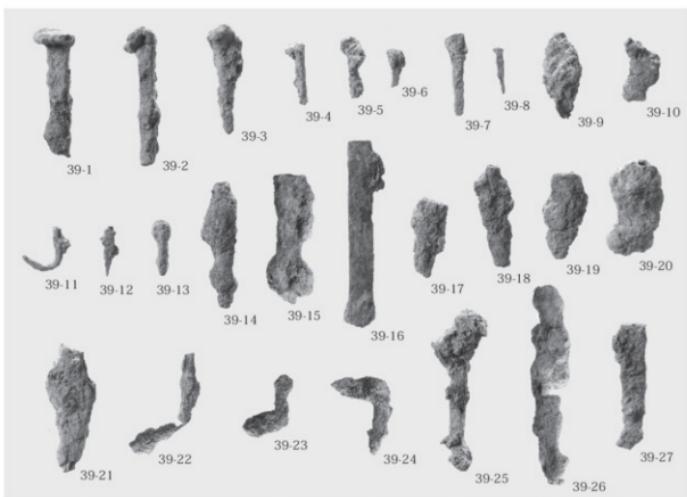
1. 主郭 2 出土遺物 (9) (第 36・37 図)



2. 主郭 1・主郭 2(10)・1号炉出土遺物 (第 36・37・41・47 図)

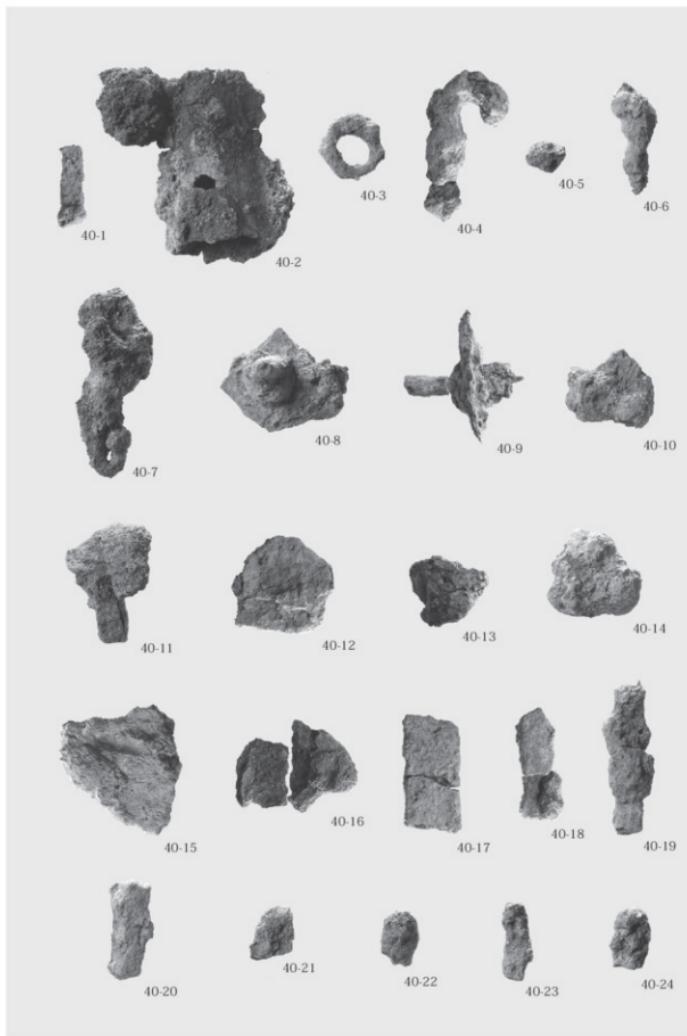


1. 主郭 2 出土遺物 (11) (第38図)



2. 主郭 2 出土遺物 (12) (第39図)

図版 30



1. 主郭 2 出土遺物 (13) (第 40 図)

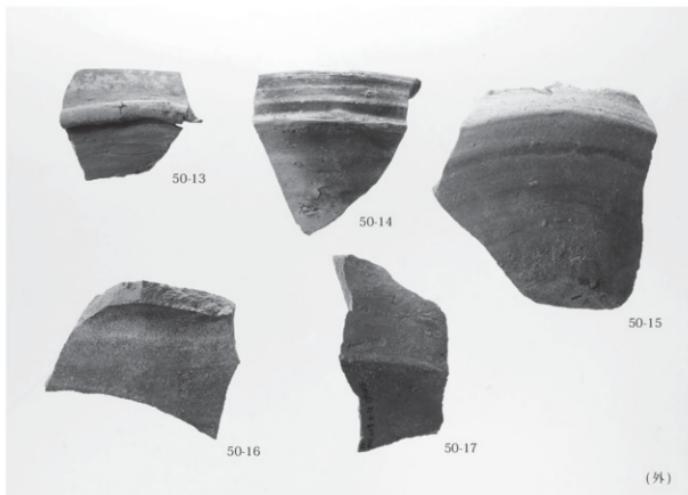


1. 北郭包含層 1 出土遺物 (1) (第 50 図)

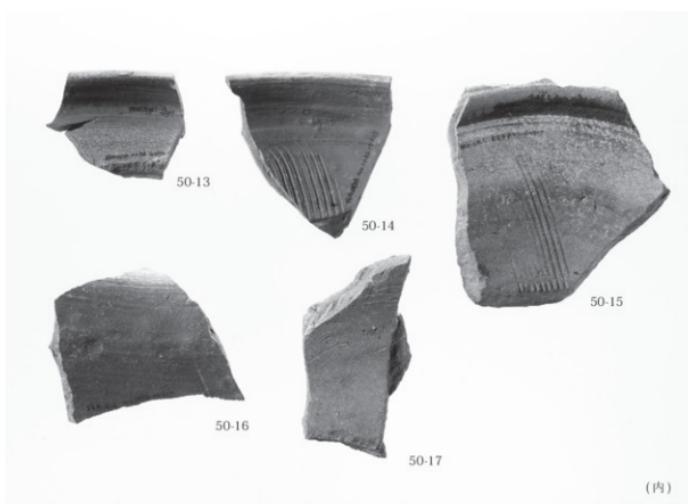


2. 北郭包含層 1 出土遺物 (1) (第 50 図)

図版 32



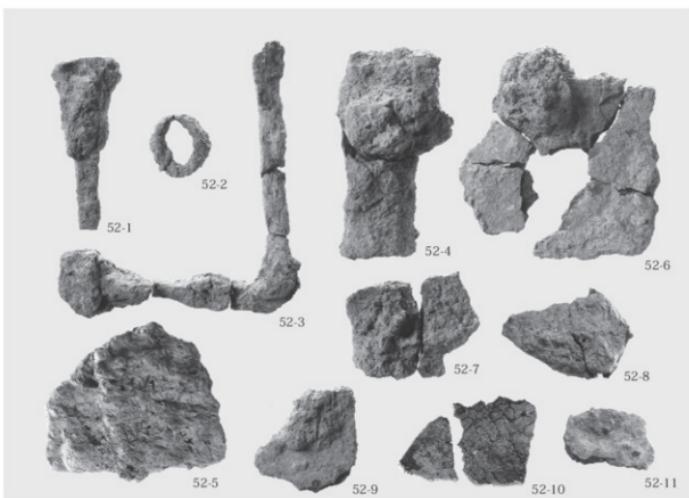
1. 北郭包含層 1 出土遺物 (2) (第 50 図)



2. 北郭包含層 1 出土遺物 (2) (第 50 図)

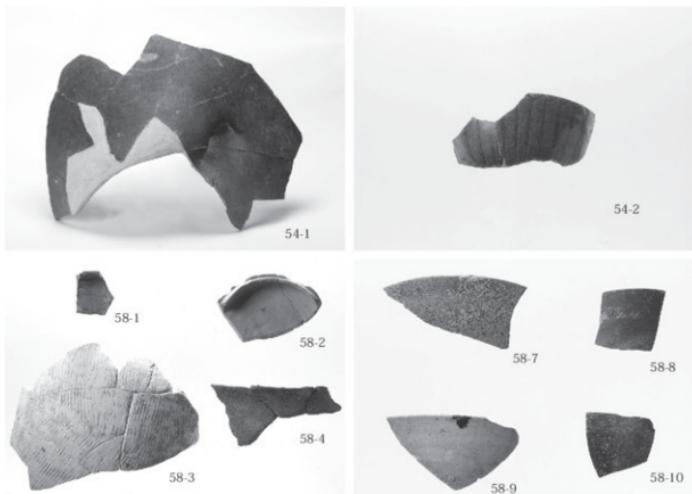


1. 北郭包含層 1 出土遺物 (3) (第 51 図)

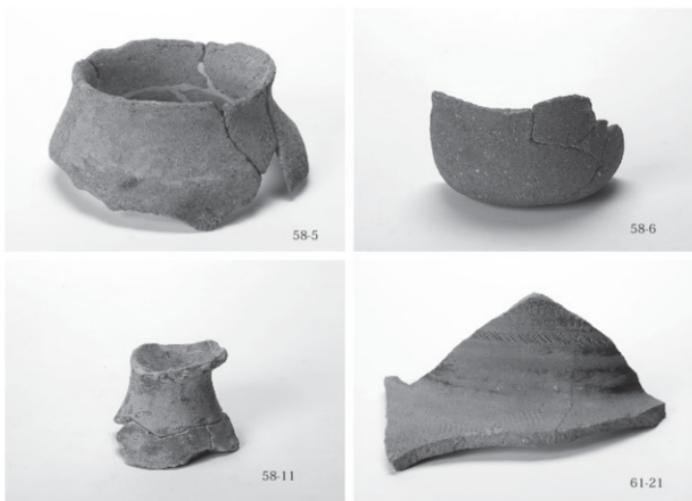


2. 北郭包含層 1 出土遺物 (4) (第 52 図)

図版 34



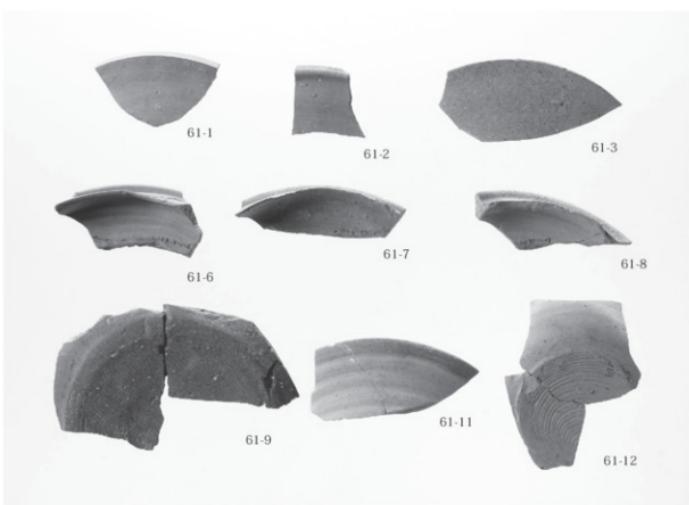
1. SEO1・SIO1 出土遺物 (第 54・58 図)



2. SIO1・北郭包含層 2 出土遺物 (1) (第 58・61 図)

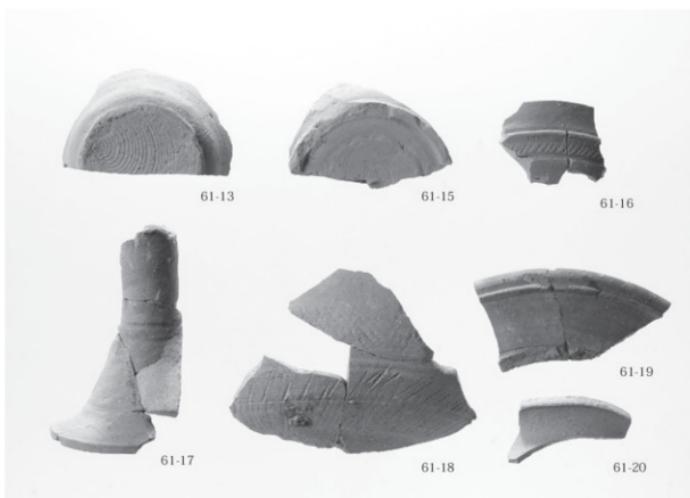


1. 北郭包含層 2 出土遺物 (2) (第 61 図)

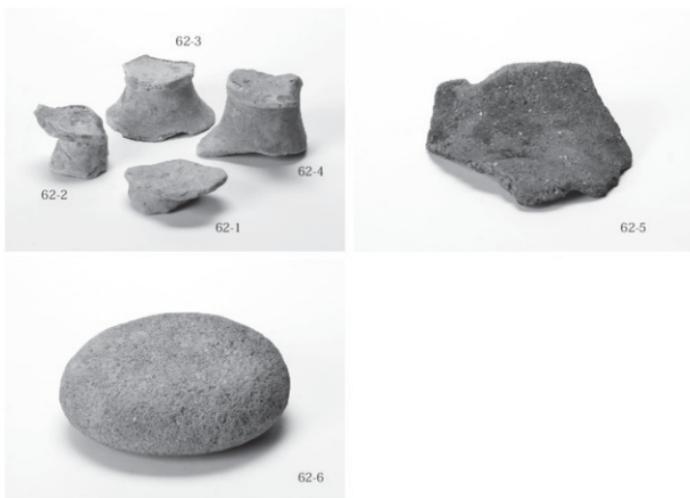


2. 北郭包含層 2 出土遺物 (3) (第 61 図)

図版 36



1. 北郭包含層 2 出土遺物 (4) (第 61 図)



2. 北郭包含層 2 出土遺物 (5) (第 62 図)

報告書抄録

報告書抄録

フリガナ	シズマジョウアト							
書名	静間城跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	一般国道9号(大田静間道路)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	1							
編著者名	今岡一三 阿部賢治							
編集機関	島根県教育庁埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒690-1031 島根県松江市打田町33番地 TEL 0852-36-8600 (代) E-mail maibun@pref.shimane.lg.jp http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/							
発行年月日	西暦 2018年6月22日							
所轄道跡名	所在地	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	道跡番号					
シズマジョウアト 静間城	島根県大田市 シズマジョウ 静間町	32205	A387	35° 12' 12"	132° 27' 58"	20160520 ~ 20161212	4,800	道路建設
道跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
静間城	山城	中世	墻石建物 5棟 礎石建物 3棟 土塁 2基	土師器、土質瓦上質、貿易陶磁器、 須恵器、金屬製品、石製品		山城全縦を発掘調査した点内の事例		
		古墳	前方後方建物 2棟 加工段 3棟	土師器、須恵器				
要約	静間城跡は標高約27mの丘陵上に築かれた山城である。主郭と北郭の2箇所の郭で構成され、握立柱建物や礎石建物が多数検出されている。礎石建物には画面または片面に莊を伴う大型の建物が存在していることから、丘陵上に築かれた居館的な居住空間を兼ね備えた山城と言える。遺物には国産陶器の他に青磁や白磁などの貿易陶磁器も多量に出土しており、遺物の年代範囲から15世紀後葉～16世紀前葉頃の山城と考えられる。							
	また、主郭東側と北郭では中世の構造の古墳から唐時代の窪型建物と加工形が検出されている。							
	上記のことから、古墳時代から中世までの山丘陵が集落等として利用されたことが判明した。							

静間城跡

一般国道9号(大田静間道路)改築工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書1

2018年6月発行

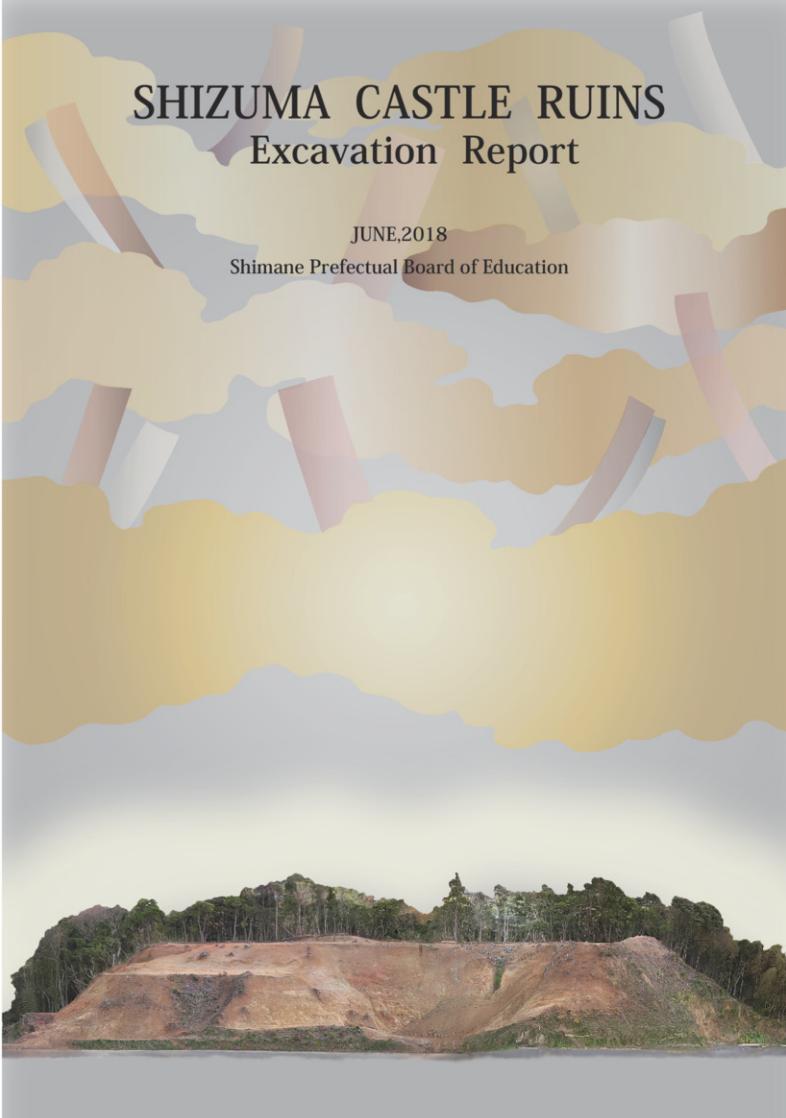
編集 島根県埋蔵文化財調査センター

〒 690-0131

島根県松江市打出町33

TEL 0852-36-8608

印刷 柏村印刷株式会社



SHIZUMA CASTLE RUINS

Excavation Report

JUNE,2018

Shimane Prefectual Board of Education